
美人花

久保アーツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美人花

【Nコード】

N5891E

【作者名】

久保アーツ

【あらすじ】

ヒロキは偶然美しい花を手に入れる。女性の顔を持ち、言葉を話す。感情も知能も人間と同じ。魅力溢れる花をめぐる争いが始まる。

第一章 ヒロキ出会い

「うふふん。」

さわやかな朝には全く似合わない、色っぽい声が聞こえてきた。
マンションの階段から辺りを見回したが、誰もいない。

（若い美女だ。）

勝手に思い込んだ。

声の主を見てみたい、という漠然とした思いを抱いて、仕事に出かけた。

夜、帰ってきた時、又同じ声が聞こえてきた。

「うふふん。」

朝よりもさらに艶っぽくなっている。たまらない色気。
（どこのカップルか知らないが、うらやましい。）
寂しさとみじめさが俺の胸の奥をえぐった。

近所づきあいはないので、どんな人間がこの棟に住んでいるのかわからない。

狭い間取りなので、一人住まいが多いことは確かだが。

三日連続でその声を聞いたとき、俺は何かがおかしいと思い始めた。

その声はいつも俺が出入りするタイミングにあわせて、発せられているようだ。

まるで俺を誘っているかのようだ。

（妄想か。俺がおかしくなってるのかも。欲求不満か。）

そんなこともあって、早速、週末にアキとデートの約束をした。

一応彼女だが、時々あつて関係を持つくらいで、恋愛という感情はなかった。

アキの方も多分同じだと思う。

連絡はまめに取り合つてはいるが、熱い思いはなかった。

その朝、アキとの約束の時間が近づいていた。

俺からお願ひして会うのだから、遅れるのはまずい。

あわて気味に階段を駆け下りて出かけようとすると、あの声が聞こえてきた。

俺は立ち止まって、声のする方向を見た。

誰もいない。再びあの声が。

「うふふふん。うふ。」

今日は声の方向がはつきりわかった。

俺は誘われるままにフラフラと声のする方向に向かって、ゆっくり歩いていった。

声はおかしなことに花壇のほうから聞こえてきた。

あまり手入れが行き届いていないので、雑草が生い茂っていた。声の主は何度も同じ笑い声を繰り返した。

不自然だ。地面から聞こえてくる。

これはいたずらかもしれないと思った。

誰かがどこかで俺の間抜けな様子を見て、笑っているのに違いない。

（もうやめよう。）

変な妄想をした自分が腹立たしかった。

足元を確かめながら、草むらから出ようとしたとき、鮮やかな色をした何かが目に入った。

それは美しい花と葉を持った、見たこともないような植物だった。

明らかに普通のものではなかった。

そんなに大きくはなかったが、拳くらいの大きさの花はまるで若い女性の肌ように美しいピンク色だった。

誰かが大切に育てているのかもしれない。それにしても珍しい花だ。

「うふんふふん。」

俺は驚いてその場にしりもちをついた。

俺が捜していた声の主はこの花だったのだ。

驚いたし、ガツカリした。

俺は何を期待していたのだろう。

最近、いろいろな花が開発されている。

言葉を覚える花。感情を動作で伝える花。

人の気持ちを読んで、その場にあつたにおいを発する花。どれも大ヒット商品だ。これもそんな新種の一つだろう。

知らない間にずいぶんリアルで色っぽいものができたもんだ。

（あつ。アキのことを忘れていた。完全に遅刻だ。）

なにか恥ずかしくなつて、俺が急いで立ち去ろうとすると、急に花が開いて形を変えた。

そして女性の顔がそこに現れた。俺にはつきりと話しかけた。

「ねー、行かないで。私をつれてって。お願い。」

目鼻のはつきりとした美人だった。どこかで見たことのあるような顔、そして表情。

「ねー。お願い。」

俺は返事をするのが怖かった。

俺は狂ったのかもしれない。

とりあえず座り込んでじっくりと観察してみた。

というか魅入られて、動けなかったというのが本当の所だった。

「そんなに見つめないで、恥ずかしい。」

この女、いや花は俺の顔を見て会話している。

信じられない。俺は何か後ろめたさを感じて、まわりを見わたした。

主婦らしい女がこちらに向かって歩いてきた。不審者を見る目で見ている。

俺は立ち上がって、ゆっくりと自分の部屋の方向へ歩いた。

階段に着いたとき振り返ると、さっきの主婦がこちらを覗き込むように見ていた。

俺は軽く会釈をして、階段を上った。心臓が激しく高鳴っている。犯罪者になったような気分だ。どうしてもあの花を手に入れない。胸が苦しいくらいの熱い思いが俺を襲った。

俺はスコップと洗面器を持って外にでた。

もう開き直った。びくびくすることはなかった。あの花が欲しい、それだけだ。

誰かに聞かれたら、堂々と本当のことを言っていればいいのだから。アキのことは完全に忘れていた。

「お願い、つれて行って。」

また同じセリフだ。バリエーションはあまりないのかもしれない。一応質問してみた。

「俺の部屋に来るか。」

まじめに質問している自分がおかしかった。

「うれしいわ。早くつれて行って。」

鳥肌が立った。ちゃんと会話が出る。知能もかなり高いようだ。

俺は花の指示に従ってゆっくりと根っこの部分から掘り返して、

そつと洗面器に移した。

第二章 溢れる愛

幸い誰にも見られずに作業を終えることが出来た。部屋に帰る途中で携帯電話がなった。

アキだ。すでに約束の時間をこえていた。無視して部屋に戻った。

「ゴメン、急用で行けなくなった、又後で連絡する。」

メールを送った。今はアキのことより、この美人花のことが何よりも優先する。

普通の花の世話も、したことのない俺だったが、この花はしゃべってくれるので、どうにかなりそうだ。

「まず何をすればいい？」

花は俺の顔をとろけるような表情で眺めてから、ゆっくりと話し始めた。

彼女の指示に従って、全てやり終えた。

もっと色々してあげたかった。出来ることはすべて。もっと何か欲しいものがあれば。

「遠慮うせずに言ってくれ。何が必要なんだい。」

「あなたが好きな女のタイプが知りたいな。」

写真とか雑誌があつたら見せて欲しいの。」

意外な答えに、返事が詰まった。

「それを見てどうするんだい。」

「自分をそれに近づけて、変形させるのよ。その方がいいでしょ。」

「そんなに自由に形を変えることが可能なのか。」

「少し時間はかかるけど、結構簡単。」

「すごいけど。でも今の君がすきだよ。もし変えるとしても、ほん

の少しだけでいいよ。」

「わかったわ。微妙に取り入れてみるわ。」

俺は遠慮しながら、何枚かの写真を選んで彼女に見せた。

アイドルやモデル、女優。みんな美人ばかりだ。どんな風に真似をするのか、想像がつかなかった。

美人花は真剣な形相で写真を凝視した。その表情が可愛い。それぞれの写真を見やすい場所に置いた。

俺はこの花の情報をネットで捜してみた。

2時間ほど調べたが、情報は見つからなかった。

専門家が質問に答えてくれるサイトをいくつか見つけたので、チェックしておいた。

こんなにすばらしい花がニュースにもなっていないのが不思議だった。

もしかしたら、俺が知らないだけで、だいぶ前にブームになっていたのか。

いやそれなら、情報が残っているだろう。いろいろ考えてみても、何もわからなかった。

「もういいわよ。」

美人花が俺を呼んでいる。

あわてて行ってみると、花は少し疲れているようみえた。

「しばらく眠らせて。今度目覚めたら、変化した私にビックリしてね。じゃ、おやすみ。」

花は自分の葉を、つつみこむように動かして、隠れた。寝る時は隠れるらしい。

俺も酒を飲んで寝ることにした。神経が興奮していて、このままでは寝つけそうもない。

酒の準備をしていると、携帯が鳴った。

アキが留守電に喋っている声が聞こえてきた。

「すっぱかしのヒロキ君ですか。アキです。」

明日の予定はどうなってる？私、ひまなんだけど…。

なんかして遊びませんか。久しぶりにそっちにいつてもいいし…。

とにかく、またかけるわね。」

何か変化を感じ取ったのだろうか。今までのアキとは感じが違う。俺とアキとの関係はドライなものだ。

お互い、干渉せずにつきあって、適当に寂しさをまぎらわす都合のいい相手。

まー今日は、俺が勝手にデートをドタキャンしたのだから、償いをしなくては…。

あまり気は進まなかったが、早速電話をかけた。待っていたかのように、すぐにアキがでた。

「留守電きいてくれたんだね。ごめんね、こんな時間に。」

いつもより、優しい話し方だった。

「いやいや、俺こそ今日は悪かった。急な用事だったから。」

「いいのよ。一人で映画観て、ショッピングして。結構楽しんできたわ。」

「そうかー。」

「でもやっぱり……寂しかった。」

急に今まで聴いたことのないような、重たい声の調子になった。

「明日、会える？」

「あー。もちろん。」

「うれしい。」

こんなことを声に出して言う女だとは思ってもみなかった。

「久しぶりに、あなたの部屋に行きたいなー。お掃除も料理もサービスしちゃうよ。」

何故今日に限って部屋に来たがるのか、女の勘は恐ろしい。

「いや、おれがなんかお詫びしないといけないんだから。まあ、明日の食事は、少し豪勢におごらせてくれよ。」

「じゃーその後あなたの所に行く？」

「いやー、やっぱりホテルがいいよ。いつものようにさ。いやかい？」

「そうね。いつものようにね。」

時間と場所を決めて、電話を切った。なぜかどつと疲れた。今までは癒されるために、アキと付き合っていたのに。

第三章 変身

朝目覚めた時、昨日怒った事を、頭の中で整理してみた。

すごい美人の花・・・自由に会話を交わすことが出来る。

甘い言葉・・・切なく甘えたような表情・・・

胸が苦しいほどの恋心・・・。

現実かどうか、自信がなかった。

隣の部屋にいるはずの美人花を見に行くしか、確かめる方法はなかった。

部屋に入るとすぐにあの美しい声が聞こえてきた。やはりそれは現実だった。

「昨日はよくねむれた？」

彼女をみて驚いた。もう美しいという言葉では表現が不十分だと思った。

これほど美しい顔はみたことがなかった。変身は見事に成功していた。

前の美しい顔をさらにワンランク、いや数段レベルアップしていた。

「新しい顔、お気に召して？」

美人花に見とれて、絶句している俺をからかうように、甘い声で問いかけた。

「なんてきれいなんだ。」

こんなセリフを言っている自分に驚いた。

もう俺は、恋の虜。

魔法にかかったように固まって、ただじっとみつめていた。

「ねー、お願いがあるんだけど。」

「何でも、いつてくれ。」

「あなたの名前、ヒロキでしょ。」

「ヒロキとお似合いの名前を私につけてほしいの。」

「俺が名前を。」

「そうよ。私にはあなたしかないのよ。」

俺の体に電流が走った。無意識で、もう逃れることは出来ないと悟った。

悦びの瞬間でもあり、覚悟した瞬間でもあった。

「ゆっくり考えよう。とっておきの名前にしないと。」

「楽しみー。」

花の変化は顔だけではなかった。

髪の毛のようなものを形成していた。美しい藤色で、今流行の髪型だ。

さらに茎の部分にも変化は起こっていた。首の部分ができていた。

あまりじろじろみていると、下心を見透かされているようで、恥ずかしくなった。

人間と比べれば半分ほどの大きさだが、充分生々しい魅力を持っていた。

「顔以外のところも変形させるんだね。」

「初めてなの。慣れたら、もっと上手く出来ると思うわ。」

上半身、さらに全身がつくれるのであれば、

これはもつすごい事になる。

俺はたぶん欲望を抑えられなくなるだろう。

でもそれを言葉に出すわけにはいかない。

とんでもなく、恥ずかしい。

そんなことを考えている自分を醜いと思った。

世界でもっとも美しい花に激しく恋をしている。

それでいい。今の状態で充分幸せだ。

「今までは顔だけ変化させてきたのかい。」

「そうよ。顔はこれで4回目よ。私、生まれて今日で60日目よ。」

「親は？」

「いない。私が初代なの。」

こんな突然変異が自然発生するはずはない。

どこでどうやって生まれたの？とはきけなかった。

誰が何の為に育てた、または創ったのか。

知りたいが、恐ろしい。何故だろう。

それは彼女を失ってしまう恐怖。

だけど、いつかはつきりとさせなくては。

ため息が出るほど切ない恋心。

頭の中は100%花のことで占められている。

花をおいて出かけるのが不安だ。離れたくない。

ずっと一緒にいたい。

彼女の言うとおりに水や温度、日当たり等を世話した。

「なるべく早く帰ってくるよ。」

「寂しいけど、我慢して待ってるわ。」

「君をずっと見ていたい。たまらなく好きだ。」

「私もよ。」

「愛してる。本当だよ。」

「うれしい。」

俺は自分で何をどうしたらいいのか、わからなかった。

相手が人間なら激しく抱きしめていただろう。

そつと髪の部分をなでた。

髪の毛が反応して波のように動いた。

俺の手に今まで味わったことのない素晴らしい感覚が伝わった。

驚きと悦びでめまいがした。

彼女の顔も紅くなっているような気がした。

「すごい感触。信じられない。」

「私も同じ。すごい。」

もしもう一度試したら、間違いなく歯止めが利かなくなる。

「続きは帰ってからにしよう。」

鼻息が荒くなっていたが、かろうじて言葉を発した。

「うん。わかった。なるべく早く帰ってきてね。」

はつきりいって、もうアキとのデートなんかどうでもよかった。
でも昨日のこともあるので、キャンセルするわけにはいかない。

仕方がない。気は乗らないが、行くしかない。

第四章 恋の虜

アキとのデートは、空虚なものだった。

お洒落な店で贅沢な食事。

高価な一流ホテルの一室でお互いの欲望を満たす。

いつもと同じ。

違うのは俺の気持ちだけ。

裸のアキを見ながら、あの花の名前を考えている自分がそこにいた。

「ねー。なんか心配なことでもあるの？」

「何故そんなことを聞くんだい？」

「だって、さつきからずっと他の事考えているでしょう。全然楽しそうじゃないんだもん。」

「ごめん。仕事のストレスだよ。精神的に疲れてるのかな。」

「私に飽きた？」

「そんなんじゃないよ。ただ疲れているだけさ。それもゆっくり休めば回復するよ。」

その後二人とも黙ってしまった。

長い沈黙に押しつぶされそうだった。

沈黙を破ったのはアキだった。

「ねー、あなたの部屋に行きたい。」

「何のために？」

「あなたの生活の一部になりたいの。だめ？」

「どうしたんだ？いつもの君じゃないぞ。」

「私にもわからない。ただ、あなたに捨てられたくないの。」

「やめろよ。らしくないよ。」

体中からいやな汗が、噴出していた。

何故おれが負い目を感じなくてはいけないのか、わからなかった。

「わかったよ。とにかく来週にしよう。」

ちゃんと部屋もきれいにし、招待するよ。

美味しい手料理を食べさせるよ。」

「今日じゃだめなの？」

なかなか納得しない。これも彼女にしてはめずらしい。

「今日は勘弁してくれ、ゆっくり休みたいんだ、それだけだよ。」

何故急にアキが変わったのか。俺が変わったからか。

そうかもしれない。

もしあの花に出会わなかったら、アキとの関係も何も変わらなかっただろう。

なんとかごまかして帰ってきた。一秒でも早く美人花に会いたかった。

「おかえりなさい。」

「ただいま。一人で寂しかったかい？」

「大丈夫、ずっとあなたのことを、考えてたの。」

「俺も。君の名前を何にしようか、ずっと考えていたんだ。」

「それで、決めてくれたの。」

「あー。気に入ってもらえるかどうか心配だけど、やっと決めたよ。」

「なんていうの、はやく教えて。」

「レイナ、ってどうかな。」

「素敵。もう一度言って。呼びかけるよう言ってみて。」

「レイナ、好きだよ。」

「うれしい。」

レイナは涙ぐんでいた。

それを見て俺も泣きそうになるのを、必死でこらえた。

この前と同じようにレイナの髪に触れた。

髪が俺の手を追いかけるかのようにからみつく。

そしてあの信じられないような感覚が体を包んでいく。

「もっと顔を近づけて。キスして。」

「うん。」

正直、少し恐怖を感じた。

これ以上の快感に、体や心が耐えることが可能なのかどうか。しかしためらいはしなかった。

レイナの唇はやわらかくて、ひんやりとしている。

美しい顔は近くで見ると余計に美しく感じる。

目をつぶっている彼女の顔がいとおしくてたまらない。

レイナの髪が俺の頭全体を包み込むように絡み始めた。

天にも昇るようなとは、こんな感触に違いない。

俺は気を失いながら、かろうじて言葉を発した。

「ありがとう。」

どれくらいの時間がたったのか。

目覚めた後もしばらく脳が働きを停止していた。

起き上がろうとしたが、体が鉄のよろいを着ているように重い。

ようやく立ち上がって、時計をみると一時間ほどだった。レイナも気持ちよさそうに眠っていた。

（幸せ）という平凡な言葉が頭に浮かんた。

がたがたしていると、レイナも目を覚ました。

「うるさくしてごめんね。」

「いいの。あなたが失神したから心配で、どうしようかと思ったのよ。」

しばらくしたら、満足そうな顔をして寝ていたから安心したけど。」

「もう大丈夫だよ。ビックリしたけどね。こんな感覚は味わったことがないよ。」

「私も。」

「君も快感を感じているの？」

「すごく。思い出しただけで息が荒くなるくらい。」

その時、外で何か物音がした。

あわてて何かにけつまずいたような音。

急いで窓の外を見ると、体格のいい男が、退屈そうに立っている。今の物音とは関係なさそうだが。

嫌な感じだ。

俺の中で不安な気持ちが広がっていく。

あまりにも大事なものを手に入れてしまったから。失うのが怖い。考えたくもない。

だけこのまま、こんな日々が続くはずがない。直感的に理解していた。

第五章 トラブル スタート

「心配だ。完璧に君を守る方法なんてあるはずがないんだけど。」

「私はずっとヒロキのそばにいたい。」

「それができれば一番だけどね。」

何かしなければいけない、けど何をすればいいのかわからなかった。とにかくレイナの横にベッドを移動させて、寝ることにした。

耳障りな目覚ましの音でやっとおきた。ひどい朝だ。体も頭もひどく疲れている。

レイナとお楽しみの代償ってことだろう。

「お休みしたら。とつてもつらそうよ。」

「いや。今日は大事な仕事があるんだ。休むわけには行かない。」

レイナの声ですこし気分がよくなった。

いやいやながら何とか身支度を終えて、出勤することになった。

データを管理するだけの単調な仕事なので、少々疲れていても問題はない。

国に雇われている身分なので気楽だ。

ただし今日は月に一度の会議で、しかもプレゼンテーションをしなければいけない。

準備はとつくに終えていたので、安心していたが。

あくびをしながらバス乗り場に行くと、並んでいた男が列を離れて、帰っていった。

忘れ物でもしたのだろう。

寝ぼけているのは俺だけではないらしい。

座席に座って、カバンからデータとメモを出そうとした時、俺は蒼ざめた。

カバンに入れ忘れた。あれがないとどうしようもない。すぐに取りに帰るしかない。

次の停留所で降りて反対のバスを待った。

電話で上司に事情を説明して、会議の順番を変えてもらうことにした。

やはり疲れていると色々ミスが重なる。

階段をかけあがって、部屋に入ろうとした時、人の気配を感じた。そつと鍵を開けて中に入った。全身から汗が噴出していた。居間に誰かがいた。女だ。

レイナを食い入るように観察している。

見たことのある服だ。

「何をしているんだ。」

わざと低い声で話しかけた。興奮させるのが怖かった。女がびくつとして振り向いた。

やっぱりアキだった。

「びつくりしたー。心臓が止まりそうになったわ。」

「こつちの方が驚いたよ。何をしているんだ。何故、俺の部屋に入っただ。」

「怒らないで。悪いことだとはわかっていたけど我慢できなくて。」

「何のことを言っているんだ。」

俺は怒りを必死で抑えながら、話した。

レイナは髪の毛で顔を隠している。

俺はめまいがするほど動揺していた。

「あなたが夢中になっている何かを探りにきたの。」

早くレイナの無事を確かめたかったが、あわてるとかえってまずいことになりそうだ。

「夢中になっているものなんて別にないさ。」

「うそはやめて。私、知ってるのよ、この花でしょ、あなたが熱をあげているのは。」

俺はうつたえて、言葉が出なくなってしまった。

「でも、この花の何がそんなにいいの？花の色は変わってるけど。」

「たしかに、俺はこの花を大切にしているが、それだけのことさ。」

今まで植物に興味がなかったけど、あらためてその美しさに気が付いた。

「やめて。そんなの説明になってないわよ。」

もし本当にそれだけのことなら、これを捨てて、他の高価な花と取替えて。」

アキは何を根拠にこんなに強気に攻め立てるのだろう。

何故俺は必死で言い訳しているのだろう。

アキは何をどうしたいのだろう。

頭が混乱して息苦しかった。

「私がこれを、こうしたらどうする。」

といいながら、アキがレイナの髪の毛をグイッとつかんだ。

「やめろ。」

「すごく怖い顔。じゃもっとやさしく引き裂いてあげよかな。」
といいながら両手をレイナに近づけた。

俺は咄嗟にアキの手首を捕まえて、ひねりあげた。
「痛い。」

とアキが叫んだ瞬間、誰かが俺のわき腹を殴った。

激痛でアキの手を離して座り込むと、首に重い蹴りが当たった。俺は倒れこんで、うめき声を上げた。

「もうやめて。充分よ。」

アキの声だ。

見上げると、レスラーのような体格の男が仁王立ちしていた。アキが高飛車にしかった。

「もう少し丁寧にして。私の大事な人なんだから。」

「はい。すみません。つい力が入ってしまったので。」

どうやらアキのボディガード的な役割の男らしい。

いつの間に部屋に上がりこんだのだろう。

そして何処かで見た事がある顔。

そうだ、昨日の夜、外に立っていた男だ。

今朝バス停から帰った男もこいつだ。

ということは俺を監視していたのか。

「今日は帰るわ。でもまだ話は終わっていないのよ。

近いうちに速水という男が会いに来るから。

この花のことも、私のこともすべてはつきりさせてあげる。」

俺は床に這いつくばったまま、アキの言葉を黙って聴いていた。

「これだけは覚えておいて。

私はあなたを離さないわよ、絶対に。」

第六章 レイナ秘密

二人が部屋を出て行くと同時に、俺は痛みをこらえて立ち上がった。

「レイナ、大丈夫か。」

レイナが髪の毛をゆつくりと持ち上げて、美しい顔を見せた。

「私は平気よ。あなたこそひどいことされていたけど。」

「俺はいいんだ。アキ、いやあの女に何かされたのかい。」

「あちこち触ってたけど、傷つけるようなことしなかったわ。」

でも怖かった。すごい顔してにらむの。私ずっと顔を隠してたんだけど。」

「それでいいんだよ。ちょっと変わった花くらいに思わせておかないと。」

でもなぜここに来たんだろう。誰かに何か聞いたんだろうか。

あの男はアキの何なんだ。」

俺は独り言のようにつぶやいた。

その時、意外な事をレイナが言った。

「私あの二人を見た事があるような気がする。」

はつきりしないけど、たぶん間違いない。

私が生まれた研究所で。」

レイナの誕生にアキが関係している？研究所？

「その頃のことを・・・」

携帯が鳴った。上司からだ。仕事のことはすっかり忘れていた。今から会社に出て行く気は全くなかった。

「どうもすみません、遅くなってしまいました。実はちょっとした事故にあいまして・・・」

「いや、それはもういいんだ。」

「あのデータはすぐそちらに送りますので・・・」

「いやその必要はもうないんだ。」

「えっ。といいますと・・・」

「本当に急な話なんだが、君には別の部署に移ってもらうことになった。」

「ついさつき決まった話だ。」

「そんな、今朝はまだ・・・」

「そう、10分ほど前にある人から要請があったそうだ。」

「ある人？何故わたしが。」

「細かいことは知らない。まー、君にとっては悪い話ではない。

別の部署といっても、はつきりって別の巨大な組織だ。

見方によつては大出世さ。」

「その組織というのは・・・」

「わからん。とにかくもうすぐ君の所に速水さんという方が説明に来られる。」

その人に色々聞いてくれ。今の君の仕事は全部桜井君が引き継ぐことになった。

そのつもりでよろしく頼む。では元気でな。」

「あの・・・色々お世話に・・・」

言葉の途中で電話は切られた。速水という名前が俺の心に突き刺さった。

アキが告げた男の名前と同じだ。同一人物だろうか？

別に今の仕事にも、職場にも、人間にも思い入れはなかった。しかし急に奪われると、なぜか寂しい。

上司のそつけなさも物足りなかった。
でも考えてみれば何の個人的な付き合いもなかったわけで、
当然といえば当然だ。でもむなし。

「ヒロキ、元気を出して。」

レイナが髪の毛を俺に絡ませる。

さっきまで体も心も痛めつけられて、

ギリギリの状態だったのに、すべてが回復した。

信じられないほど元気になっている。

俺は立ち上がってレイナにキスをした。

例の感覚が俺を包み込む。

そして夢の中に・・・。

目が覚めると夜だった。

12時間あまり寝ていたことになる。

「どう、気分は。」

レイナは俺を見守るようにみつめていた。

「俺は何をすればいいんだろう?」

「何もしなくていいのよ。私のそばにいて。」

「そうだな。それが一番大切なことだ。」

でもそのためには何かをしなくてはいけない。」

必死で考えてみても、何も解決はしない。

あまりにもわからないことが多すぎる。

「どこで生まれたか、覚えているかい。」

しばらくの沈黙の後、レイナがゆっくりと話し始めた。

「研究所の一室、ここと同じくらいの広さで、3、4人が働いていたわ。」

目的は、言葉を理解して話し相手になる能力を持つ花を作ること。」

「そこにアキとあの男がいたのかい？」

「たしか見学に来たと思うの。他にも数人が。」

「それは誰の研究所？国の機関？」

「よくわからない。」

「君は何故このマンションの花壇に置かれていたんだろう？」

「それは、あなたに会うため。」

「俺に会うため？初めから狙って俺を？何故？」

「それは」

その時ちょうど電話が鳴った。

まるで計ったようなタイミング。

「もしもし。」

「もしもし、はじめまして。私、速水といいます。」

お嬢様と会社の方から聞いておられると思いますが。」

「はい。色々教えていただけるといいことです。」

「早速ですが、今からそちらに伺ってよろしいですか？」

「どうぞいらしてください。」

「それでは5分ほどで、着くと思います。詳しい話は後ほど。」

第七章 速水の想い

俺はレイナを奥の部屋に隠した。

たぶん速水という男はアキから話を聞いているだろう。でも少しでも安全な場所をレイナに提供したかった。

本当に5分で速水はやってきた。

「はじめまして、速水です。とても初めてとは思えませんが。」
「何のことですか？」

「いやいや、私はあなたの事をとてよく知っています。あなたは全然私のことは知らないわけですが。」

何を言いたいのかわからなかったが、この男はただものではないことがすぐにわかった。

映画に出てきそうな整った顔、さっきの男にも負けないほどの鍛えられた肉体。

音も立てずに滑らかに動く身のこなし。一般人にはない鋭い目つき。怖いものは何もないというような落ち着いた話しっぷり。

「ひとつずつ説明していきましょうか。」

まずあなたとこの3年と4ヶ月つきあってきた女性、

あなたが「アキ」と呼んでいる方ですが、本名は徳吉亜佐美。

日本、いや世界でも有数の企業の創業者の一人娘です。

ただこの組織は秘密が多すぎて一般には知られていません。」

念のために聞いてみたが、たしかに知らない企業名だ。

「アキはなぜ何故偽名を。」

「あなたと普通の恋をするために、身分を隠そうとしたのです。」

「俺を相手に？」

「どこであなたを見つけたのかは、私も知りません。そして何故あなたを選んだのかも。失礼ですがこれといって・・・。」

あとの言葉を飲み込んだ。意外と気を使う男なのかも。

「とにかくお嬢様はあなたを選んだのです。そしてタイミングを計っていた。」

「何の？」

「結婚です。」

「結婚？俺と？」

「そうです。亜佐美お嬢様はあなたと結婚することを夢見ているのです。」

「そんなこと、これっぽっちも。」

「自然とあなたから言わせるように、色々考えて・・・。」
「信じられない。」

「私はずっと反対でした。今も変わっていません。」

「あなたは彼女の・・・。」

「恋人役であり、兄代わりであり、ボディガード役でもある。」

私はお嬢様が14歳の時にボーイフレンド役の男として選ばれた。

私は18歳でした。

色々相談にもものつたし、付き人としてあちこち一緒に行かせてもらいました。

兄代わりになることもあります。それら全ては私の喜びです。生きがいなのです。

私は彼女のために存在している人間なのです。」

彼の声が段々大きくなり、興奮しているのがわかった。

速水は間違はなくアキ、いや亜佐美を愛している。

俺とは違つて本当に心から想っている。

「こんなことを言つたら怒られるのかもしれないが、俺は彼女のことを、真剣に考えたことはない。

愛というほどの思いもない。それは彼女にもわかつていることだと。

」

「もちろん私もお嬢様もそんなことは承知しています。だから私は反対している。

でもお嬢様はどんなことをしても、あなたを手に入れようとするでしょう。」

「手に入れるつて。そんな人を物みたいに。」

「あなたはお嬢様にとって、どうしても欲しいアクセサリーみたいな存在なのです。」

「だとしても俺の気持ちに関係なく、人生を・・・」

「まだあなたは理解していないようだが、彼女の力は絶大です。もちろん父上の権力、財力がそうさせるのですが。

誰も逆らうことは出来ないといつても、言い過ぎではないでしょう。」

」

「俺は彼女の思いどおりにはならない。」

「さあー。それはどーでしょうか。考えてみてください。今あなたの仕事はどうになりましたか？

誰のせいでそうなったと思いますか。」

たしかに仕事を取り上げられて、職場を変えられて、

もう以前の生活には戻れない状態だ。

それが全てアキ、いや亜佐美のせいだとしたら……。

「わかりますか。あなたは永久に逃れることは出来ないのです。あの花、レイナからも、亜佐美お嬢様からも。」

驚いた。何故レイナの名前を知っているのだ。

レイナから逃れることが出来ないというのは……。

「あの花をあなたにプレゼントしたのは、私なんですよ。」

「プレゼント？」

「まー本当はお嬢様からあなたを引き離すために、私が考えた陰謀だったのですが……。」

俺は彼の言葉にショックを受けて頭がクラクラした。

「あの美人花を開発したのは私の叔父なのですが……。」

喋る花の研究は長年にわたる一大プロジェクトだった。

しかし失敗の連続。

もう計画自体の打ち切りが間近に迫っていた。

そんな時、偶然が重なって奇跡が起こった。

今までの花とは全くレベルの違う美人花が誕生した。

その花ははつきりと言葉を発音するだけではなく、言葉を理解して会話をする。

さらに記憶をして、思考する。感情もある。

そしてその花の部分は人間の女性の顔のようだ、しかもとびきりの美人。

表情も豊かで、相手の好みにあわせることさえ出来る。

待ちに待った美人花の誕生。

しかしそれは上層部に報告されることはなかった。

奇跡の美人花が誕生したことを知っているのは三人だけ。

博士とその妻、そして助手。

博士はこの花を別の組織に売ることを考えていた。

助手と二人で、こそこそと裏切りの計画を進めた。

莫大な金と、約束された一生安泰の地位。

今の虐げられた惨めな暮らしを終わらせたかった。

博士は、妻も反対する理由はないだろうと思った。

しかしそんなに単純には物事は進まない、それが現実というものだ。

「さつきも言いましたが博士は私の叔父、助手は私の弟、そして博士の妻は私の愛人です。」

俺は混乱して、これ以上何も理解できない状態だった。

「私達、速水一族は組織内に80人以上います。

この前あなたを痛めつけたのも私の弟です。

我々一族は普通の人間ではありません。」

第八章 速水一族

「我々は組織のために存在する人間です。

違う言い方をすれば、ある役割を果たすために人工的に作られたヒトなのです。」

細胞や遺伝子のレベルから計算されて作られた生き物。

我々、速水一族全員が兄弟や親子と言っていていいでしょう。

しかしそれぞれが、はっきりと目的に沿って、

作られているので、よいいな競争や嫉妬とは無関係な世界です。

私は雄としての能力が最大限に引き上げられた人間です。

外見、筋力、反射神経、精力、すべて超人的です。」

まるで他人の話をしているようで、不気味だ。

「私は亜佐美お嬢様の相手に選ばれたといいましたが、

もっと正確に言えば、何人もの速見一族の中から選ばれたのです。

亜佐美お嬢様の相手として作られたのは私だけではない。

しかし私が選ばれたのです。」

アキと速水が抱き合っている映像が頭をよぎった。

「あなたも今想像した通り、私はずっとお嬢様の性のパートナーです。」

私がお嬢様の最初の相手ですし、今でも続いています。

あなたと付き合うようになってから、回数は少し減りましたが。

私は彼女の全てを知っています。」

なぜか、嫉妬心が湧き上がってきた。

何となくだが、俺はアキ、いや亜佐美の唯一の男・・と思っていた。クールな関係だが、俺だけが独占していると勝手に思っていた。

別に愛しているわけでもないが、なんだかアキに対する気持ちの変化を感じた。

「それなら、君が彼女と結婚すればいいじゃないか。
君が彼女を思うその深い気持ちがあれば、どうにかなると思うけど・・。」

「さきほどもいいましたが、私は人工的に造られたヒトです。
亜佐美お嬢様ほど身分の高い人間との婚姻関係は無理です。
会長達もそれは全く考えておられません。

それに私には妻がいます。いずれあなたにも会わせますが、
平凡で退屈な女です。」

俺には理解しにくい愛の形。この男の望みは何なのだろうか。
なぜか、この男が幸せになって欲しいと本気で思った。

「アキ、いや亜佐美は君の事をどんな風に思っているんだろう。
たとえば君が結婚した時、亜佐美は何か言ったかい？」

「あの時、今から4年前ですが私が28歳、亜佐美お嬢様が24歳。
お嬢様に結婚することになったと告げました。
結婚は会長の命令であること。

相手の女にまだ会ったこともないし、名前も知らないこと。
お嬢様は黙って聞いていました。
そして、私達の関係は何も変わらない、と言ってくれました。」

「やはり亜佐美は君を愛しているのでは？」

「違います。残念ですがお嬢様が愛しているのはあなたです。あなたを手に入れるためにはどんなこともなさるでしょう。」

しばらく沈黙が続いた。俺達は相性がいいみたいだ。何でも話せる相手。そんな気にさせた。

しかし話が弾みすぎて、何が主題かわからなくなった。

「本題に戻りましょう。」

レイナは我々が作った非常に利用価値のひろい最高級な商品、しかも第一号です。

何十億という研究費がかけられました。

レイナに値段はつけられませんが、たぶん数千万円は・・・」

急に現実に戻った。俺は今追い込まれている。

レイナと一緒に安全な所へ身を隠さなくてはいけない。

しかし仕事も失い、居場所も知られているとなると・・・。

「実はずっと、あなたとレイナを観察させてもらいました。

そしてレイナが能力を、自ら開発していくことに驚きました。

それに、ちょっと失礼だとは思ったのですが、

あなたとレイナの愛の交わりも見えてしまいました。

なかなか幻想的で感動しました。」

なぜか、腹は立たなかった。むしろホッとした

ずっと見られていたことは恥ずかしいし、怒るべきことだろう。

しかし、俺達のことを理解してもらえる人間がいることのほうが嬉しかった。

「いつから覗き見していたんだ？」

「あなたがレイナを連れてくる三日前からです。博士の妻、私の愛人でもある佳苗が、レイナをここの前にある花壇に植えておいた。」

あなたに見つけてもらうために。

大切な商品ですからずっと見張っていました。2日目にあなたは気づいてレイナを持ち帰った。全て順調に計画通り進んだということです。」

「あの時こつちをみていたオバサン風の・・・」

「そうです。佳苗です。非常に優秀な学者です。」

夫の愛には恵まれません。」

「レイナを育てたのは彼女です。」

博士は誕生に関っただけで、あとはすべて佳苗が世話をしたのです。もちろん実験結果や成長記録など、全てのデータは博士達によって管理されていました。指示を出していたのも博士です。

しかし愛情を持ってレイナに感情や知性、女の生き方などを教え込んだのは

佳苗なのです。レイナは佳苗のことを愛しています。まるで母親を想うように。」

「それで、なぜ俺にレイナを拾わせた。」

「あなたとお嬢様を別れさせたかったのです。」

私は忠告しました。男と女は必ず別れる時が来る。

男は決して同じ女を同じエネルギーでは愛し続けることはできないものなんだと。

しかしお嬢様は納得しません。ヒロキは決して裏切らないと。

そこで私は秘密プロジェクトである美人花の話を持ち出しました。どんな男もその魅力には逆らえない。ヒロキも例外ではない。夢中で他の何よりも美人花を愛するだろうと。

それを聞いたお嬢様は、すごい剣幕でその美人花を持って来て、と叫びました。

そしてもしヒロキが花を手に入れても、変わらなければ、もう文句は言わせない、と吐き捨てるようにわめいていました。」

「何でそうなるのかよくわからないが、それだけの理由で・・・」

「他にも、まだ理由があります。

博士、私の叔父ですが、野心に満ちた男です。組織を裏切って美人花を売ろうとした。

そして佳苗達にも協力してもらえろと考えた。ところが佳苗は夫を憎んでいた。夫が破滅するのを望んでいるのです。

彼女は愛人である私に、その計画を教えてくれた。

私は驚きませんでした。

いつかそういうことがあるに違いない、と思っていたからです。

まず取引をさせないことが先決でした。

幸い彼らはレイナを、監視の届かない所に移しました。こっそり持ち出すためにです。

私は佳苗に頼んで、レイナを持ち出してもらいました。

彼はあわてました。誰が寝返ったかは明白でした。

妻の裏切りは意外だったのか、かなりのショックを受けたようです。

彼らの裏切り未遂が上層部に報告された時、処分は私に任されました。

私は、博士と助手を呼び出して話をしました。
これから一生かけて、罪を償え。

研究に没頭して成果を上げろ、それが唯一お前達の生きる道だと。」

「君は叔父さんと弟に対しても容赦しないんだね。」

「組織内は速水一族ですから。

いちいち情をかけるはがありません。それはお互い様です。

博士に対しては、昔からむしろ敵意を持っていました。
ライバルと言ってもいいかもしれません。

組織内で速水四天王と呼ばれていた4人の実力者。

私と博士と兄、そして従兄弟。

私達速水一族は組織内では番号で呼ばれます。

例えばこの前あなたを蹴り上げた弟は速水463です。

博士の助手は速水562。

そして一族の中でも特に優れているエリートだけがアルファベットで呼ばれます。

博士は速水G、私は速水F、兄はもう亡くなりましたが速水M、
そしてあなたがよく知っている速水T、私の従兄弟になります。」

「俺がよく知っている？速水という知り合いは。」

「桜井ですよ。あなたの部下として働いていた。

もちろん偽名です。君を監視しながら他の任務もこなしていた。
優秀な男です。又近々再開することになるでしょう。」

「桜井が……」

「さて、とにかく私の計画では、
あなたがレイナに夢中になって、お嬢様はあなたを見放す。
となるはずでしたが、事情が変わりました。」

いよいよ話が佳境に入ったようだ。

「なぜこんなに我々の秘密や込み入った事情を
長々とあなたに話したか、わかりますか。

あなたは知ってはいけないことも、たくさん知ってしまったのです。
」

やはり殺されるのか、何処かに連れて行かれるのか。
何にしろ、もうあきらめるしかない。

この男や組織、亜佐美に対抗できる手段はなにもない。

「あなたは、我々にとっても必要な人間になったのです。
逃れることは出来ません。

そして残念ですが、あなたはもうすでに廃人です。」

第九章 死の宣告

「廃人って、俺が？」

「まだ実感はないでしょうね。」

でも、あなたはもう、普通の生活には戻れない体です。

これは、私の責任です。だからという訳ではないのですが、我々にあなたとレイナの面倒を見させてくれませんか。」

何故？本当に？体の何処が？

しばらくパニックだった頭がはじき出した答えは、
うそ、罠。

「俺は元気だし、何も問題はない。何を根拠に俺が廃人だと。」

「もしレイナから三日も離れれば、はつきりと禁断症状が出るでしょう。」

まだ実験段階なので、はつきりとは言えませんが、

そのままの状態を続ければ、命の危険さえあるかもしれません。」

「ばかな。なんの根拠が。」

「本当のことを言いますよ。」

レイナはもともとペットや趣味、娯楽のために作られたものではありません。

実は兵器なのです。気が付いた時にはすでに手遅れになっている、という巧妙な罠のような、殺人兵器なのです。」

「何の話をしているのか俺には全くわからない。」

もつとストレートに説明してくれないか。」

「レイナはその美貌だけではなく、麻薬を使って男を虜にします。そして甘い言葉でキスをせがみ、官能の世界へ引きずり込みます。」

さらにあなた達を観察していて、驚いたことに・・・」

しばらく待つていたが、あまりの長い沈黙に我慢できなくなった。
「それで何だ？続きを話してくれ。」

速水は気が乗らないそぶりを見せたが、しぶしぶ話し始めた。
「あなたとレイナが交わっている時、何が起きているか、あなたにはわからないと思います。」

私は別室で観察していたので、ゆっくり見ることが出来ました。

あなたがレイナとキスして、意識が朦朧とした後、
レイナは髪の毛をあなたの体に差し込みました。
全身に、何ヶ所も。

そしてあなたから、様々なものを吸い取ったようでした。
あなたは快感と引き換えに、体から何かを奪われたのです。
我々もこの件に関しては、初めて起こったことなので、
はつきりとはわかりません。データもありません。

でも何かが行われたのです。
とにかく、我々の研究室に来てもらって、色々調べてみないと。」

「要するに俺がレイナによって麻薬中毒にさせられたと。」

「それもたぶんかなりの重症だと思います。やがて精神に異常をきたすか、

衰弱して段々・・・。」

「でたらめを言って、俺をだまそうとしてもそうはいかないぞ。」

「私はあなたをお嬢様から引き離すためにレイナを使いました。
しかし今、本当に後悔しています。」

あなたに悪いことをした、と本当に思っています。

だからこうして、すべて隠さずに話しているのです。

今回の件で、レイナの能力は驚くほどの進化を遂げました。まだまだ可能性を秘めているかもしれません。

それを支えているのは、間違いなくあなたです。

我々組織もこの事について、あなたの重要性を認めています。」

レイナと話したい。色々聞きたいことがあった。でも、もうどうでもいいと思った。

レイナと後わずかな時間でも、一緒にくらせて、又あの快感を……。別に命は惜しくもない。

「わかってもらえましたか。

あなたにお願いすることは二つあります。

まず、私達研究所で、ゆつくりレイナと暮らしてください。

それだけでいいんです。それがあなたの仕事です。

給料は今までの20倍支払います。

我々はあなたとレイナの生活、全てをカメラで記録させてもらいます。

悪い話ではないでしょう?」

たしかに悪い話ではない。

経済的にも、保安上も。

「亜佐美は?」

「夜は必ず新居に帰ってもらいます。

妻となる亜佐美お嬢様が待っている家に。」

「どうせ拒否することは出来ないんだろう。

亜佐美はレイナのことや、いきさつは全て知っているのか?」

「いいえ。知ってらっしゃるのはごく一部の情報です。」

レイナがあんなきれいな女であること、知能が高くて会話が出来ること、

あなたがすでに健康ではないこと、
まだ知らせていない事がたくさんあるのです。」

と言いながら速水は時計を見た。
もう夜中の1時をまわっている。

「とにかく急いだ方がいいでしょう。
急ですが、今から研究所の方へ引越してもらいます。
移動中に続きを・・・」

「今から引越すのか？こんな夜中に？
近所迷惑だろう。」

「心配ありません。荷物は我々が明日運び出します。
あなたとレイナだけ来てもらったら、それでいいのです。
向こうの用意はもうできています。」

そついいながら、携帯をいじった。なにか合図を送ったのだろう。

「向こうに着いたら、亜佐美が待っているのか？」
「いえ、明日からお二人の新婚生活が始まることになっています。」
「じゃ、今晚はレイナと一緒にいていいのか？」
「そうです。では行きましょう。レイナを運ばせます。」

知らない間に入ってきた3人のマスクをした白衣の男達が、
何の遠慮もなく隣の部屋に入ってしまった。
部屋の配置から、レイナを隠した場所まで、すべて熟知している。

あつという間にレイナに透明のケースをかぶせて、運び出した。
レイナは顔を髪の毛で隠したまま、おとなしくしていた。

絶対にレイナを守らなければ、強く誓った。

「さあー、我々も行きましょう。」

従うしかない。

立ち上がろうとすると、体が重い。今までに感じたことのない疲労感だ。

第十章 佳苗博士

速水と一緒に表通りに出ると、見たこともないような形のバスが近づいてきた。全く音がしないのに、動きは素早い。

ドアが静かに開くと中に豪華な部屋が見えた。すでにレイナと白衣の男達も乗り込んでいる。

その横には、以前レイナと出会った時に見かけたあの中年女が座っている。

「さあ、乗ってください。」

「ああ。」

バスの中は驚くほど広かった。

あの中年女、佳苗博士がレイナに顔を近づけて何かを話していた。

レイナが俺以外と話しているのを見るのは初めてだ。

佳苗博士が時々、俺を鋭い目つきで見ている。

不思議と何か悪いことをしたような、申し訳ない気持ちが湧いてくる。

俺もレイナの近くに行きたい、と思ったが我慢した方がよさそう
だ。

知らない間にバスはかなりのスピードで走っていた。
全く揺れないし、音もしないので気づかない。

「研究所に付いたら、二人きりになれますから。」

今晚はそこでゆつくりとくつろいでください。

その部屋はベッドも風呂も全て完備していますから。

その辺のホテルよりはいい感じだと思いますよ。」

「俺の荷物は」

「明日あの家にあったもの全てを持ってきますから、ご心配なく。賃貸契約も何もかもすべて処理しておきます。」

「もう自分の意志で行動することは、できないのか。」

「そんなことはありません。」

あなたの意志や望みは尊重されます。

しかし常に監視されチェックを受けます。

金銭的な心配は不要ですし、大抵の望みは果たされるでしょう。もし不満があれば、」

「わかったよ。」

「とにかく、私や佳苗博士は貴方の味方です。」

もちろん亜佐美お嬢様も、貴方を愛しているのですから、」

「それで、亜佐美はどこまで理解しているんだ、レイナのことを。」

「お嬢様はレイナが言葉を話すことは知っていますが、会話できるとは思っていません。」

決まったセリフを繰り返す程度だと思っています。

顔もあれほど美しく、表情豊かとは知りません。

キスをして快感を与えとか、麻薬を放出するとか、

エキスを吸い取るとか、そんな危険な生き物だ、と言っ認識は全くありません。」

「いつ、知らせる気なんだ。」

「もう、これ以上黙っていることはできないでしょう。」

明日、私から説明しておきます。

あなたがすでに健康ではない、ということも。」

その時、白衣の男達が急に外に出て行った。

何か緊急の出来事が起こったようだ。しばらく速水も沈黙を保った。5分経っただろうか。白衣の連中が帰ってきた。

速水と話をした後、素早く立ち会った。

速水はにこやかに俺の方に向かってきた。

「ちょっとごたごたがありました。

レイナを狙っている奴らが、このバスを止めようとしてました。

でも失敗に終わりました。もう片付きました。

我々に情報が入っていたので、準備万端です。」

「誰がレイナを狙っているんだ。」

「速水G博士と助手、速水562の部下が動いたのです。

たかが20人ほどの小部隊です。我々を一瞬でさえ止めることも出来ません。

彼らには最後のチャンスだったのでしょうが、所詮無理な計画です。部隊は全員死亡。博士達も別の場所で拘束されました。

今までにも似たようなことが何回ありました。いつも結果は同じです。」

現場の後始末とかははどうするのだろう。

いつもニュースにならないのも不思議だ。

権力を持っているものは情報も操作できるということか。

とてもこの国で起こっている出来事とは思えない

この男は、ミスなどしないのだろう。恐ろしい完璧主義者。こいつを敵に回したくない、と心から思った。

「博士達も死ぬのか。」

「仕方ないでしょう。一度は許してもらえても、二度目はありませんから。」

「君の身内でもあり、佳苗博士の夫だろう。」

「私には彼らに対する愛情は全くありません。」

佳苗博士もすでに速水G博士に対して何の感情もないでしょう。」

佳苗博士を見ると、彼女もこちらを見ていた。

先程とはちがい、にっこりと微笑んだ。

不気味な愛想笑い。底知れぬ女の怖さをかもし出している。

レイナと話しながら、こちらに笑顔を向けている。

何を話しているのだろう。

レイナは本当は俺を騙していたのだろうか。

体の芯が冷たくなっていく。

もう俺には何もない、このまま人生を終わるだけ。

絶望的な気分に関りかけた時、速水が立ち上がった。

「到着です。降りてください。私が中を案内します。」

第十一章 モルモット ヒロキ

速水に先導されて、巨大な研究所に入った。

不思議な形の建物で、中も迷路のように複雑なつくりになっている。

俺はめまいでふらつきながら、何とか歩いている。

たぶん、もう限界が近い。死ぬのだろうか。

悪夢のように長い廊下。息苦しい。

「もう少しの辛抱よ。レイナと二人きりになれば楽になるわ。」
いつの間にか佳苗博士が俺を支えていた。

「思ったよりも消耗が激しいようですね。」

速水の声が遠くで聞こえて、やがて何も見えなくなつて意識も。

目が覚めると手術台のようなベッドの上に寝ていた。

「とりあえず、注射しておいたから。」

たぶん元気になれるわ。」

佳苗博士の声は意外にも若々しく、艶っぽい。

あたりを見回すと、レイナがいた。心配そうに俺を見つめている。
やはりどうしようもないほど悩ましく、美しい。

「レイナ、何でもいいから俺に話しかけてくれ。」

「ヒロキ、安心して。あなたは絶対に守ってみせる。」

私の命に代えても。」

「レイナ。君を愛している。それだけは言っておきたい。」

「わかっているわ。私も同じ気持ちよ。」

佳苗博士が割って入った。

「私が邪魔ね。又明日来るわ。おやすみ。」

佳苗博士は帰り際に俺のほうを見ながら謎の微笑を投げかけた。
俺にアピールしているかのように。

やっとレイナと二人きりの時間が訪れた。

「俺は君のせいで死んでも、後悔しない。

むしろ喜びかもしれない。

もう覚悟は出来たから心配しなくても大丈夫だ。」

「いやー。」

レイナの声とは思えない激しい動物的な音だった。

「絶対にありえない。あなたを傷つけるなんて。

私はあなたを失いたくない。信じて。」

さらにたたみかけるように、続けた。

「私は自信がある。あなたを助けることができる。

たしかに、私はあなたを私から離れられないように中毒状態にした。
でもそれ以上にあなたを傷つけてはいない。

むしろあなたの体をパワーアップさせる行為を・・・」

「君は悪くない。俺はもういいんだ。

ただ、君が幸せになれるかどうか心配だ。

俺に出来ることは何だ。言ってくれ。」

「キスして。とにかくキスして。

そして後は私に任せて欲しいの。信用して。」

「信じるよ。もう俺は身を任せるしかないんだから。」

俺とレイナはキスをした。自分で言うのも滑稽だが美しいキスだ。まるで、1970年代の恋愛映画のように美しくロマンチックだ。

この世のものとは思えない快感が訪れる。

俺は至福の状態で失神する。幸せだ。

目が覚めると亜佐美がベッドの脇に立っていた。

「おはよう。ヒロキ。」

「ああ。」

「速水から聞いたわ。あなたの健康のことやレイナのことを。」

「君のことも全然知らなかった。」

「知ってほしくなかった。できればずっと。」

でも仕方ないわ。改めて、ありのままの私を愛して。」

「何故君のような身分の女が俺のような・・・」

「そんなことは関係ないのよ。」

私にとってあなたはやっと見つけた宝物なの。」

「まーいいさ。勝手に買いかぶって、思ってくれるのはありがたいが。」

俺は本当に身勝手に浮気な軽い男さ。

俺は純愛とは無縁な性格だし、おまけにもう長くは生きられないらしい。」

「聞いたわ。レイナのせいね。恐ろしい花。」

でもきつと治るわよ。佳苗博士達が何とかしてくれるわ。

そして、私とあなたの新婚生活が始まるのよ。」

今までとは違って、強気で有無を言わさぬ調子が意外にも新鮮な魅力だ。

驚いたことに、俺は改めて亜佐美に惹かれていた。

「明日からちゃんと私のところに帰ってくるのよ。わかった？」
「ああ、わかったよ。」

亜佐美と10分ほど、雑談した後、佳苗博士がやって来た。
二人は部屋の隅でひそひそと話し合った後、声を上げて笑った。
何の話をしていたのか、気になったが聞く勇氣はなかった。

もう俺は何も主導権を持たない奴隷、モルモットなのだ。
しかも体はしびれたように動かない。

レイナが何処にいるのか、周りを見ようとしたが
首を動かすことも出来なかった。

「じゃー、私行くね。明日からの暮らし、楽しみにしててね。」
亜佐美がこんなに輝いているのは、何故なんだろう。
あのアキと同じ女とは思えない。

佳苗博士が顔を近づけてきた。
「さー、治療を本格的に始めましょう。レイナの力も借りてね。」
高価な香水の臭いと、中年女の生々しい香りが入り混じって、
俺の嗅覚を刺激する。いやな臭いではない。懐かしさを感じる。

あらためて佳苗博士の顔を眺めた。結構魅力的かもしれない。
決して美しくはないが、優しさや色気がにじみ出ている。
(俺は何を望んでいるんだろう)

別に美しくもない中年女に性的魅力を感じている自分に
自己嫌悪を感じた。

レイナが移動用の荷台で運ばれてきた。
助手達は無言で、すぐに出て行った。

佳苗博士とレイナは黙ってみつめあった。

「私の可愛いベイビー、貴方のいとしい王子様を癒してあげて。
ただしエネルギーを奪わないように気をつけて。
あと麻薬は使わないで。いいわね。」

与えるだけよ、快楽と活力を細胞の隅々まで。」

佳苗博士の命令に従ってレイナがゆっくりと動き始めた。

「ヒロキ、キスして。」

俺は佳苗博士に起こされて、レイナとキスをした。

又あの快感が訪れる。宙に浮いたような開放感。

全身から何かが奪われていく。

そして新たな何かが体の隅々に注入されるのがわかる。

脳が中心がとろけるようで、幻想の世界が俺を包む。

レイナの唇や葉などが全身をやさしく愛撫する。

佳苗博士が俺を弄んでいる。人形をいたぶるように。

俺には抵抗することも出来ない。

佳苗博士が淫らな姿で楽しそうにはしゃいでいる。

レイナと佳苗博士は見事にシンクロしている。

俺を快楽の極みに導く天使たち。

やはり俺は死ぬんだ。再び失神しながら俺は確信した。

第十二章 恋の犠牲者

何日間眠っていたのだろう。

俺はもう死んだのかもしれない。

生きているとしたら、今日は何月何日なのだろう。

何もわからない。

体のけだるさが不思議なほど消えている。

頭もスッキリとさえている。

どうやら俺は博士達のおかげで、元気になったらしい。

俺は起き上がろうとした。

体に繋がれた細いコードが邪魔をしている。

無理矢理動いたのでコードが何本か外れた。

小さくブザーが鳴り響いて、佳苗博士が入ってきた。

なぜか佳苗博士が老け込んでいた。

ただの冴えない中年女性。

セクシーな臭いは全く消えている。

「お目覚めね。もう大丈夫。全快です。」

「俺は・・・。」

「2週間かかったわ。レイナの力も借りて治療したの。完全な健康体よ。」

「ついでに血管、内臓、全部きれいに掃除しておいたから。」

「やはり危なかったんですか、俺は。」

「そうともいえないかしら。あのままでも命の危険はなかったわね。通常の思考力や体力、気力はなかったかもしれないけど。」

「何がどうなったのか、もう少し細かく教えてもらいますか。」

俺にわかる範囲で結構ですから。」

「いいでしょう。まず……」

この2週間で行った治療はすべて録画されています。

もし見たければおっしゃってください。」

佳苗博士とレイナとのエロチックな記憶がよみがえってきた。

あらためて博士をみてみたが、そんな色気は全く感じられない。

もしあれが現実にあった治療であるなら、もう一度見てみたい。

俺がぼーっと博士を見ていると、少し恥ずかしそうなそぶりを見せた。

「何から説明していいのか、迷うくらい色々なことがあるんだけど。とにかくお風呂に入って、着替えましょうか。話はその後で。」

いきなり歩くと危険だから、その椅子に座って一緒に行きましょう。運転は簡単よ。」

白衣の男達が呼ばれた。俺をベッドからおろして椅子に座らせた。

「明日から少しずつ歩いたり食事をしたり……。すぐ元のように動けるようになるわ。」

そうねーでも三日ほどは、かかるかしら。」

椅子のまま浴槽に入ると、手術着を機械に脱がされ、体をきれいに洗ってくれる。

男達に見張られた状態で、濡れた体を乾燥させて、出来上がり。

博士が入ってきた。俺はあわてて前を隠した。

「ごめんなさい。恥ずかしいわね。私は貴方の体の奥の奥まで知っ

てるし、
毎日直接……。つい忘れてしまつたのよね。」

言葉の裏に何か艶っぽいものを一瞬感じた。

「貴方の衣服がここにありません。椅子に座ったまま、自分で着替えてください。」

無理なら手伝うから。」

どうにか着替えることができた。

力が出るが、どうも手先が不器用だ。足の筋肉もかなり弱っている。まだ歩くのは無理か。少し空腹を感じた。

博士が母親のように見守る前で身支度を終えて、部屋に戻った。再び二人きりになった。

「食事はいつからできますか。」

「お腹空いたのね。ここ二週間はずっと点滴と

レイナの愛情と栄養たっぷりの液体で生きてきたのよ。

急にかたいもの食べるわけにはいかないわ。

だから今日は流動食で我慢して。明日から徐々に普通の食事に戻していくから。」

「わかりました。それで、俺の体の話ですが。」

「そうね、では説明しましょう。」

まずレイナは麻薬と毒を自在に使い分ける非常に危険な植物です。

麻薬の成分も他に類を見ないほど、レベルが高い。

幻覚、幻聴、さらに五感に対する強烈な快感を与えることが出来ます。

非常に性欲を高めて、媚薬的な作用を与えることもできます。いわゆる惚れ薬ね。」

俺のレイナに対する思いは媚薬の作用で作られたものだったのか。
「さらに中毒性も強いので、一度とりこになった人間はもう離れることは出来ない。精神に以上をきたすか、自殺するか・」

レイナの知能は人間並み、もしくはそれ以上。

色々と判断した上でこれらの麻薬を効果的に使うことができるのです。

そしてはつきりと自分にとって害のある敵と認識した場合、強い毒を使って攻撃することもあります。

それも液体と粉状の物、気体を使い分けます。」

「すごいですね。まるで殺人兵器じゃないですか。」

「そう、彼女は兵器、最も強力な暗殺者。

狙った相手を、間違いなく廃人にして地獄に送ることが出来る。」

「なるほど。それで僕の場合は？」

「レイナは貴方を取りこにするために、麻薬を使いました。

ただ、量は少なめでした。貴方を傷つけることに抵抗があったようです。

中毒症状も軽く、媚薬的な効果もわずかでした。」

「だからどうにか助かった、ってことですか？」

「そうですね。普通ならもう発狂しているか、寝たきりか自殺しているか。

実際、他の人たちは次々と死んで、」

「レイナが原因で死んだ人間が。」

「実験の段階からを含めるとすでに10人以上が犠牲になっています。

私の前の夫、速水G博士と助手速水562、つい10日ほど前に揃って亡くなったわ。」

「彼らは処刑されたのではないのですか。」

「違うわ。実は彼らはレイナが誕生した時、分かっていながら自ら彼女の中毒になった。レイナなしでは生きていけない体になった。」

「彼らは組織を裏切って得たお金で、ずっとレイナと暮らそうと夢見ていたようね。」

だからレイナを失った時、無茶な計画も実行した。結局組織に連れ戻されてからは、中毒症状に苦しみながらレイナとは会うことも出来ずに死んでいったのよ。」

前に速水から聞いた話とは少し違っていた。お金や待遇だけの問題ではなかったのだ。レイナに対する思いに関しては俺も理解できた。

「治療はしなかったのですか。」

「今さらあの馬鹿たちを助ける気もなかったし、実際手遅れで何も出来なかった。」

貴重なデータになるので、最後まで観察はし続けたけどね。」

俺は女の底知れぬ怖さを感じた。

一度敵意や嫌悪感を感じた相手には、残酷なほど割り切った感覚を持てる。

それが男との違いなのかもしれない。

「貴方を蹴っ飛ばしたあの男も死んだわよ、速水463。」

亜佐美お嬢様のお気に入りだったのに。

彼は貴重な実験台になってくれたわ。

レイナが毒を使った最初のケースだから。

貴方の部屋から帰って2時間で急死したの。

すごい猛毒でどうにも助けられなかった。

今もこの毒に対しては何も助かる方法がない。

さらに分からないのは、レイナがいつどうやって彼に毒を浴びせたのかなのよ。

レイナに質問してもわからない。どうも無意識で攻撃したみたいね。まだまだレイナには未知の部分がいっぱいあるわ。進化も続けているようだし。」

何故なんだろう。俺はレイナに殺された奴らに嫉妬している。

俺はもうレイナの中毒者ではない。それがたまらなく寂しい。

レイナに逢いたい。そしてもう一度虜にして欲しい。

そして、殺して欲しい。

激しい欲望が体の奥から湧き上がってくる。俺はレイナを愛している。

以前よりも強い思いをレイナに対して感じている。

どうすればいいのか、俺にはもう何も分からない。

第十三章レイナと亜佐美

「レイナに挨拶に行く？それとももう見たくもないかしら。」

「早くあわせて欲しい。又二人きりの時間を作ってもらえますか。」

オレは慌てて答えた。あまりの勢いに博士は驚きの表情を見せた。
「何をしようとしているの。もしかして復習？レイナを傷つけようとしているの？」

「とんでもないです。俺の気持ちは前よりもはっきりしています。オレにとってレイナが全て。他の事はどうでもいいんです。」

博士は疑うような顔つきで考え込んでしまった。

「あなたのレイナに対する愛情は麻薬のせいではないのかしら。媚薬の効果はとくにきれているはずだし。中毒もない。」

しばらくして博士は俺をみつめて囁くように言った。

「ここに来てすぐの頃、あなたは異常に発情していた。

私のような、ぎすぎすした年増にさえ色気を感じた。

何故だか分かる？」

俺は恥ずかしさでいっぱいになった。

確かにあの時、俺はこの博士や亜佐美にセックスアピールを感じていた。

今考えると不思議な感じがする。

「あなたをレイナの中毒から抜けさせる治療方法として、媚薬の量を徐々に減らしていく方法を取ることにしたの。すると意外な効果が現れた。

あなたの愛情、というより性欲がレイナ以外の女性にも向いた。

誰でもよかったのかもしれない。

とにかく、とても興味深い結果だった。

私のような年寄りにさえ、あなたの熱い視線が注がれたのだから。」

なるほど。たしかにそうだった。

今、目の前にいる枯れ切ったような中年女性。

何故性的対象に思えたのか不思議なくらいだ。

普通の状態では何も思わない相手が媚薬のせいでも魅力的に見える。

何故媚薬の量を減らすとそのような効果が生まれるのか、

博士の次の研究テーマになるのだろう。

これが完成すればどんなに高額でも買いたい人間が現れるだろう。

「でもお嬢様とはあなたの気持ちとは関係なく、

これから夫婦として暮らしていかなくてはいけないのよ。

媚薬なしで、お嬢様を愛して・・・」

亜佐美。そういえば全く忘れていた。彼女と暮らさなくてはいけないのだ。

新婚生活を送る約束だった。確かにあの頃は改めて魅力を感じていた。

今はなんとも思わない。

その時、電話が鳴った。レイナとの再会の準備が整ったらしい。博士に案内されてレイナの部屋に移動した。

レイナは顔を隠してうなだれていた。

「ほら、ヒロキが完全に健康を取り戻したわよ。」

俺はレイナに抱かれたかった。でも我慢した。

「レイナ。逢いたかった。きれいな顔を見せてくれ。」

レイナの体がビクツと動いた。ゆっくりと花びらが開いてレイナの顔が現れた。

神秘的な美しさ。やや疲れた感じはしたがまぶしいほどの色気。

「きれいだよ。レイナ。」

涙が止まらなかった。もう逢えないかもしれないと思っていたから。

レイナはかなり驚いた様子だった。

「まだ私の事が好きなの？」

博士がレイナに近づきながら話し始めた。

「彼の愛は本当の愛なのかもしれない。」

すでに麻薬の効果はないし、中毒症状もない。

でも純粹にあなたを欲しがっている。」

「ヒロキ、私を許してくれるの。あなたを傷つけたのに。」

「君は俺を傷つけてはいないよ。俺に全てを与えてくれた。」

だから俺は今ここにいるんだ。そうだろう？」

博士が部屋から出て行くのが分かった。

やっとレイナと二人きりになった。

「キスしたい。前のように俺を包み込んで欲しいんだ。」

「でも危険よ。また体が。」

「構わない。君のせいで死ねるなら、それこそ最高の悦びだ。」

レイナの美しい瞳が涙で濡れていた。

「私の愛しい人。本当に私を愛してくれるのね。」

「レイナ。愛してる。」

レイナとのキス。すさまじい快感が全身を駆け巡る。

このまま時間が止まって欲しい。

その時、ドアが激しく開いた。亜佐美だった。

「元気になったのね。よかった。」

邪魔な女、心のそこから憎しみを感じた。

「あなたがその花のオバケを思う気持ちはよく分かったわ。

私は理解できるわよ。あなたの趣味をとにかく言う気はさらさらない。

だから思う存分楽しむといいわ。でも夜は私のところに帰ってくるのよ。

いいわね。ここでは私に逆らうことは出来ないのよ。」

そうだった。彼女は支配する側、こちらは支配される側。

レイナがどんな気持ちで亜佐美を見ているのか心配になった。

レイナは驚くほど穏やかな表情で亜佐美を見つめていた。

まるで勝利を確信した指揮官のように。

「何をみているの、この花オバケ。

あなたも実験が終わればさよならね。寿命もあるだろうし。

ま、せいぜい楽しむがいいわ。しっかりお金を稼ぐ基礎になってちようだい。」

俺は亜佐美に殺意を感じた。

レイナは微笑み続けた。そして美しい声で亜佐美に話しかけた。

「そういえば速水さん、お元気かしら。最近お見かけしないけど。」

亜佐美の顔色が変わった。急に落ち着きを失った。

そういえば速水とはあれ以来会っていない。

どうもレイナと何かつながりがあるらしい。

「やっぱりあなただったのね。速水に何をしたの。事と次第によつては許さないわよ。」

いくらあなたが我々のグループの未来を左右する重要な存在であるうが、

そんなこと、私には関係ない。バラバラに引きちぎって、焼き殺してやる。

さー言いなさい。彼に何をしたの。」

すごい必死の形相でレイナに詰め寄った。

俺は亜佐美を止めるために二人の間に入ろうとした。ちょうどその時大きな声が聞こえた。

「やめろ、亜佐美。いいかげんにしなさい。」

低くて威圧感タップリの声だ。

「速水は大丈夫だ。だから安心して落ち着くのだ。」

どうやら、亜佐美の父親らしい、つまりこの組織のトップ。

「あんな奴のことはいいから、

早くヒロキ君と二人で部屋に行きたまえ。

今日から新婚生活を満喫してくれたまえ。」

白衣の男達と佳苗博士が部屋に入ってきた。

俺と亜佐美は部屋から出て行くように促された。

亜佐美は先に一人でさっさと出て行った。

その後、佳苗博士がすれちがいざまに素早く俺の耳元で囁いた。

「私はあなた達の味方よ。忘れないで。」

何かが起こる、俺は確信した。

振り返ってレイナの美しい顔を見て、ますますその思いが深まった。
ずっとレイナを見ていたかったが、仕方なく部屋から出て行くこと
にした。

第十四章 異常な生活の始まり

亜佐美が前を歩いている。何回も迷路のような通路を右に左に曲がる。

母親について行く幼児のように不安な気持ちに襲われた。

彼女は俺がついてきているかどうか、確かめることもなく早足で突き進む。

以前は並んで歩いていた。話をしながらゆつくりと。
でももう今はあの頃とは全てが変わってしまった。

エレベーターの前で彼女は止まった。

「今来た通路よく覚えておいてね。迷子になっても誰も助けられないわよ。」

「もう忘れた。無理だよ。あとで見取り図かなんか。」

「とろいわね。そんな物ないわよ。まー誰かに聞けば教えてくれるわ。」

D68のエレベータはどっちに行ったらいいのでしょうか、って訊くのよ。

わかった。」

「わかったよ。」

カチンときたが、あまりの機嫌の悪さと見たこともないような強気な態度に圧倒されてしまった。

エレベータが静かにやってきた。

乗り込むと彼女は顔を鏡に近づけた。

「認識完了です。88階に向かいます。」

やさしい男の声だった。

亜佐美は黙ったまま、いらいらしている。
俺も気を使うのはばかばかしいので黙ることにした。

ドアが静かに開いた。８８階に着いたらしい。
豪華な絨毯が敷き詰められた広くて長い廊下。
贅沢な照明器具、高価に違いない美術品。
その辺の高級ホテルとは比べ物にならない。

亜佐美は歩きながら服を脱ぎ捨て、
あっという間に下着姿になった。
俺はおびえた。何を始めるつもりなのか。
「気分が悪いからシャワーを浴びるわ。
ヒロキはあっちこっち探検してなさい。
このフロア全体が私達夫婦の新居だから。
後でちゃんと説明してあげるから、勝手に触りまくっちゃダメよ。」

といいながら下着も脱いで全裸で紅いドアの部屋に消えていった。
俺はどうしたらいいのか。
１５分ほど待ったが、亜佐美が現れそうもないので、
少し歩き回ってみることにした。

紅いドアが何箇所かあったので開けてみるとどれもシャワールームだった。
薄いピンクの扉を開けると円形の浴槽にお湯が張っている。
隣のピンクの扉も開けてみたが、そこはビリヤード台が部屋の真ん中に。

これは手ごわい。何がどの部屋なのか。

さらに黄色い扉を開けてみると、そこは大きなスクリーンのある

部屋。

映画でも観るのか。もうひとつの黄色い扉の奥は亜佐美の服や靴が並んでいる。

どの色の扉にも覚えやすい共通点がない。これは困った。

最低トイレと自分の荷物があるはずの部屋は把握しておかないと。

俺は何とか亜佐美に怒られないようにしようとしている自分に驚いた。

必死で新しい境遇に適応しようとしている。

これではだめだ。チャンスを見つけてレイナと逃げ出して……。

突然青いドアが開いて全裸で亜佐美が登場した。

俺は目のやり場に困った。亜佐美はお湯でビショビショ。

「おとなしく待っていたよね。少しは散歩したの。」

「まるでゲームのような配置で、どの扉が何なのか。」

「早く覚えなさい。その茶色の扉を開けてバスタオルとみどりのカバンを持ってきて。」

俺は言われるままに動いた。バスタオルを渡そうとすると

「ちがうわよ。私の体を拭くのよ。これからいつもそうするのよ。わかった。」

「自分でやれよ。何故俺にさせるんだ。」

「自分のおかれている状況がまだ分からないの。」

あなたは夫と言う名前の奴隷なの。対等な関係はもう終わったのよ。私はそうしたかったのに、拒否したのはあなたでしょ。

さあ。早く拭いて。」

従うしかない。逆らえばより立場が悪くなる。

「拭き終わったら、そのカバンに入っているマッサージオイルを、1番から3番まで出してちょうだい。こっちに来なさい。」

薄い紫のドアを開けると、マッサージ用のベッドが置かれている。「丁寧に優しく全身に塗りこむように。1番から順番に。そつねー、それぞれ5分ずつかしら。」

言葉が出なくなっている。言われたことをこなしていくしかない。こんなことはしたことがない。上手く出来るんだろうか。とにかく1番のオイルを手のひらに注いだ。

「何処から始めたらいいのかな。」

「普通顔から順に下にいくんじゃないの。」
「わかった。」

時計を見ながら亜佐美の体に丁寧にオイルを塗りこんだ。不思議なほど性的なものは感じなかった。長い長い15分が過ぎていった。オイルのいい香りが部屋に充滿している。

眠そうな顔の亜佐美が俺の目を見ながら微笑んだ。

「どう、私の体を改めて触ってみて。何か感想を言いなさい。」

「キレイに手入れが行き届いているね。さすがだよ。」

「それだけ。抱きたくならないの。」

「今はそんな気には。」

「あつそ。まあいいわ。これは速水の仕事だったのよ。」

「なるほど。」

「あら驚かないの。」

「彼とは色々話したから、大体の想像はつくさ。」

「どんな話をしたの？」

「速水一族の宿命、レイラに関する話、

彼の身の回りの話、そして何よりも熱く語ったのが君について。」
「私？」

「そうさ。当たり前だろう。あれだけ君のことを深く愛している。叶わぬ愛とわかっていながら、一途に無償の愛を捧げ続けている。」

「ちよっと待ちなさい。速水が本当にそんなことを言ったの。」

「ああ、そうだよ。」

「初対面のあなたに？」

「俺も驚いたけど、感動もしたよ。」

亜佐美はしばらく遠くを見る目をして黙り込んだ。そして急に立ち上がると、奥の部屋に入っていた。何してるの、一緒に入ってきて。」

奥に入ると大きな風呂があった。

亜佐美は風呂につかりながら、又何かを考えている様子だった。ふと我に返って俺に命令した。

「さっさとあなたも湯につかりなさいよ。」

俺が服を脱いで湯につかると、亜佐美が体の触れる距離に近寄ってきた。

「あなたのノルマは一日一回私を抱くこと。もちろんそれ以上でも構わないけど。」

例えば速水は一日二回、三回なんて当たり前だった。

あなたには彼ほどの体力もないでしょうから。」

「今はいやだな。後でもいいだろ。」

「いいわよ。ただし私が要求した時はあなたに拒否する権利はないから。」

それじゃ今日はベッドでってことね。」

風呂から上がると、女が3人部屋にいた。

脱ぎ捨てた亜佐美の衣類等を片付けているメイド達らしい。

俺は慌てて前を隠して、自分の服を取りに風呂に戻ろうとすると、

「いいのよ。そこに新しい服が用意してあるから。それにいちいち恥ずかしがらないで。」

このメイドたちはあなたの裸なんて、なんとも思わないから。速水の体をしょっちゅう見ていたから、貧相に感じるでしょうけど。」

メイドたちがぐすつと笑った。可愛い顔の娘ばかりだ。よく見ると一人すごい美人がいる。歳は三十近い感じで、他の二人とは明らかに違っていた。しかも表情が暗い。顔をあげて俺と目が合った時、心臓が止まりそうになった。俺が結婚するのはこの人だったのに、と思った。

何故そう思うのかは俺にも分からない。でも運命の人と出会ってしまったと確信した。

「私は食事を取るわ。ヒロキは明日からやっと普通の食事ね。」

「そうらしい。今は食欲もないよ。」

「でもテーブルには座って。私の相手をするのよ。」

「いいよ。」

服を着てオレンジ色の扉の部屋に入ると、洒落たテーブルに食事が用意されていた。

女シェフが奥から出てきて料理の説明をする。

料理人四人も全て女性。

メイド達も俺達の後ろに並んで立っていた。

あの美人も相変わらず暗い表情でこちらを見ている。

「あなたも明日からあの名人達の料理を毎日食べられるのよ。」

「楽しみだ。何時も同じメンバーなのかい。」

「ええ。あれほどの腕を持った女料理人はそう簡単には見つからな

いから。」

「メイドさん達も。」

「彼女達は特別の能力を持っているわけではないんだけど、しばらくは変えないつもりよ。」

「だって誰だかわからない人がそばにしていると落ち着かないでしょ。」

「あの3人はよく知っているから安心なの。」

「なるほど。」

俺はあの美人の素性を聞きたかったが、我慢した。

その夜、俺は亜佐美を抱いた。亜佐美がアキだった時と同じように。

なつかしきで、涙がこぼれた。

「何故泣いてるの？」

「わからない、俺はアキと結婚しておくべきだったのかなー。」

「もう遅いわ。」

第十五章 それぞれの作戦開始

亜佐美に仕えて、レイナと交わり、亜佐美を抱いて、レイナに癒される。

その繰り返しで、二週間が過ぎた。

俺はこの異常な生活に結構、順応している自分に感心した。

レイナに対する愛情は深まるばかりだ。

どうすればレイナを幸せに出来るのか、そればかり考えている。何がレイナにとっての幸せなのか、わからないのに。

俺の体はもう完璧に健康な状態を取り戻している。

食事でも普通に取れるようになった。

以前よりもむしろ体力が強くなっているような気さえする。

レイナと交わっても前ほどの疲れは感じない。

強烈な快感は相変わらずだが。

さらに亜佐美と毎日二回交わっても、それほど疲労感はなかった。

亜佐美の女王様ぶりはますますエスカレートしている。

俺は奴隷のように亜佐美の体を隅々まで洗い、マッサージをして、添い寝をして、言われるままに用事をこなす。

亜佐美が俺に何を求めているのか、理解できない。

俺が愛しているのはレイナ、亜佐美ではない。

そして亜佐美もそのことは充分承知している。

「今日は佳苗博士の診察日だから。」

「もう必要ないんじゃないの。昔より元気じゃない。

それともあの花に新しい病気でも、もらったの。」

「定期的に体をチェックすることが俺の仕事なのさ。実験台だからな。」

「そうだったわね。私も博士に話をしにいかなくちゃ。」
独り言のように亜佐美がつぶやいた。

その暗いトーンはただ事ではないことを意味しているようだ。何をしにいくのか、なんて訊く事を許さない雰囲気を漂わせている。

朝食のテーブルは今日も豪華。でも俺は検査のために食事ぬきだ。メイド達もきちんと整列している。あの女も相変わらず美しい。名前も聞くことが出来ないが、きつといつか・・・。

佳苗博士の研究室には毎日顔を出しているが、細かい検査は久しぶりだ。

一時間ほどかけて体中を調べた。

「驚きの結果だわ。」

「何がですか？」

「あなた明らかに若返っているわ。自分で分からない？」

「ウーン。言われたらそうかなって感じで。」

「これはすごい事よ。人類の夢のひとつが今叶いかけているのよ。」

「そうなんですか。」

「血管も筋肉も、眼球も骨も全てが老化とは逆の方向に向かっていく。」

「この後どうなるんですか。」

「一つだけはっきりしているのは、これはとんでもない発見で、莫大な富が転がり込むということ。」

検査の後はレイナとの悦楽の時間だ。

「俺は若返っているらしいよ。君のおかげだよ。」

「あなたは私の大切な人。」

そして愛の交わりが始まった。俺が生きている喜びを感じる瞬間だ。

突然頭の中にレイナの声が響いた。

「声に出さしないで私のメッセージを理解して。」

私はもうすぐ枯れてしまう。でも私は死ぬわけではない。

私の種がすでに複数できている。これは私の子供ではないの。

私自身なの。あなたに種を持って逃げて欲しい。

あなたが解放される最後のチャンスかもしれない。」

俺は慌てた。レイナが枯れてしまう。そんなことが起こるなんて

「平静を装って。カメラに映っているのよ。演技をしてちょうだい。」

あなたの味方になってくれる人を作っておいたわ。

桜井よ。あなたの部下だった男。彼も速水一族だけど、

あなたと私のために全てを捧げてくれるはずよ。

彼のことを信用して。彼のアドバイスを聞いてちょうだい。」

俺が不安な顔をしているのを見てレイナが微笑んだ。

「大丈夫よ。私の作戦は完璧。亜佐美は何も出来ない。

博士は私達に力を貸してくれる。全てが順調。

あなたは桜井を信用して行動してくれればそれで全てが上手くいくわ。

今後もし秘密の話は言葉に出さないから、あなたも声を出さないように気をつけてね。」

俺はレイナに抱かれて例の強烈な快感に包まれた。

この瞬間があればもう何もいらない。

部屋に帰ると亜佐美のメッセージが残っていた。

「速水のことと決着をつけてくるわ。」

しばらく一人で暮らしてちょうだい。たぶん1週間は逢えないと思う。」

そつけない文章。俺に対する執着はもう感じられない。ほっとするが、何か寂しさも感じる。不思議だ。

ふと振り返るとメイドが並んでいた。勿論あの美人もいる。そして彼女が話しはじめた。

「桜井さんが明日逢いに来られるそうです。」

「桜井ってあの？」

「そうです。以前の仕事のことで、相談があるらしいです。」
「そうか。」

「明日の朝、もう一度連絡が入ることになっています。」
「なるほど。」

なかなか落ち着いた艶のある声だ。ますます好きになる。何とか話を続けたいと思った。
こんなチャンスは滅多にない。

「ところであなたの名前、まだ聞いていなかったよね。」

「えっ、私ですか。」

「そう。」

「真由美です。速水真由美です。」

「速水？」

あの速水一族と関係あるのだろうか。

彼女も人工的に作られた人間なのだろうか。

いきなり、そこまで根掘り葉掘りきくわけにはいかない。

他のメイド達にも俺の気持ちを読まれてしまう。誤魔化すために、他のメイド達の名前も聞いた。もちろん興味はなかったが。

真由美に伝えたい、この激しい恋心。

亜佐美が不在のこの一週間で何とかしなければ。
どうすれば二人きりになれるだろうか。

監視のカメラやマイクから逃れながら、彼女に告白するには。

俺は自分がかつてないほど積極的になっていることに驚いた。
レイナに夢中な俺と真由美に激しい恋心を抱いている俺。

どちらも本当の俺。もしどちらかを選ぶ時が来たら・・・。

まだ真由美と少し話したただけなのに、妄想が広がっていく。
いつからこんな気の多い男になったのか。
まるで思春期の恋に恋する中学生みたいじゃないか。

その時改めて気が付いた。俺は若い。心も体も思春期のようだ。
何か胸がどきどきして、じっとしてられない。
自分で自分が制御できないかもしれない。

気が付くとメイド達はいなくなっていた。
基本的には、用事がなければ引っ込んでしまっ、ということらしい。

俺は風呂に向かいながら、頭に浮かんだ作戦をとりあえず実行して
みることにした。

「誰か来てくれますか？」

俺はメイドを呼んだ。誰が来るか、賭けた。

「はい、どうなさいました。」

やってきたのは一番若いメイドだ。

「いつも亜佐美と一緒にだから、風呂がどのドアかもわからなくて。」

「では私が案内もかねて、ご一緒させていただきましょっか？」

「いや、場所さえ分ければ・・・」

「でも他にもお困りになることがありそうですよ。」

お風呂場は仕掛けも多いですから。

ボタンやスイッチだけで20個以上あると思いますけど。」

「そうか、じゃ一緒に来て説明してもらおうかな。」

「はい。ではこちらへどうぞ。」

第十六章 誘惑

美しい足に俺の目が釘付けた。

俺を先導するこのメイドのスタイルは抜群だ。

その辺のグラビアアイドルとはレベルが違う。

時々振り返って微笑む彼女はまさに天使だ。

彼女の名前はミューク。

バスルームに着くと当たり前のように服を脱ぎはじめた。

俺は慌ててそれをやめさせた。

「遠慮は必要ないんですよ。」

私達は、お嬢様から、ヒロキ様に出来る限りのお世話をするように、
と言われていますので。私は要望にお応えできる自信もありますし、

美しい瞳で、まっすぐ俺を見つめた。

俺はどう対応したらいいのか、わからずにただ目をそらした。

俺の脳裏に亜佐美の顔が浮かんた。亜佐美に嫉妬心や独占欲がないのは確かだ。

この美しいメイドを相手に、何をさせようとしているのだろう。
俺の理解をはるかに越えている。

しかし、この流れだと真由美に近づくチャンスはありそうだとにかくこのミュークと関係を持つのはまずい。

スイッチ等の説明をした後、再び俺を見つめながら体を押し付けてきたが、

どうにか、丁寧にお断りした。

「また何かあったら、遠慮なさらずにお呼びください。」

寂しそうな微笑を浮かべた。

しなやかに去っていく彼女を見て、ため息をついた。

据え膳食わぬは男の恥……。古い言い回しだが頭に浮かんだ。

豪華なバスタブにゆっくりつかりながら真由美の事を考えることにした。

結局混乱したまま、バスルームを出た。

別のメイドがタオルを持って待っていた。

「いかがでしたか、お疲れは取れました？」

といいながら俺に近づいてきた。俺の体を拭くために。

「いいよ、自分で拭くから。」

「私の仕事をなくさないでください。それとも恥ずかしいですか？」

「それもある。とにかく下着を。」

「こちらをどうぞ。」

渡された下着を身につけ、やっと落ち着いた。

「ではマッサージルームにどうぞ。」

彼女に付いて部屋に入った。いつも亜佐美をマッサージするのは違う部屋だ。

「この部屋は始めてみるな。」

「ココは特別な部屋なんです。そこに寝てください。」

俺は言われるままにベッドに寝転がった。

彼女が服を脱ぎ、さらに下着もはずした。

「俺は普通にマッサージしてもらえばそれでいいんだけど。」

「私のようなタイプはお嫌いですか。」

「好き嫌いではなく、俺はそんなに、なんというか。」

「お願いですから、一度私を試してみてください。」

「試すなんて、俺は別に。」

「どうしてもダメですか？」

「なぜそんなに俺を誘うんだ。亜佐美は君達に何をさせようとしているんだ。」

「細かいことはお話できません。」

この女なら、秘密を話してもらえそうな感じだ。

「わかった。とりあえず、普通にマッサージをしてくれないか。それから、よければ寝室に行ってゆっくりお酒でも飲もう。

時間はたっぷりあるし。慌てる必要は何もないだろう。」

「わかりました。では喜んで。」

とても嬉しそうに答えた。

見事な全裸、しかもマッサージのテクニックは抜群。

ついつい興奮させられ、気が付くと夢中で抱き合ってキスをしていった。

ふと我に返り、もがくようにメイサから離れた。

自分に言い聞かせた。我慢だ。ターゲットは真由美、理想の女。この女ではない。

「ここではまずいだろう。寝室でゆっくりと。そのほうがいいだろう。」

「

メイサはとても残念そうにベッドからおりて、悔しそうな表情で服を着た。

今の俺達の様子も誰かがどこかでチェックしているに違いない。油断は出来ない。

いつも食事を取っている部屋に入ると、ミユークと真由美が立っていた。

ミユークの目は泣いた後のようにむくんでいた。

「先に軽く食事なさいますが、それとも寝室でメイサと二人きりの方がよろしいですか？」

真由美はなぜか硬い表情で、声のトーンも暗い。
俺とこのメイサの会話は全て聞いていたのだろうか。気まずい。

「それでは寢室の方に持ってきてもらおうかな。軽食と赤ワインを
適当に。」

「わかりました。それでは30分ほどでお持ちいたします。」

といいながら真由美はメイサのほうをチラッとみた。とても優しい
まなざし。

ミユークは下を向いたままだった。深く頭を下げて部屋を出て行っ
た。

俺は何故か心が痛んだ。何か知らないうちに悪いことをしたらしい。

寢室に入るとメイサが俺に抱きついてきた。そして耳元で囁いた。

「抱いてくれたら、一生あなたの恩は忘れない。だからお願い。」

俺は彼女を抱えてベッドに倒れこみながら囁き返した。

「どういうことなんだい。教えてくれないか。」

「まだだめ。全部終わってから。」

「何が終わるんだい。」

「私も真由美も、それからお嬢様が・・・。」

「その3人の何が。」

「慌てないで。時間はタップリあるわ。でしょ。」

「そうだな。」

俺が思っていたより、はるかにメイサは手ごわかった。

彼女の巧みな誘惑に性欲を抑えきれなくなり、結局関係を持ってし
まった。

俺は激しい自己嫌悪に襲われた。

考えてみると俺は何一つとして、自発的な行動を起こしていない。
いつも他人の思惑に踊らされて、それに逆らうこともない。

亜佐美もレイナも、メイサも、俺が自発的に事を起こしたわけではない。

情けない。つくづく自分の受身の人生がいやになった。

ゆっくりとメイサの弾力のある体から離れて立ち上がった。

そして冷蔵庫からビールを出してグラスに注いだ。

まるで戦いに敗れたボクサーのように敗北感に満ち溢れている。一気に飲み干した。

タイミングを計ったように、ドアをノックする音が。

「軽食と赤ワインお持ちしました。」

真由美が現れた。美しい。優雅で爽やかで艶やかで。思わず見とれてしまう。しかし俺にはもう資格もない。

「ありがとう。」

俺が力ない声で答えると、真由美が意外そうな顔をした。

「お疲れですか。メイサは激しい女ですから。」

絶対に今起こったことを全て知っている。間違いない。

俺は恥ずかしさで死にたいくらいだった。

「食事、足りなければ追加でお持ちしますので、おっしゃってください。」

「そうだね。」

「ではごゆっくりと。」

何か話したかったが、言葉が見つからなかった。

真由美を恋する気持ちに変わりはない。

メイサが上機嫌でゆっくり起き上がった。

鼻歌を歌いながらワインを注いで、いそいそとテーブルを整えた。
「何から食べる？」

「ねー、酔っ払ってきたわ、もう一回・・・」

「いや、もう無理だ。」

「そうね。もう私の番は終わったわけだし。」

「番って？」

メイサが少し慌てているのが手に取るように分かった。

俺はベッドに倒れこんで彼女を抱きしめた。

そして耳元で囁いた。

「頼むから教えてくれ。何のゲームなんだこれは。」

「次は真由美の番なの。彼女が嫌がっても抱いてあげて。」

それが彼女が幸せになれる唯一の方法なの。

私と同じように。絶対よ。」

俺の耳の中にメイサの熱い吐息が入り込む。

わけの分からないメイサの言葉が俺の頭で反芻される。

第十七章 不安

目が覚めると、二日酔いの頭痛が俺を襲った。
きのう自分がしたことを思い出して、気分も落ち込んだ。
メイサはすでに何処かへ行ってしまったようだ。

俺はゆっくり起き上がって、服を着替えた。
ドアを開けるとそこに真由美が待っていた。

「おはようございます。」

「おはよう。」

次は真由美の番……。

「朝食の用意ができていますので、どうぞ。」
いつもと同じで、爽やかで美しい声だ。

「今日の正午に桜井様が来られます。」

こちらのフロアに来られるとの事です。

昼食をご一緒という予定でよろしかったでしょうか。」

「わかった。ありがとう。」

事務的な会話が終わると真由美は去っていった。

他の二人の時とは全く違う。もう俺を誘惑するゲームは終了したら
しい。

俺もこれ以上はもう付き合っていられないと思った。

そして真由美を想うのはやめるべきだと感じた。
何故かメイサは俺に真由美を抱くようにすすめたが、
どうも彼女は俺に好感情を持っていないようだし。

朝食を食べに行くと、そこには真由美だけがいた。

「他の二人は、どうしたの。」

「奥にあります。呼びましょうか?」

「いや、かまわない。」

静かに朝食を食べた。息苦しい雰囲気が漂う。

「なんか、寂しいね。」

「やはり、あの二人を呼んできます。」

「いや、そうじゃないんだ。君と話したいんだ。」

「わかりました。」

「前から名前の事が気になっていたんだけど、

速水一族と君は何か縁があるの?」

「私は速水Fの妻です。というか・・・まー。一様夫婦です。」

なにか深い事情がありそうだ。

俺はショックを受けたが、どこかで予想している答えでもあった。

「じゃ、心配だね。今ご主人がどうなっているのか。」

「そうでもないです。私がどうこう言える立場ではないですし、お嬢様の意志が全てですから。」

以前、速水が平凡で退屈な女と言っていた女、

それがこの美しい真由美だったとは。

亜佐美は速水との異常な関係を真由美に見せ付けるために、

ここで働かせていたのだろうか。

真由美が部屋を出てからも、ずっと彼女のことを考えていた。

彼女が持つ闇の一部分が明らかになった今、俺に何ができるのか。何も出来ないに決まっている。

正午丁度に桜井がやってきた。

「お久しぶりです。」

「なんか随分月日が経ったような気がするよ。いろいろなことがありすぎて。」

「そりゃそうですね。なんか若返られましたね。」

「まー、昼食をとりながら話そうよ。」

「ありがとうございます。」

真由美が豪華な食事を運んできた。

じつと見ていたいほど美しかった。桜井の目があるので控えた。

しばらく前の職場の話題が続いた。

食事も終わりがけた時、急に桜井が真顔になった

「後で研究室の方で話しませんか。」

「いいけど、ここではだめなのかい。」

「色々複雑な話なので、研究室の方が何かと便利です。」

「わかった。佳苗博士には？」

「もう了解はとってあります。」

前の仕事に関する話ではない。

そんな複雑な仕事ではなかったから。

研究室に佳苗博士はいなかった。

他の研究員は俺達が入っていくと逃げるように出て行った。

「ここは、盗聴マイクやカメラがありません。全て取り外しました。」

「

「外しても、すぐに分かるだろう。」

「誰にも文句は言わせませんよ。」

どうやら、組織の勢力バランスに変化が起こったようだ。

「それにしても君が俺の監視役だったとはなー。」

「すみません。それが私の仕事でしたから。」

「それに君は速水一族、しかも超エリートなんだって。」

「そうは思っていないませんが、普通の人間でないことは確かです。」

「速水Tだったかな、本当の名前は。」

「速水Fが話したんですね。彼は今廃人同様です。」

かつてのあなた以上に危険な状態です。」

「もしそれがレイナのせいなら、治せるのは彼女だけだ。」

「そうですね。でも彼女の治療が必要なのは速水Fだけではない。」

「どういうことだい？」

「例えば、私も完全に彼女の虜です。そして重症です。彼女のことを考えるだけで、胸が苦しい。」

媚薬でやられたらしい。軽い口調がかえって不気味だ。

「それは、いつから？」

「あなたがレイナを手に入れたのとほぼ同時です。」

「つまり俺の部屋で。」

「そうです。あなたの部屋に行きました。」

そしてレイナのとりこになったのです。

研究室でもレイナに接したほとんどの男が虜になりました。そして亡くなりました。」

「それは毒？」

「毒の方がましでしょう。媚薬でレイナに夢中になったら、後は地獄です。」

レイナに逢えない時間は拷問以上に苦しい。」

しばらく沈黙が続いた。

「とにかく、本題に入りましょう。」

私はレイナのそばにずっといたいのです。

そして、レイナの幸せのためなら何でもやります。」

「だから。」

「実はレイナはまもなく枯れます。そして種を残します。

佳苗博士によると種は4から5粒だろうとのことですよ。

そしてその中の1粒だけはレイナの娘ではなく、レイナそのものです。

その1粒をあなたに見極めてほしいのです。

もちろんあなたが研究所を出てからは、一緒に暮らせるようにします。

それがレイナの望みですから。」

「ここを出る、俺が？」

桜井は又明日来ると言つて、帰った。

しばらくすると佳苗博士が入ってきた。

不安な気持ちが表情に出ていたのだろう。

俺をなぐさめるように、やさしく肩に手を置いた

「大丈夫よ。まかせておいて。」

「レイナは・・・。」

「後でゆっくり二人で相談してね。」

レイナが話せるのも多分後2日ほどよ。」

「レイナはやっぱり枯れてしまうんですか。」

「少し無理すぎたのかもしれない。」

彼女には随分色々がんばってもらったから。」

「そのせいで・・・。」

「すぐに生まれ変わるから、がっかりしないで。

今のうちに色々打ち合わせておかないと。」

「生まれ変わるんですか、本当に。」

「他の花達で実験済みよ。間違いないわ。
ただ複数の種の中からレイナを見つけるのは
あなたにしか出来ない。」

「芽が出てからなら確実に分かると思うのですが。」

「それでは遅いの。種の段階ならひとつくらいは外部に持ち出せる。
警備の人間やセンサーなどの問題もクリアする方法がある。
だから種の段階で一粒を選ばなくてはいけないの。」

「もし間違ったら。」

「あなたはレイナの娘と暮らすことになるわね。」

そしてレイナはここで実験と商品の製作を繰り返す。」

「俺がここを出れるのは決定ですか。」

亜佐美が決めたことですか？」

「私達と彼女が話し合って決めたことよ。」

その段階では亜佐美の父親もまだ口を出していたけどね。」

佳苗博士が亜佐美を呼び捨てにしている。

そして父親にも何かが起こったようだ。

「今この組織を実質、動かしているのは私と速水T、つまり桜井よ。
亜佐美と父親はもう過去の人よ。速水Fもね。」

とはいっても、これだけの規模の組織。全て思うようにはならない
わ。

特にレイナに関することはね。」

「今亜佐美は？」

「たぶん明日にも帰ってくるわ。速水Fを連れてね。」

そして、あなたに別れを告げるはずよ。」

「俺と別れる？」

第十八章 レイナとの別れ

昨日レイナと逢ってから随分時間が経ったような気がする。

いろいろな事がありすぎて、頭が整理できない。

メイサとの事は話したくなかったが、きっとレイナは知っているのだろう。

少し緊張してレイナの部屋に入った。

レイナは疲れた表情で俺をみつめた。

「いろいろあったよ。」

「知ってるわ。あなたのことは全てわかるの。」

レイナの声にいつもの艶がない。

気のせいか、それともやはり生命力が弱っているのだろうか。気分が沈んだ。

「落ち込まないで。私が枯れても、それはひとつのステップ。種になって再生しも、あなたを思う気持ちに変わりはない。

必ずあなたにメッセージを送るから、しっかり受け止めて。」

「本当に複数の種の中から君を選べるだろうか。

もし間違ったら？」

「大丈夫よ。それより、あなたの気持ちが変わるのが心配だわ。」

メイサや真由美の事か。

「メイサの事は単なる・・・。」

「いいのよ。でも真由美に対しては真剣なのね。

でも彼女はとても冷たい、悲しい女よ。」

「知っているのかい？」

「知らない。でもわかるの。辛い過去が彼女の性格を変えてしまっ

た。」

「俺に彼女を救うことができるかな。」

「うぬぼれないで。あの女を救うなんて不可能。」

それにしても、私よりも真由美に夢中なのね。」

やはり媚薬でも使わないと、私の事なんか忘れてしまいそうね。とても不安だわ。」

「大丈夫だよ。俺は今も君に夢中だし、これから変わらない。まして媚薬なんか必要ない。」

「そうかしら。私にはそうは思えない。」

やはり、人間の女の魅力には、かなわないのかしら。」

だから媚薬の力が必要なよね。もうおそいけど……でも次に再生する時は、もっと体の方も人間の形に近づけるようにしなくちゃ。」

「俺は今の君が好きだ。ずっとこのまま……。」

「無理よ、もう私には時間がない。」

もう……今日が最後よ。」

枯れて汚くなっていく私を見せたくない。」

次に逢う時は新しい私。」

「絶対に又逢えるんだよな。」

「大丈夫よ。」

俺とレイナは最後の交わりを楽しんだ。

俺はこのまま死ねたらどんなに幸せだろうと、強烈な快感の中で考えた。

「もし間違いが起こつても、俺はどうにかして君に逢いに来るよ。」
「あなたが来なければ私が行くわ。」

別れは辛すぎる。いったい何日レイナを待つのか。
考えるだけで気が狂いそうだ。

重く沈んだ気持ちで部屋に戻った。

すぐに真由美がやって来た。

「おかえりなさい。」

俺の暗い表情に気が付いたらしく、話すのをやめた。

真由美は、ぼんやりしている俺をじつと見つめていた。

そして10分ほどして静かに美しい声で話しかけた。

「食事はどうされますか。用意は出来ていますが。」

「そうだね、ここで食べようかな。」

「それではお持ちします。」

「君も一緒に食べないか？」

食事の間も会話は弾まない。

結局風呂も一緒に入って、マッサージを受け、同じベッドで眠り・

まるで5年目の夫婦のように朝を迎えた。

もちろん関係は持っていない。相手は人妻だ。

レイナを失う不安と、真由美がすぐ横にいる喜び。

そして性欲に支配されている自分への嫌悪感。

「おはようございます。」

「おはよう。」

「今日も桜井様が昼にいらっしゃいます。その後は又レイナさんと・
」

「いや、もう彼女とは会えない。」

「えっ。どういうことですか。」

「彼女は枯れてしまっんだ。」

「そうなんですか。」

「だから、桜井と話した後すぐに帰ってくるよ。」

「こんな時は何か体を動かしたいな。」

「では何かスポーツされますか？テニス、スカッシュ、ボウリング、スケート、

色々ありますが。」

「このフロアに？」

「そうですよ。プールもジムもあります。」

「君と一緒に出来るのがいいな。」

「大抵の物はお相手できると思います。」

真由美がいつもより明るいの、多分俺がしょぼくれているせいだ。

明るく振舞う事で俺に元気を出させようとしているのだろう。気を使いすぎる不幸な女、俺の考えすぎかな。

昨日と同じように桜井と食事をしてから、研究室に行った。

「今日は色々を見てほしい物があります。」

「何かな？」

「シヨックを受けるかもしれませんが。」

桜井が立ち上がって歩き始めた。このフロアの迷路ぶりもすごい。

5分ほど歩いて暗い部屋に付いた。

入ると鉄格子の向こうに男がいた。

彼は座って遠くを見つめて、何かをぶつぶつ話している。

「レイナによって精神を破壊された男です。」

「誰？」

「職員です。麻薬を浴びたようです。」

違う部屋にも又レイナの犠牲者がいた。

6人の犠牲者を見た後、桜井が服を着替え始めた。

「あなたもこの服を着てください。マスクと手袋も。」

「何処に行くんだい？」

「レイナの姉妹をお見せしましょう。」

護衛の人間が急に増えた。桜井が近づくとさっと道をあける。

「気をつけてください。ガラスの向こうではありませんが。」

胸が高鳴る。レイナの姉妹なら、やはり美しいにちがいない。

部屋に入ると、ライトに照らされた派手な色の花が目に入った。

人間の顔が溶けたようなグロテスクな花。そしてがらがらの耳障りな声。

「あなたが誰だか知っている。こっちに来なさいよ。いい気持ちにしてあげるから。」

レイナとばかりいいことして。ぐふふ。」

悪意に満ちた雰囲気。おどろおどろしい容姿。レイナとは全く違う。

俺が呆然としているのを見て、桜井が肩をたたいた。

「レイナは奇跡だったんですよ。この花はまだましな方です。」

言葉が聞き取れない奴や、花びらがぐちゃぐちゃの奴。」

「他にもいるのか。」

「今生きているのは6人です。多い時は10人以上いました。」

「それで種を残しているのは？」

「ほとんど全員種を残しています。しかし親より優れた花は出来ていません。」

むしろ親よりも劣っている場合が多いです。」

「親がそのまま生まれ変わると言うのは」

「実験で成功しています。絶対ではないですが。」

レイナの種は多分他の場合とは比較にならないほど優秀でしょう。そしてひとつだけ彼女自身の複製をつくる事が出来るのです。」

「記憶は？」

「受け継げるはずです。それに関して、佳苗博士は自信を持っています。」

大丈夫ですよ。ところで、博士とは色々駆け引きがありました。あなたにも知っておいて貰わないと。」

そついうと桜井は再び迷路を歩き始めた。

第十九章 汚された過去

桜井は赤いドアを開いた。さらに進んで別の赤いドアを開いた。

いくつもの無意味に見えるドアを開けて進んで小さな部屋に着いた。

静か過ぎる部屋。向こうの音が全く遮断されている感じた。

そして大きなスクリーンとオーディオや映像系の機材が並んでいる。

「そこに座ってください。」

「今からお見せするのは、あなたが治療中に受けた陵辱のシーンです。」

加害者は佳苗博士です。屈辱的でしょうが、しっかりと見てください。

私は席をはずします。」

桜井が出て行くとスクリーンに映像が映し出された。

意識が朦朧としている俺が全裸で佳苗博士に弄ばれている。

そこには性欲の化け物となった佳苗博士の醜い姿があった。

やはり俺の意識に残っているイメージの断片は真実だったのだ。

佳苗博士の執拗な行為が延々と続く。段々気分が悪くなってきた。俺は立ち上がって画面に背を向けた。

「もう止めましょうか？」

スピーカーから桜井が話し掛けてくる。

「ああ。もう充分だ。」

画像が消えると、桜井が部屋に戻ってきた。

「佳苗博士はこれを隠して、持っていました。」

被害者はあなただけではない。速水Fや他の職員達も彼女の餌食になった。」

「レイナを使って廃人同様にした男を、おもちゃにして楽しむ・・・」

「そして録画のコレクションを増やす。

彼女の男への執着は異常です。

何かありそうだと思って、探りを入れた。そしてさっきの映像を手に入れたのです。」

「でも速水Fはもともと愛人関係に・・・」

「それは速水Fの都合で成立していた関係で、愛情とは無関係でしょう。」

だから彼女は満たされる事はなかった。それに対する復讐だったのかもしれない。」

「それで速水Fはどうなっているんだい。」

「亜佐美お嬢様が、地下室で放置されていた廃人同様の速水を救出したらしいです。」

これからは、女同士の話し合いでしょう。」

人間関係が複雑すぎて頭が整理できない。

ただ、彼らの力関係次第で俺やレイナの未来が決まる事は確かだ。

「私はさっきの佳苗博士の映像を取引の材料に使いました。」

おかげで交渉は全て優位に進める事ができました。」

「何を交渉したんだい？」

「色々ですが、あなたとレイナに関してはいい事ばかりです。」

何も心配は要りません。具体的な事はお嬢様と佳苗博士から近々にも。」

それ以上細かい事は訊けなかった。

迷路を戻って、やっと研究室に帰ってきた。

桜井と入れ違いで佳苗博士がやってきた。

さっきの映像を思い出して、気まずい空気が流れた。

「ごめんなさいね。私って本当にばかみたい。でもどうしようもないの。」

私の体には淫蕩な血が流れている。それに逆らう事は出来ない。私には男が必要。幸いあなたや速水Fの代わりはいくらでもいる。レイナの媚薬と麻薬のおかげで、私みたいな女でも、男を引き寄せる事が出来る。

でもあなたには本当に謝るわ。信頼を裏切ってしまった。」

「俺はもう気にしてないです。ショックしたけど。」

「あなたとレイナには幸せになってほしいの。もともと、そのつもりだったし。」

もうすぐ亜佐美が速水Fを連れてあなたに会いに来る。

そしてすべて決着が付く。」

「どんな決着ですか？」

「まずレイナは完全に死んだ事にするわ。種や再生は秘密。」

もちろん種を持ち出す事も。そしてあなたはここから出て普通に暮らす。」

ただし新しい戸籍を作って、新しい名前で暮らす事になるわ。」

「名前が変わる？」

「そう。ヒロキという男はもう死亡した事になっているのよ。」

「そんな。」

「桜井や速水Fなんかは初めから戸籍もない。」

存在していない事になっているのよ。」

「そんな事が可能なんですか。」

「この組織の力を使えば、そのくらいの事のこととは難なく出来てしまう。」

「そして、その組織をあなたが動かしている。」

「私だけではないけど、亜佐美や父親の時代が終わったのは確かね。」

「亜佐美の父はどうしたのですか？」

「彼はレイナの妹に夢中。いいなりよ。つまり私がコントロールしているの。」

「可愛らしいわよ。若さがないから私のおもちゃにはなってくれないけど。」

「亜佐美は知っているんですか？」

「もちろん。大して気にもしていないわ。」

彼女は父親に対する愛情なんて、ないのよ。

この組織に対する執着もない。あるのは速水への愛だけ。

今となつては、あなたの事などどうでもよくなつてしまった。」

「なんか複雑な気持ちです。俺も亜佐美に対して、特別な思いはないのですが。」

レイナの媚薬や麻薬、毒を基にした製品ができれば、

上流階級や国レベルで売買される事は間違いないし、莫大な利益を生む。

美人花自体も製品化するかもしれない。

実現すれば、どんなに高価でも買う人間は現れるだろう。

組織はますます潤い、強大になっていく。

「これだけの多くの秘密を持った組織に深く関つたあなたが、全くの自由を手に入れる事は出来ない。

ただ制約がある程度受け入れて普通の暮らしを送る事は出来るわ。私達はあなたに対して、それを実現してあげたいの。」

すでに外の世界で生きていく為の準備は出来ているそうだ。
「あとは明日、亜佐美が帰ってきてから。」

レイナに逢いたい、もう一度今のうちに・・。

そう思った瞬間、頭にレイナの声が響いた。

「だめよ。来ないで。汚い私を見ないで。」

それ以上呼びかけても返事はなかった。

部屋に帰ると真由美がゆつくりと現れた。

「おかえりなさい。いかがでした。」

「亜佐美が明日にでも帰って来るらしいよ。」

速水Fを救出したらしい。」

「救出。元気なんですか？」

「詳しくは知らないんだ。ひどい状態でどこかに軟禁でもされていたのかな。」

とにかく助け出したらしい。よかったね。」

「別に私には直接関係ないですけど。」

前にも同じようなやり取りをした気がする。

「何かスポーツでもなさいますか、それとも、もうやめましょうか。」

「君とゆつくりできるのも、後わずかかもしれない。君の好きな事をしよう。」

「そんな。私は何も望んでいませんから。」

「じゃーボーリングでもどうだい。話しながらできるし。」

「わかりました。用意してきます。」

しばらくして真由美が戻った。

「行きましようか。」

10分程ぐるぐると迷路を進んで、その部屋に到着した。

2人用だが、ちゃんとした設備がととのっている。

驚いた事に真由美は素晴らしいフォームで、力強いボールを投げ

た。

ミニスカートからのぞく脚線美がまぶしい。

「上手いんだね。びつくりしたよ。」

「勝負しましょうか?。」

「いいよ。じゃ、何をかけようか。」

「あなたが決めてください。」

第二十章 最後の夜

「じゃあ、俺が勝ったら君がどんな質問にも答えなくてはいけない、
つていうのはどうだい。」

「いいわよ。で私が勝ったら？」

「俺にできることなら何でもするよ。」

「本当？そんなこと言ってもいいんですか。」

「何が望み？教えてくれ。」

「それは私が勝った時に言います。」

勝負は真弓の圧勝だった。俺は真由美が何を要求するのか、わくわくした。

「さあ、何が望みか教えてくれ。」

「私を……。」

その時レイナの声が

「さようなら。必ずまた逢いましょうね。私を忘れないでね。」

俺は激しく動揺した。

「レイナ、本当に君は種になって再生するんだね、間違いないね。」
返事はもうなかった。

俺の異常な様子に気づいた真由美が心配そうに覗き込んでいる。

「少し休みましょうか。」

「レイナがたった今死んだ。」

「何故わかるんですか。」

「俺たちは心がつながってた。そして今途絶えた。」

「そうだったんですか。」

しばらく沈黙が続いた。

「でも、そういう関係って、なんだかうらやましいです。」
真由美が独り言のようにつぶやいた。

たまらない孤独感が俺を襲った。

何かして気を紛らわせないと、狂ってしまいそうだ。

「テニス、つきあってくれないか。」

「よろこんで。」

俺たちはクタクタになるまで、試合を続けた。

今度は俺が4勝2敗で辛うじて勝った。

「シャワーを浴びて帰りましょ。」

「一緒に？」

「いいですわよ。」

もう抑えることのできない欲望に従うしかない。

俺はシャワールームで真由美と結ばれた。

レイナの死んだ直後だというのに、俺は

後ろめたさが重くのしかかった。

真由美が着替えの途中で泣き始めた。

今まで殆ど感情を見せなかった真由美が激しく嗚咽している。

「何故そんなに泣くんのだ。」

「別になんでもないの。ただ泣きたかったの。ごめんなさい。」

急に気を取り直したように、いつもの冷静な真由美の戻った。

「それで、さっきの賭けはどうするの、一勝一敗だけど。」

「そうだな、じゃーお互いに負けた分責任を果たそうか。」

君の望みはなんだい？」

「明日、たぶんお別れでしょう。それまで本当の恋人みたいに愛し

て。」

「明日。明日何が起こるんだろう。」

「恋人は無理ですか。」

「俺は以前から君に本当の恋をしている。知っているだろう。」

「本当ではないと思いますけど。」

「君が好きだ。離れたくない。」

「レイナよりも？」

とつさに返事ができなかった。

「私はいつも誰かの代わり。速水Fにとってはお嬢様の代わり。あなたも私をレイナの代わりにしようとしている。」

「代わりなんかじゃない。君と一緒にいるときだけが、俺の安らげる時間なんだ。」

着替え終わって、部屋に戻った。メイサが笑顔で出てきた。きつと俺たちに何が起こったか、知っているのだろう。

真由美は恥ずかしそうに俺を見つめた。

俺もじつと見つめ返した。

メイサがあきれたようにクスツと笑った。

「食事は何をお持ちしましょうか。」

「結構たっぷり食べたい気分だけど、どうだい？」

「私もおなかペコペコ。」

「じゃーこつてり肉料理を、ワインと一緒に。」

その夜は人生で一番幸せだったのかもしれない。

俺と真由美は飽きることもなく愛し合い、疲れ果てて、そして深い深い眠りに落ちた。

目覚めると横に真由美が眠っている。

美しい寝顔を眺めていると真由美がゆっくりと目を開けた。

「好きよ。このままずっと一緒にいたい。」

「何とかして、一緒に暮らせるように考えてみよう。無理ではないはずだ。」

「でも不可能だわ。どうにもならない。悲しいけど。」

俺たちはお互いを強く抱きしめた。このまま死ねたら幸せだろうなと思った。

二人で朝食を食べながら、お互いの顔を見つめあった。

「俺の質問に答えてくれる約束だったよね。」

「賭けの事ね。いいわよ。」

「メイサ達はなぜ俺を執拗に誘惑したんだ？亜佐美は君達に何を指令したんだい。」

「それは、今日お嬢様から直接お話があるから。それまで待つて。」

「今はいえないうてことかい？」

「そう。ほかのことなら何でも答えるから。」

「じゃ、速水との事を聞こうかな。」

「いいわよ。」

「速水を一瞬でも愛していたのかい。」

「愛そうとしたけど、だめだった。彼も私を愛していなかった。」

「じゃ、君が愛したのは誰？」

「いないわ。あなたが初めてよ。」

「なぜ君ほどの美人に男が群がらないのか不思議だ。」

「私は美人ではないし、もてたこともない。

それ以前に、私は外の世界に出たことがない。」

「外の世界？」

「私はこの研究所から一步も外に出たことがないの。」

「親は？」

真由美の表情が一段と暗くなった。

「ごめん。答えなくていいよ。」

「いいえ。答えるわ。あなたには知っておいてほしい。

私の両親はクローン。そこから人工授精で生まれたのが私。

両親はまもなく病死。私は幼い時からいろいろ実験台にされた。

とても恥ずかしい思いや、つらい検査もあったわ。」

「両親は覚えている？」

「いいえ。でもデータは見せてもらった。写真も見たわ。

でも何も覚えてはいない。私は組織の手で育てられたお人形さん。

知っているのはこの狭い世界の中だけ。

そして私と同じ、人工的に作られた人間である、速水Fと結婚させられたの。

目的は子供。逆らう事はできなかった。

そして子供はできなかった。実験は失敗。」

真由美のとてもつもなく暗い過去を知って、俺の心も深い闇に沈んだ。

何を言っても空々しいせりふになりそうで怖かった。

「もっと訊きたい？」

「いや。もう充分だ。」

「私の事嫌いになった？」

「とんでもない。君に対する想いがより強くなったよ。」

「やさしいのね。」

「たぶん俺達はそれぞれ離婚することになるだろう。」

そして新たな人生をスタートできるはずだ。できるなら君と・・・」

「ありがとう。夢みたいなお話だけど、うれしい。」

俺達はまた抱き合った。もうこれからの人生に対する恐怖感はないかった。

昼過ぎに自然と目覚めた。

待っていたかのように、佳苗博士からのメッセージが入った。

「すぐに研究室に来て。夕方には亜佐美が戻ってくるから。」

なにか切羽詰った雰囲気伝わってくる。俺はあわてて着替えた。

真由美が不安そうに俺を見つめた。

「大丈夫さ。」

「気をつけてね。」

第二十一章 幸福な結末

研究室のフロアが殺気立っている。

なぜかわからないが、ぴりぴりしている。

佳苗博士はいらいらした様子で俺を迎えた。

「急いでほしいの。4個の種の中からレイナを見つけるのよ。」

「レイナは死んだんですか？」

「そう。でも種に自らを移しているはず。」

俺の前に4個の大きな種がそつと置かれた。

「テレパシーで話しかけて。きつとレイナは目覚めて返事をするはずよ。」

「えらく急ぐんですね。」

「私の読みが甘かったわ。亜佐美と速水Fの力を見くびりすぎた。」

「どうしたんですか？」

「とにかく彼らはまだまだ組織の中での力を維持している。そして私達のレイナに関する作戦も細心の注意を払わなければ、すべてが失敗に終わる。だから、さー急いで。時間がない。」

俺は緊張してレイナを呼んだ。

しばらく待つてみたが、何の反応もなかった。

何度繰り返し返しても結果は同じだった。

「どうしたらいいでしょう。」

「一つずつ手にとって、声に出して話しかけてみて。」

俺は種を取ろうとして手を伸ばした。

そると種の一つが揺れながら俺にテレパシーを送ってきた。

「私よ。ここにいますわ。早く連れて行って。」

「レイナ。レイナなのか？」

「そうよ、レイナよ。」

その時、その横の種が回転しながらメッセージを発した。

「だまされないで。にせものよ。私がレイナよ。わからないの。」

「俺の名前を呼んでくれ。レイナなら知っているはずだ。」

誰も俺の名前を言わなかった。

その後もいろいろ試したが結論は出なかった。

「無理です。わかりません。」

「仕方ないわ。あなたの勘で一つ選んでみて。」

「外れたら、あきらめましょう。」

俺は何の根拠もなく種を一つ手に取った。

種はもう何も言わなかった。

「もう会うこともないでしょうね。力になれなくてごめんなさい。」

「会えないんですか。」

「たぶんね。じゃ、さようなら。後は運しだいってとこね。」

随分あっさりとした話だった。何か変化が起こったことは確かだ。不安が俺の心に重くのしかかった。

部屋に戻ると真由美はいなかった。

俺があちこち探していると、ドアが開いた。

そこには亜佐美と3人の男達がいた。そして車椅子のようなものに乗った速水Fと。

「久しぶりね。」

「帰ってきたのか。」

「少し予定より早く片付いたの。思ったよりこの人たちが手早くこ

とを進めてくれたから。

速水の弟子の中でも選りすぐりの人たちよ。」

危険な感じのやつらだ。

速水Fはサングラスをしているので表情が読めないが、以前とさほど変わらない感じで黙ってこちらを見ている。

「時間の無駄は許されない状態なの。だから簡潔に言うわ。私はこれから速水と一緒に生きていく、夫婦として。

彼は今りハビリ中だけど、まもなく完全に元の体に戻るわ。つまり、あなたとは離婚ってこと。

あなたには悪いことをしたなって、反省してるの。

私が勝手にあなたの人生をいじくりまわして、無茶苦茶にしたんだもの。

できるだけの償いはするつもりよ。」

思っていたとおりの展開だ。俺は黙って最後まで聞くことにした。

「あなたが真由美といい感じなのは、よくわかったわ。気がついたと思うけど、すべて監視させてもらったから。

これからは、二人で外の世界で自由に暮らせばいいわ。

もちろん私達にできることはすべてやらせてもらう。

住居や仕事、うちの組織が支援すればすべて順調にいくわ。」

「あなたは死んだことになっているし、真由美は戸籍もない。でもそれも、ちゃんと整えるから大丈夫。

明後日にでも新しい暮らしをスタートさせてもらうわ。」

何か調子がよすぎる話だ。不安が俺の心をよぎった。

「わかってると思うけど、3人のメイドにあなたを誘惑させたのは私。

あなたと肉体関係をもてば、ここを出て外で自由に暮らせるようにしてやる。

もし失敗すれば、ここの地下作業所で一生働いてもらう。そんな約束をしたの。

結果はあなたが一番よく知っているわよね。

当然3人と関係を持つと思ったけど、意外に真面目なのね。

ミュークは可哀想だけど作業所で働いてもらう。」

「そういうルールだったのか。

なんとかミュークをここで、今のまま働かせてくれないか。

地下の作業所ってなんだかきつい仕事みたいだから。」

「ルールはルールよ。決めたルールを守らないと賭けの意味がないでしょ。

それに、もうあなたには関係ないことよ。

私はあの3人を私のそばから離すって決めたの。ほかの女達も全部。

実はね、この階で働く女達はみんな速水Fと関係を持った女なの。

それを私が探しだして、無理やりここに集めた。私って異常ね。

だからそんな自分にお別れしようと思って。」

亜佐美の怖さを改めて思い知った。

「もう速水Fと私は一生離れない。誰も文句は言わない。」

しばらく沈黙が続いた。

「それにしても、真由美があんなに情熱的な女になれるなんて、

驚きだったわ。あなたもそうよ。私には見せたことのない顔をしてたわね。

レイナにもあんな顔でデレデレしてたのね。

もう死んだからどうでもいいけど、真由美とレイナどっちが好き？」

答えるのも面倒な、無駄な質問だ。

「比較はできない。」

なぜか亜佐美が一人ではしゃいでいる。

速水Fがやっと口を開いた。

「ご存知でしょうが、私もレイナを深く愛してしまいました。

そして死の一步手前まで追い込まれたのです。でも後悔はしなかった。

死を望んでいたのかもしれませんが。その時お嬢様が救出してくれたのです。」

「本当に助かってよかった。

考えてみると、俺達二人は同じ3人の女性に人生を動かされている。

亜佐美、レイナ、真由美。」

「そうですね。たしかに不思議なめぐり合わせですね。」

「とにかく乾杯しましょうよ。真由美とメイサを呼んできて。」

男達が出て行くのと、入れ替わりで真由美たちが入ってきた。

かなり緊張した顔つきだ。

亜佐美が真由美とメイサに説明をしている。

俺は速水に聞きたい事があった。

「真由美のことなんだけど、君はどう思っているんだ。」

「本当に気の毒な女だとは思いますが。でも愛情はないんです。

だから純粹に、あなたと一緒にになって、幸せになってほしいです。」
「わかった。これですっきりしたよ。」

「あなたはもうレイナのことは忘れたのですか。」

「それはありえない。レイナへの想いは永遠だ。」

「ですよね。私にもわかります。でもレイナは死んだんですよね。」
「ああ。」

レイナは本当に復活できるのだろうか。

俺の選んだ種はレイナだったのだろうか。不安だ。

さっきの亜佐美の言葉が心の中で繰り返された。

「レイナと真由美、どっちが好き？」

レイナが帰ってきた時に・・・。

亜佐美たちがこちらにやって来る。話が終わったようだ。

みんな微笑んでいる。 & a m p ; # 8 2 3 5 ;

「お待たせ。さあ、お酒でも飲んでお祝いしましょう。
新しい人生のスタートに。」

メイサがワゴンを運んできた。

「とっておきの赤ワインです。白やシャンペンもありますから。」

「さあ、メイサも一緒に。」

俺達は乾杯をして一気に高級ワインをのどに流し込んだ。

何杯か飲んで、少し酔ってきたかなと思ったとき、亜佐美が耳元でささやいた。

「さようなら、ヒロキ。また、よろしくね。」

違和感のあるセリフだ。

第二十二章 新たな人生

目が覚めると、すぐ横に美しい妻、沙耶の寝顔が・・・
なんて気高く、綺麗な女なんだろう。

もう結婚して5年近くたっているのに飽きることはない美しさ。
常に新鮮な色気、それでいて上品。
俺が見つめていると、妻も目覚めた。

「おはよう。一樹。」

「おはよう。」

「何を見ていたの？」

「沙耶を見てた。いくら見ても飽きないんだ。」
「うれしいわ。」

いつまでも新婚みたいな気持ちが続いている。

今日は日曜日、いつものように妻と買い物に行くのが楽しみだ。
気分は恋人時代のデートと変わらない。

オレは幸せな男だ。毎日がたまらなく楽しい。

転勤でここに引っ越してきて1年。

最初は不安だったが、今はとても居心地がいい。

同時期に沙耶のいとこ、シャコーラが近所の大学に入り、一緒に暮らすことになった。

シャコーラは日本の国籍をもっているが、見た目は白人だ。

沙耶とどこでつながっているのか、知らないが。

近所の人達や、新しい仕事仲間達も皆不思議なくらい親切だ。
たまたま大学時代の友達も近くにいます。

昔より頻繁に会うようになった。
にぎやかで楽しい、充実した日々。

「そろそろ朝食にしましょうか？」

「もうちよつと、だらだらしていたいな。」

といいながら、妻の体に手を伸ばした。

「もう、いやよ、朝から。それにもうシャコーラも起きてるわよ。
また後でね。」

俺は未練たらしく妻の体を撫で回していたが、
妻はするりと体をかわして、ベッドから離れた。

「今日はシャコーラは友達と遊ぶから、晩御飯はいらないって。」

「じゃ買物のもと、どこかに食べに行こうよ。」

「そうね。久しぶりに二人きりね。」

話しながら着替えている妻の体を眺めた。
今すぐ抱きたくなってきたが、我慢するしかない。

一階に降りていくとシャコーラが待っていた。

「おはよう、一樹さん。」

「おはよう。今日は早く目が覚めたんだね。」

「遊ぶ日は目覚めがいいのよ。朝食何がいい？」

「君が作るのかい？ちよつと待つてれば、すぐに奥様も降りてくる
よ。」

「そうね、じゃ沙耶と一緒に作るわ。」

二人が一緒に料理を始めた。

それを遠くから見ていると何か懐かしい感覚が俺を包んだ。
どこかで見たような風景・・・

シャコーラがいつもより数段派手におしゃれをして出て行った。新しい男とデートたろう。今日で落とすつもりだろう。俺の頭にシャコーラのみだらな姿が鮮明に映し出された。

あまりにも細部まで鮮明に描き出されたので、自分で驚いた。シャコーラの裸を見たこともないし、想像もしたことがない。そういう目で見ないようにしているのに、なぜ。自分の性的な欲望にうんざりする。

「どうしたの、苦々しい顔しちゃって。」

「なんでもないよ。さー俺達も出かけよう。」

妻の買いものに似付き合うのはいつも楽しい。一緒に妻の服や小物を選んで、生活用品を買う。それだけで幸せだ。

やはりデート感覚がいつまでも残っているんだろう。二人で歩いているだけで、時間がバラ色になる。

気がつくとランチの時間になっていた。

「おなか、空いた？」

「そうね。どこに行く？」

「実はもう予約してあるんだ。ちょっと高いけど素敵な店らしい。桜井に教えてもらったんだ。」

「あの人、本当にそういうことに詳しいわね。」

店には豪華な待合室が用意されていた。

ここで、お酒を飲みながら席が用意されるのを待つらしい。

俺達以外にも二組のカップルが待っていた。
渋めのBGMとすわり心地のいいソファーがリラックスさせてくれる。

高級な店だが、若い客も多く、おしゃれな雰囲気があふれている。
芸能人やプロスポーツの選手もよく来るらしく、サインが飾っている。

きっと有名な人たちばかりなのだが、一人も知らなかった。

何故か俺達夫婦は、驚くほど世間のことに疎い。

最近は、なるべく各界の有名人の名前を覚えるように努力している。
まあ、別に仕事上も問題はないのだが、やはり常識を疑われる。

突然、表で黄色い声が聞こえてた。

しばらくすると、体格のいい男が二人、店に入ってきた。ボディーガードらしい。

同時にウェイター達がすばやく対応した。

その後、颯爽と現れた一際派手なカップル。

どうやら男が有名人らしい。

「ここでキョウイチに会えるなんて、」

「やっぱり一般人とはオーラがちがうね。連れてる女もランクが違
うよ。」

「思ったより背が高いんだー。スタイル抜群よね。」

キョウイチが何をする人なのかはわからなかったが、憧れの存在
らしい。

しかしどうみても、存在感もオーラも一緒にいる女のほうが上だっ
た。

圧倒的な美しさ、神秘的なほどしなやかな身のこなし。

その時、俺の頭に誰かが話しかけた。

「みつつけちゃた。あなた。」

俺は周りを見回した。誰も俺を見ていない。

「私が誰かわかる？またあとでね。待っててね。」

俺は叫びたいほどの恐怖を感じた。冷や汗が湧き出た。

「どうしたの、あなた顔色が悪いわよ。大丈夫？」

「誰かがオレを呼んでいた。それもテレパシーを使って。妻が心配そうに俺を見つめている。」

あきらかに精神の異常を心配している。

「頭が狂ったわけではないんだ。」

「何を話しかけてきたの。」

「見つけたって。あとでまた、とも言っていた。」

「もう帰りましょう、なんか怖いわ。」

「いや、何が起こるか、みてみよう。」

怖いけど逃げることはできないような気がする。

はつきりさせてやろう。とにかく今は食事を楽しもう。」

「不安だわ。」

第二十三章 嵐の前の

料理は飛び切りの味だったのかもしれない。
でも味わう余裕がこちらにはなかった。

何時あの声がオレに呼びかけてくるのか、わからないから。

妻の沙耶も心配で食事どころではないようだ。

「大丈夫。気分悪くない？」

「今のところ何も起こらないようだ。」

「さっきの有名人カップルだけど、」

「あの男、キョウイチって何をする人なのか知ってる？」

「知らない。それよりあの女の人、気になるわ。」

「綺麗な人だったね。」

「あなたをみた、あの一瞬のすごい目つき。忘れられない。
そしてすばやく視線をそらした。何か異常な感じがしたの。」

「へー。気がつかなかった。気のせいじゃないのか。」

隣のテーブルでも、キョウイチの噂をしている。

「やつぱり、あんな女と遊んでいるから、いい曲もかけるし男の色
気もあるんだろうな。」

「うらやましい？」

「そりやそうさ。あんな豪華な女、見たことない。」

「そんなに綺麗な女だったかしら。」

「あれはどうみても、キョウイチのほうがメロメロに惚れてるよ。」

「あの遊び人がそんなにほれ込む？」

「さっきの二人を見てればわかるさ、力関係が。」

どうやらキョウイチは作曲家か何かで、プレイボーイでもあるら

しい。

その時ついにあの声が俺に呼びかけた。

「二階の化粧室にあがって来て。あなた一人で。」

俺が顔色を変えたのを見て妻が慌てた。

「どうしたの、何か聞こえるの。」

「さっきと同じ声だ。二階に来て。」

「私も一緒に行く。」

「一人で来いってさ。とにかく行ってみるよ。」

「私を置き去りにして、どこかに行ってしまったくないでね。」

「当たり前だ。心配しないで。」

二階に上がる階段のところにウェイターが立っている。

軽く会釈しながら、オレを疑いの目で見ている。

気にせずにあがっていくと、そこにもベストを着た女がいた。

やはり疑いの目で俺を見ながら言った。

「突き当たりが紳士用でございます。」

「ありがとう。」

とにかく男子用トイレに向かって歩いた。

あの声が心に話しかけてきた。

「そのまま鏡の前に立って、何気ないそぶりで聞いてほしいの。」

俺は周りを見渡した。誰もいない。

「きよろきよろしないで。お願い、落ち着いて答えて。」

「君は、」

「声に出さないで。心の中で念じて。」

さっきの女がこっちをにらんでいた。

「俺に何を訊きたいんだ？」

「あなたの名前は？」

「一樹。」

「違うでしょ。本当の名前は。」

「誰かと間違っているのか？俺は藤田一樹だ。」

「ありえない。でも、嘘をついているわけでもないみたいね。」

「俺に聞きたいことはそれだけか？」

「もうひとつだけ。レイナを知ってる？」

「誰？」

「もういいわ。今日のことは忘れて。さようなら。」

俺はあわててトイレを出た。誰もいない。

あの監視役の女が何か見ていたかもしれない。

「今誰か下に下りていったかい？」

「いいえ、誰も。」

しばらく女子トイレから誰か出てくるのを待ってみたが、無駄だった。

「誰かをお待ちですか？」

また不審者扱いされている。

「いや。勘違いらしい。席に戻ってみるよ。」

その場を誤魔化して下に下りた。

席に戻ると、沙耶が立ち上がった。

「大丈夫だった？」

「人違いだった。俺をヒロキって言う男と間違ったようだ。」

「ヒロキ。なんか聞いたことあるような・・・」

「あとレイナを知ってるかって。」

「レイナ・・・・・・。」

店を出る時に、入れ違いでカップルが入っていった。
亜佐美だ。横にいたのは速水だろう。

面倒くさいので声もかけなかった。

彼らとは大学時代からの友人だ。

どうせ毎週会っているし、亜佐美と俺は不倫を続行中だ。
なぜ彼女と不倫しているのか自分でもわからない。

愛情もない。外見も好みではない。

時々考えてみるのだが、出会った頃を思い出そうとしても、大した印象がない。

俺と沙耶、速水と亜佐美、俺たち4人は同じ大学のサークルで知り合った。

でも色々思い出そうとしても、いつも同じ風景しか浮かんでこない。

なつかしさや深い思い入れもない。

でも今でも親密に付き合っている。不思議だ。

「さっきの、亜佐美たちじゃなかった？」

「たぶん。」

「あの二人もこの店に来るのね。考えることは同じね。
ちよつと、声かけてくるわ。」

「いいじゃないか。また長くなるし、面倒だよ。」

「そうね、どうせ明後日会うもんね。」

「そうだよ。それより気分を変えて、違う店でお酒でも飲もうよ。」
「そうしましょ。ほつとしたら、なんかお腹すいてきちゃった。」

第二十四章 真実へのヒント

あれ以来、あの女からの声は聞こえない。
やはり俺が、おかしかったのかもしれない。
だとすれば、ノイローゼ。心の病……。

やはり亜佐美との不倫が俺の心を蝕んでいるのだろうか。
俺が愛しているのは沙耶だけなのに。
誰かに相談したいが、事が不倫だけにむづかしい。

明日は亜佐美と会う日。

妻は本当は気づいているのではないか、と思うことがある。

「ねー。亜佐美のことなんだけど。」

おれはドキツとして、動きが凍りついた。

酒のつまみを取ろうとしていた箸が、手から滑り落ちた。

妻は笑いながらそれを拾い上げた。

「少し危ない状況みたいよ。」

「どういう意味？」

俺の声は震えていたかもしれない。

どうやって謝れば、妻を失わずにすむのか、教えてほしかった。

「今朝テレビで見たんだけど、キョウイチが入院したのよ。
昨日、私達が見たあの後よ。原因不明の病気ってことだけど。意識
不明ですって。」

どうやら話は俺の不倫とは関係なさそうだ。よかった。

「で、それが亜佐美と何か？」

「キヨウイチは亜佐美の会社のお客さんだったみたい。他の客にも似たようなケースがいくつかあって、亜佐美達が疑われているんだって。」

被害者は各界の有名人ばかりで、世界レベルの事件になりそうだって。」

テレビやネットでも結構な騒ぎになっているらしい。

調べてみると外国の政治家や著名人にも同じような話題が持ち上がっていた。

被害者は裕福な男。

一般的なドラッグの反応はないが、症状に類似点がある。体力の消耗が激しい。が若返りの兆候がみられる。

何かに対して強い思い込みがあつて、それ以外のことが手につかない。

などの共通点が書かれてあつた。

その時、亜佐美からのメールが送られてきた。

「しばらく仕事がんばたしていて、会えないわ。落ち着いたら、必ずこちらから連絡するから。ごめんなさい。」

いつもの暗号のようなメッセージではなく、そのままの文章だ。妻にも同じようなメールが届いたらしい。

「亜佐美からメール。やっぱり危ないみたいね。」

「俺にも亜佐美からメールがきたよ。心配けどどうしようもないな。」

「何をしている会社なのかも、よく知らないしね。」

「付き合いは長いけど、そこは秘密っぽいよな。」

これで亜佐美との関係が終われば良いな、と思った。
卑怯かもしれないが、いいチャンスに違いない。

「速水がついているから、大丈夫だろう。」

「そうね。彼はどんな時でも冷静沈着、間違うことはないもの。」

テレビをつけると、若い子のファッション情報の番組だった。
チャンネルを変えようとすると、あの声が聞こえてきた。

「レイナよ。私を思い出して。あなたの永遠の恋人レイナを。」

俺は凍りついたように画面を見つめた。4人のモデルらしい女が映っている。

誰もこちらを見てはいない。ただ颯爽とステージを歩いているだけ。

「まただ。あの声が聞こえる。」

「大丈夫？落ち着いて。」

「ヒロキ、私は待っている、あなたが迎えに来てくれるのを。」

あわててチャンネルを変えてみた。声はしなくなった。

もう一度さっきのチャンネルにすると、再び同じメッセージが・・・。

「聞こえないか？あの女の声が。」

「音楽以外何も聞こえないわ。」

「やはり俺はおかしくなっているのかもしれない。

一度医者にみてもらったほうがいいな。」

「明日行く？私もついていくわ。」

「いや、大丈夫だよ。一人で行く。」

カウンセリングで不倫のことを相談したかった。
でも妻がいればそれができない。

朝、会社に連絡して休みをもらった。

体調が悪いといったら、しつこく内容を尋ねられたのには少し驚いた。

まるで何か疑っているみたいだ。

昨夜調べたカウンセラーに向かって、いつもと逆方向の電車に乗った。

するとそこに桜井がいた。

「おー、桜井、どうしたんだ。偶然だなー。」

「ちょうどよかった、連絡を取ろうと思っていたところだ。

いろいろお前に言わなくてはいけないことがある。今、時間あるか？」

「いや、今から仕事があるから。」

「頼むよ。遅刻して行けば良いさ。」

「そうはいかないよ。約束があるから。」

「長い話になるけど大切なことなんだ。昼までには終わらせるからいいだろ。」

いつもにはない強引さが、ことの重大さを感じさせた。

「じゃ、一時間だけ待ってくれるか。その間に用事を済ませるからあとはもう休みを取るよ。」

「わかった。ありがとう。どこに行くんだ。」

「次で降りるよ。一時間後に会おう。」

「わかった。」

なぜそんな大事な話を、急にしかも偶然電車で・・・でも桜井は俺の一番の友達だ。

その彼があんなにまで、いうのだから仕方がない。それがどんな話でも、親身になってきくべきだと思った。

病院は近代的で、まるでホテルのような受付だ。

「初めてです。」

といいいながら保険証を出した。

「予約なしですね。それではこの書類に・・・。」

何故か受付嬢の動きが止まった。そして立ち上がった。

「えーと、こちらにどうぞ。」

奥のエレベーターで5階まで上がる間、息苦しい無言の時間が続いた。

迷路のような通路と同じようなドアをいくつも通って、やっと診察室についた。

前にもこんなことがあったような気がした。

「先生がお待ちです。」

「ありがとうございます。」

中に入ると、プロの格闘家のような大男がいすに座って待っていた。

「どうぞ、そこにかけてください。リラックスして。」

不気味な優しさだ。

「どうしました。」

この前からの「あの声」のことを話した。

その後も30分ほど、インタビューが続いた

「では催眠療法をかけてみましょう。」

目が覚めるともう医者はいなかった。

代わりにナースらしき女性が俺の手を握っていた。

「もう大丈夫ですよ。何も心配しないでください。
ゆっくり起き上がって、深呼吸してください。」

医者からの説明はなかった。

「何も問題ないそうです。また気になったら来てください。」

「催眠療法で何かわかりましたか？」

「特別なことは何も。」

不倫のことも相談できなかった。

どうもここはあまりちゃんと診察してくれそうにない。

そのときナースが小声で話しかけた。

「明後日の9時にもう一度来てください。今度は私が診ますから。」

「わかりました。」

部屋から出ると、すぐに受付の部屋だった。

来るときのあの迷路は何だったのだろう。

駅について桜井にメールを送ろうとすると、もう目の前に彼が来ていた。

「さあ、どこか落ち着いて話せる店に行こうか。」

第二十五章 桜井の男気

「ここの和風カレーはすごくおいしいんだ。食べるか？」

桜井は趣味がグルメなのかもしれない。

この手の情報をいつも話してくれるが、俺はあまり関心がなかった。

「いや。まだ食事は早いな。飲み物だけで良いよ。」
「そうだな。」

といいながら、メニューを開いた。そして指差した。

「これがオススメだよ。絶対気に入ると。思うよ。」

指された所を見てみると、桜井の指先にメモがの紙切れあった。

そこには、

（監視、盗聴されている。）
と書かれていた。

「そうか、でも普通のホットでいいよ。」
俺は何も見なかったように振舞った。

いったい誰が何のために監視しているのだろう。

桜井が厄介なことに巻き込まれているのは、間違いなさそうだ。

しばらく当たり障りのない世間話をした後、桜井が切り出した。

「最近体調がよくないのか？」

「なぜ、そう思うんだ。」

「いろいろ情報が入っているんだ。」

今桜井が話しているのは盗聴されているのを知ってのことだ。そのことを考えて会話しなくてはいけない。

「そうか。確かに最近、あまりいい状態ではない。当たり前障りのない言葉を選んで会話を続けた。」

「奥さん達も心配してるだろう？」

「そうだな。嫁さんは一番間近で見ているからな。」

どこまで話していいのか、わからない。堅苦しい、重い時間が流れている。

「それで、治療は？」

「ああ、これから考える。まだ決めていない。」

「医者に行くのか？」

「その方がよさそうだ。実はさっき行ってきたんだが。」

何故か桜井はすべて知っているようだった。

俺の病状も、さっきのクリニックも。

そんなはずはないが。

「話は変わるが、お前知ってるか、亜佐美の会社のこと。」

桜井が少しわざとらしい声のトーンで話している。

「ニュースでみたよ。大変な事になっているみたいだな。」

「お前、亜佐美の店に行ったんだって。」

「ああ、あの店が彼女の店とは知らなかったんだけど。」

あの時キヨウイチとかいう芸能人も来ていたっけ。なんでそんなことを？」

「情報は早いぞ。気をつけろよ。
それで何か見たのか？誰かに会ったか？」

相変わらずいつもとは違う感じで話している。

「いや別に。あの時亜佐美は速水と一緒に店に来ていた。
挨拶はしなかったんだが。」

「キヨウイチと亜佐美は会っていたのか？」

「さー、キヨウイチは女を連れていたなー。」

それも飛び切りの美人を。」

「へー。」

それから芝居じみたせりふが続いた。

結局、何が大事な話なのか理解できないまま、1時間半が過ぎた。

「そろそろ、行くか。今日はすまなかったな、時間とらせて。」

「もう話は終わりか？」

「実はお前のが心配になっただけなのさ。話してみて安心したよ。」

大丈夫だつて確信したよ。」

店を出て駅に向かって無言で歩いた。

「もういいよ。盗聴されていない。監視もはずれた。」

「どういふことなんだ？説明してくれ。」

「わかった。車に乗って話すよ。一緒に来てくれ。」

地下街にある駐車場に桜井の高級外車がぽつんと待っている。

「さー、移動しながら説明しないとな。」

「何がどうなってるのか、さっぱりだからな。」

「すまない。でも俺はお前のことを絶対を守るよ。」

「守るって、監視されているのは俺？」
「そう。おまえなんだよ。」

なぜ俺が。

心当たりがない。

もしかしたら、不倫がばれて速水が調べを……。

「お前には言わなくてはいけないことが、いくつかある。」
「やっ」と話の核心にやってきたようだ。

「お前が今働いているのは、亜佐美の組織の会社だ。
そして俺もその組織の一員だ。」

「そんなことって、全く聞いたことない。本当なのか？」

「そして今、亜佐美の巨大な組織が小さな危機を迎えている。」

「それはあの、キョウイチとかいう……。」

「そうだ。あの事件はほんの一端でしかないが、大きなきっかけになっている。」

「それで、俺たちにもその影響があるってことか？」

「おまえはそのことに関しては鍵を握る重要人物なんだよ。」

「俺が？なぜ？」

「すべてを説明するのは無理だ。言えないこともある。」

ただ、信じてほしい。お前は知らないほうがいい。

知れば今の幸せな生活はなくなってしまう。」

俺は混乱した。必死で記憶をたどってみたが、何もなし。
一体何がどうなって巻き込まれているのか想像がつかない。

幸せな生活と言われて、妻の顔が浮かんだ。

「じゃあ、どうすればいいんだ。」

沈黙が訪れた。車はかなりのスピードで郊外に向かっている。何処に行こうとしているのだろう。

急に桜井が見知らぬ他人になったような気がする。不安だ。

「組織はお前を守る。そのために監視や盗聴が行われる。組織はお前が外部と接触することに過敏になっている。

おまえは自分では知らないうちに、組織の重大な秘密を背負ってしまった。

場合によつてはライバル会社や警察、マスコミ、諜報機関のターゲットになる。」

自分のこととは思えない話。

関係ない世界のこととしか思えない。

「今日お前が会社を休むと連絡が入って、すぐに俺に連絡が来た。お前が何処に何をしにくのかはすでにわかっていた。お前が診てもらった医者は、うちの組織の人間だ。」

俺にプライバシーはない、ということか。

「すべてを把握されているのか？会話も行動も。」

「そうだ。体調、精神状態、会話、行動。全てだ。」

「家の中も職場も。」

「そうだ。」

「いつから？」

「今の場所に引っ越してきてから、ずっと。」

ショックだ。夫婦の会話や営み何もかもが見られている。怒りを覚えた。

「今の会話も誰かがチェックしているのか？」

「いや。俺の私生活に関してはプライバシーが守られている。」「いい身分だな。」

「俺は組織の中では優遇されている。」

「幹部か。」

「でも俺とお前は本当の友達だ。いざとなれば、お前のために動くつもりだ。」

実際、今の俺の行動は組織とは関係ない。」

信じる気はしなかった。

ただ、今頼れるのはこの男しかないのも事実だ。

「もう、今の生活を続けることはできないのか？仕事は？」

「すぐには変わらない。幸い、まだお前の存在はどこにも知られていない。」

このままで騒ぎが収まれば、いいのだが。」

車が細い道に入っていく。大きな山小屋の前に止まった。

「さあ。ここが俺の家だ。」

長い付き合いだが桜井の家に来るのは初めてだ。

考えてみれば彼のプライベートに関しては何も知らない。

「俺の妻に会ってほしい。妻はずっとこの時を待っていたんだ。」

第二十六章 衝撃の出会い

ドアを開けるとそこにはまったく違う世界が広がっていた。

近代的で落ち着いた雰囲気、上品な色使いは奥さんの趣味だろうか。とてもいい匂いが充満している。何の香りだろう。

不思議に懐かしい感情が湧き上がってくる。

「妻は奥で待っているんだ。さーどうぞ。」

桜井について長い廊下を歩いていく。

さまざまな色の豪華な照明が幻想的だ。

思っていたよりずいぶん奥行きのある家らしい。

なかなか突き当りが見えてこない。

急に桜井が左に曲がった。細い通路の先に扉が見える。

後ろを振り返ると今来た大きな廊下が見えない。

不思議に思ったが、扉を開いて桜井が待っているので急いで入った。

それは病人をベッドのまま運べるほどの、広いエレベーターだった。

「すごいエレベーターだね。」

「妻は少し体が不自由なんだ。彼女のために広さが必要なんだ。」

「そうだったのか。」

気が重くなる話になりそうだ。

体の不自由な桜井の妻が、俺に何の話があるというのか。見当もつかないが、あまりいい話ではなさそうだ。

桜井がエレベーターのボタンを押した。

ボタンは2つしかないが、桜井はその2個のボタンを10回近く押した。

エレベーターは動き始めた。

エレベーターは下降したあと、横に動き、さらに上昇した。

結局、何階についたのかは不明だ。

扉が開いて、目の前に植物園のような広場が現れた。

桜井について緑の楽園の奥に進むと、光に包まれた特別なスポットが。

そして、優しく微笑む美しい女性が俺をみつめている。

その美しさはまるで・・・妖精や女神。

生身の人間とは思えないほどの神秘的な美しさ。

俺は挨拶もせずに、ただただ見とれていた。

そして何故か涙が溢れて、止まらない。

桜井はそんな俺を観察するように黙って見ている。

「取り乱してすまん。どうしたのか自分でもよくわからない。」

「いいんだよ。」

「はじめまして、レイカです。」

レイカ・・・何処かで聞いたような。

それにしてもなんと綺麗な声だろう。ずっと聞いていたくなる声だ。

「はじめまして、藤田です。ご主人とは長い付き合いで。」

彼女は立っているのか、座っているのか。

ふわつとしたドレスが彼女の足元をかくしていた。
とにかく彼女がその場所から動くことはなかった。

きつと不自由な体というのは、足の事なのだろう。

「足が動かないわけではないのよ。」

頭の中で声が響いた。

俺はびっくりして首の筋がおかしくなるくらい、
前後左右を見回した。

「私よ、レイカよ。私と貴方は声に出さなくても会話できるのよ。」
再び声が響いた。レイカが俺をみつめて優しく微笑んでいる。

「君が最近悩んでいる女の声の正体はこれさ。」
幻聴なんかではない。テレパシィだ。しかも君にしか聞こえない。」

女の声の事を桜井は知っている。
監視、盗聴をされているのだから当然なのだが。

「ある一族と君はテレパシィで会話ができる。」
そして彼らは君を必要としている。だから探している。
そしてまだ見つけてはいない。」

俺は明らかに動転している。

頭の中が混乱して、まとまりがつかない。

何が問題で、何を考えるべきなのか、わからない。

今桜井が話した内容をすぐに信じるわけにはいかない。
でも何故か説得力がある。趣味の悪い冗談とも思えない。

大体、桜井がそんなふざけたことをするはずがない。

桜井の妻レイカは何も言わずに俺たちを見ていた。
底知れない美しさを放ちながら。

「君からレイカに向かってテレパシィを送ることもできる。
やってみてくれ。」

桜井に言われるまま、俺はレイカに向かって念じてみた。
「桜井のことをなんと呼んでいるんですか。」

レイカはクスツと笑ってから声に出して答えた。
「ダーリン、ってよんでるの。」

「本当だ。テレパシィだ。」

俺は言い聞かせるようにつぶやいた。

桜井が近づいてきて、俺の肩に手を置いた。

「言わないほうがよかったのかもしれない。」

俺も迷ったんだ。でもレイカに会わせることにした。」

「さっき一族っていったよな。」

ということは、他にもテレパシィができる人がいるってことだな。」

「例えば、今まで君が受け取ったテレパシィはレイカではない。」

「それが誰だか知っているのか。」

「推測はつく。」

「もっと詳しく教えてくれ。一体何が……。」

「まあ、落ち着け。急ぐとろくなことはない。」

とにかく、俺とレイカがお前を守ろうとしていること。

おまえは特別な存在で組織の監視状態にあること。

まずそれは理解してくれたのか。」

「ああ。わかった。」

「深く知れば知るほど、今の幸せは消えていくと思ってくれ。

あのかわいい奥さんとの、平和な愛に満ちた暮らしは失われる。

それでも構わないなら、俺はすべてをお前に話す。

でもよく考えてくれ。それからでも遅くはない。

まだ時間はあるんだ。不幸になる覚悟があるのか、ないのか。」

どういう意味なのかわからなかった。

ただ脳裏に愛する妻の笑顔が浮かんた。

失いたくない、どうしてもそれだけは。

単純に恐れで感情で溢れた。

「本当に奥さんをそんなに愛しているの？」

レイカがテレパシイで問いかけた。

なぜ言葉を使わない。桜井に聞かせないためなのか。

レイカは相変わらず、美しい微笑を浮かべていた。

目の輝きが眩しいくらい輝きはじめ、表情も鋭い感じに変化していた。

「私に触れたいと思わない？私に近づいてきて。」

強烈な誘惑。額から汗が流れてくる。

「私と接触すれば、何かがわかるかも知れない。

そう思わない？」

だめだ。抵抗できない。

欲望というよりもっと本能的なものに動かされている。

でも桜井が変に思うだろう。

レイカが声に出してしゃべりはじめた。

「今日はこれくらいにしましょう。」

家に帰ってゆっくり考えてから次の行動に移るべきよ。」

桜井が汗でグシヨツリぬれた俺を心配そうに見ている。

「じゃ、また来てね。いつでも私達は相談に乗るから。」

レイカが細くてしなやかな腕を俺のほうに伸ばした。

俺はひざまずいてその手にキスしたいと思った。

「レイカ。」

桜井が大きな声を出した。

「大丈夫よ。あなたはだまって見ていて。」

俺はフラフラしながらレイカに近づいて美しい手を握った。

その時だった。俺の体の中で何かが激しく反応した。

立っているのがやつとの俺をレイカがふわりと包み込んだ。

どうなっているのかわからないが、俺はレイカに抱かれている。

もう死んでもいい。このままずっと抱かれていたい。

幸せな感覚に包まれて意識が遠のいていった。

第二十七章 夫婦の会話

目が覚めると、桜井がそばにいた。

ホテルのロビーのように豪華で静かな場所。

「ここはどこだ。俺は一体・・・」

「やっと起きたか。ここはさっきの隣の部屋だ。」

あれから2時間ほど、気持ちよさそうに寝ていたよ。」

「何が起こったんだ。奥さんは？」

「彼女は自分の部屋で休んでいる。会いたいかな？」

自分の嫁の話をしているのとは違う、微妙な違和感を感じた。

俺とテレパシーで会話ができることにジェラシーを感じているのか。

「いや。もう今日は遠慮しておくよ。」

正直、怖いんだよ。何を恐れているのかもわからないけど、不安で仕方ないんだ。」

「わかるような気がするよ。俺も不安だ。」

近いうちに、必ず大きな変化が起こる。

今の幸せはもうこのままの形では続かない。

それは避けられない。」

今の幸せ、という言葉は桜井とレイカの夫婦生活、

そして俺と沙耶の家庭をイメージさせた。

早く沙耶の所に戻りたくなった。

その時、俺の心の中で不思議な感覚が湧き上がった。

何かが違う。何かをなくしてしまった。
誰かを探さなくて輪いけない。
一番大事な……急がなくては。

あせってもそれ以上はわからない。
俺はじれったさで体中がいらいらした。
俺の様子を見ていた桜井が口を開いた。

「おまえは俺とは違う。
俺はレイカのしもべ、世話人にはなれるが、対等の関係にはなれない。
レイカは優しくしてくれるし、こんな俺にも愛情を注いでくれる。
でもそれは、哀れみに近い感情なのさ。」

今まで桜井に抱いていたイメージとは全く違う発言だ。
こんなにも自信なげな彼を見たことがない。

「奥さんにはレイカのことは言わないでくれ。
これは俺の秘密だ。組織にばれたら俺は終わりだ。
お前だけが知っている。だから誰にも話さないでほしい。」

「奥さんの存在自体が？」
「そうだ。俺は独身、あそこに一人で住んでいる。」
「わかった。」

「常に監視されていることを忘れるな。
組織はお前を守っているが、都合が悪くなれば話は変わる。
もちろん、俺の立場もいつどうなるか。」
「明日から何かが変わるのか？」

「たぶん。」

今朝行ったクリニックの近くの小さな路地で車が止まった。
「何かあったらいつでも連絡してくれ。
すぐに動くから。じゃあ、気をつけて。」

電車に乗って今日起こったことを頭で整理してみた。
結局何も解決はしていない。

ただ俺が正常だとわかったただけでも、一安心だ。
そしてレイカ、あの感覚、あの美貌、レイカ。

レイカ？レイナ？レイナって誰だった？
たしかテレパシーの声が告げた名前。
レイカとレイナは別人なのか？

レイカ、なんて甘い高貴な響きなんだろう。
レイカと唱えただけで体の奥から湧き上がるように、
不思議な快感にも似たものが……。

俺の何が組織の重要な秘密に関係しているんだろう。
これからずっと監視されて生きていけるのだろうか。
考えながら歩いていると、家の前に着いていた。

ドアを開けると、沙耶が不安そうな表情で立っていた。
「どうだった。何かわかった。」

「大したことはわからなかったが、異常ではないらしい。」

「それで。」

「それ以上はまだ何も。医者が帰ってしまったんだ。
電車で桜井に会って、話をされていて、遅くなっただ。」

そういえば明日、あの女医と約束していたのを忘れていた。
もう必要ないからキャンセルしないと。

「あなた、何か変よ。どうしたの？」

俺は沙耶を抱きしめた。

罪悪感が湧き上がってくる。

話せない秘密、レイカ、失神、快感。

そして何かを探そうとしている自分。

沙耶は俺の体を抱きしめながらつぶやいた。

「何だか怖い。貴方を失うのが怖い。」

とつさに答えることができなかった。

俺は沙耶の耳元で囁いた。

「盗聴されている。」

唖然としている沙耶の手を引いて、居間に入った。

抱擁してそつと囁いた。

「監視カメラもあるらしい。」

沙耶はシヨックで黙り込んでしまった。

あまり沈黙が続くと組織が警戒するかもしれない。

無理に会話を仕掛けた。

「まー、あまり気にしないのが一番らしい。

とにかく今日は疲れた、外に食べに行こう。

久しぶりに、シャコーラも連れて行ってやろうか。」

「シャコーラなんだけど、急に母国に帰ることになったのよ。

今日、突然決まったんだって。すごくいい仕事に就けるらしいわ。まー彼女いろんな言葉が話せるし、美人で優秀だから。」

「本当に急な話だな。」

「とにかく、時間がないって慌てて用意してたわ。今は友達やら知り合いに会いに言ってるわ。たぶん今日は戻らないと思う。」

もしかしたらそのまま、行ってしまうかも知れないって。」

変化は始まってしまったのかも。きつと偶然ではない。落ち着くためにテレビをつけた。ニュースがキヨウイチの死を伝えていた。

キヤスターが深刻な表情でスターの死を悲しんでいる。辛口のジャーナリストが声を荒げてまくし立てた。

「同じような事がヨーロッパなどでもおこってるんですよ。有名な富豪や要人が次々と死亡している事態を受けて、日本の警察はもちろん、世界の調査機関が動き始めています。」

疑いの目で見られているのは、例の超巨大企業です。彼らの実体を僕は暴いて見せますよ。

ある程度の情報はつかんでいますが、相手が相手ですから下手すると訴えられるだけですからな。だけど、もう彼らも逃げられないですよ。」

「いよいよ亜佐美の組織が追求されるわね。」

「俺たちにも影響はありそうだよ。」

結局それ以上具体的な話はなかった。

俺たちは食事に出かけた。

監視と盗聴から逃れるために、あえて初めての店を選んだ。尾行されているかどうか、俺にはわからない。

結構にぎやかな店だ。盗聴はしにくいだろう。

食事をしながら、沙耶に今日起こったことを説明した。

レイカの事は言わなかった。

全部話したかったが桜井との約束を破るわけにはいかない。レイカのことを思うと、胸に熱いものがこみ上げてくる。後ろめたい気持ちを隠すように話を続けた。

「これから、何が起こるか予測できない。

仕事もどうなるかわからないし、声の主と会うことになるかもしれない。

亜佐美の組織や警察、そしてテレパシーを使う一族。

誰が俺をどうしたいのか、何もわからないんだ。」

「怖いわ。今のまま平和に暮らしたいのに。

もうそれは無理なのね。」

「今までも、本当は平和ではなかったのさ。

俺たちがそう思っていただけ。完全に監視されていたんだから。」

「誰を信用したらいいの？」

「近所や仕事関係は組織の人間だ。

亜佐美、速水は当然、俺たちより組織を優先するだろう。

今のところ桜井を頼るしかないだろう。」

「関係ない人って周りにいないのかしら？おかしくない？」

「結局、俺たちはあの組織の庭で飼われている犬なんだよ。」

不思議に俺たちには身寄りがない。

どちらも両親は早くに亡くなっている。

俺には兄弟や従兄弟もいない。

こんな時一人でも頼れる身内がいてくれたら・・・。

第二十八章 戦いの渦

監視されている家に帰るのは気が重い。
こんな時こそ本当に沙耶を抱きたいのに。
見られていると思うと、やはりためらう。

どうせ今まで散々覗かれているわけだが。
沙耶も当然いやがるだろうし。

「今日はあの家に帰ろう。

下手に動くと、まずいことになりそうだから。」

「そうね、でも今までと同じように行動できるかしら。

お風呂上りも、着替えも。キスも。」

「明日、仕事場に言ってなんとなく話をしてみる。

いきなり亜佐美たちと対立しても、得することはないしね。」

家についてから、やはり無口になってしまった。

沙耶はシャワーも浴びずに、さっさと着替えてベッドに入った。

俺が風呂から上がってくると、沙耶はもう寝息を立てていた。

美しい寝顔が余計に悲しい気持ちにさせる。

この幸せがなくなるかもしれない。

沙耶の横にそっと寝て、包み込むように腕を回した。

目が覚めると、沙耶が俺の顔をみつめていた。

そして小さな声で囁いた。

「ねえー。休養もらって、旅行に行くことにしましょう。

そのままどこかに行ってしまうば。」

「そんなに上手くはいかないだろうが。でも悪くはないかも。反応を見てから、作戦を考えればいいんだから。」

会社に着くと、すぐに異変に気がついた。

同僚達の顔が見えない。受付の女の子達も代わっている。

上司が近づいてきた。

「どうだ、体調は。」

「あまり良くはないです。精神的な問題みたいで。」

「そうか。少し休暇でもとるか？」

「いいんですか。」

「今ちょうど、人事異動の時期だから。」

「もしかしたら、このセクションがなくなるかもしれない。

でも心配は要らない。名前は代わるかもしれないが。」

意外な展開。逆に不安な気持ちだ。

「当分出社しなくても、給料は全額支給するように手続きしてある。心配なことがあったらいつでも連絡してくれ。」

「ありがとうございます。」

俺たちの動きを完全に読みきっている。

とにかくあの家を離れる口実はできた。

それだけでもいいと思う。

会社を出るときに後ろを振り返ってみた。

みんながあわただしく、片付けている。

まるで舞台のセットを交換するかのように。

沙耶に連絡を取って待ち合わせた。

その時携帯にメッセージが入った。

（予約の時間が過ぎましたが、どうしますか？）

昨日の女医だ。キャンセルするのを忘れていた

（すみません。また連絡します。）

うそをついた。もういいです、とは言にくい。

（どうしても伝えたいことがあるので、一度お会いしたいのです。これは貴方の非常に重要でプライベートなことです。）

なんだろう。面倒くさい話になりそうだが、気にはなる。

（時間がないのなら、こちらから会いにうかがいますが。）

そんなに急ぐ話って。

（今とても、忙しいので）

急に暗くなったので、顔を上げると3人の見知らぬ男に囲まれていた。

そしてあの女医がいた。

「少し時間を頂戴するわ。」

「今妻と待ち合わせをしているので。」

「知ってるわ。彼女も一緒に来てもらいましょう。」

もうすぐここにつくはずだし。」

有無を言わせぬ口調。彼女はただの医者ではないようだ。

この男達は力づくでも俺たちを連れて行くつもりだ。

桜井の言っていた事態が現実のものとなった。

たぶん、対抗する組織か、何かだろう。

「奥様がいらしたわ。」

沙耶が不安そうな顔をして、やって来た。

「さあ、行きましょうか。」

「どこに行くんだ。何の話だ。」

「ここで話すのは危険だわ。すぐそこに部屋があるから。」

本当にすぐ近くのビルだった。

「時間がないから、急いで話すから良く聞いて頂戴。
すぐ貴方の組織の人たちがやってくるでしょうから。」

監禁されている状態で、もう従うしかない。
幸い今のところ紳士的ではある。

「貴方は気づいていないけど、戸籍や経歴はすべてうそ。
そして、記憶も作り変えられている。
さらにとても大切に守られている。
何のためなのかを知りたいの。」

誰の話をしているんだろう。何か勘違いをしているようだ。
「貴方も知りたいでしょ。本当の自分を。
私達に協力してくれば、色々手伝えるけど。」

「何の話か俺にはまったくわからない。
俺の戸籍に誰かが手を加えたって。」
「というか、本当の貴方を消し去ったというべきね。」
「そんな、ばかな。信じるわけにはいかない。」
「もう時間がないわ。あなたを連れて行くと大事になるから、
貴方の奥さんを人質にいただいでいくわ。
奥さんを失いたくなかったら、私達と組むことね。
じゃ奥さん、悪いけど一緒に行きましょう。」

男の一人が沙耶を後ろから羽交い絞めにしようとした。

その瞬間、目を疑う光景が繰り広げられた。

沙耶はすばやい動きで男の股間を蹴り上げ、さらに一本背負いで投げ飛ばして、とどめに、倒れた男の顔面にひざをめり込ませた。男は失神した。その場にいた全員が驚いた。

その時、ドアが打ち破られた。

「逃げるわよ。」

女医と男達が消えるように床の下に落ちた。遅れて戦闘服の男達が入ってきた。意外にも全く後を追うことはなかった。気絶している男を網にくるんで黙って運び出した。

リーダーらしい男が近づいてきた。亜佐美の部下だ。

「怪我はありませんか。」

「大丈夫です。」

「物騒ですから、送っていきます。」

速水から話がありますから、組織の支部にご案内します。」

「ありがとうございます。」

亜佐美の組織に守られている自分を改めて思い知った。表に出ると装甲車のような車が待っていた。男達に守られながら乗り込んだ。

車内では誰もしゃべらない。沙耶も何か考え込んでいる。

「大丈夫？」

「ええ。でも私一体どうしたのかしら。」

あんな大男を一瞬にしてやつつけるなんて。」

「格闘技の経験は？」

「全くないわ。なんか変な気分。大体あの女、誰？」

「この前行った病院の女医だよ。本当の職業は知らないけど。」

「いやな女。二度と会いたくないわ。」

話を聞いていたリーダーが口を開いた。

「もう会うことはありません。死亡が確認されました。」

あとの男達も同じです。」

重い沈黙。

何かよくわからない間に、戦いが始まってしまった。

第二十九章 潜伏

支部に到着した。

何回も門番のいる扉を通り、やっとトンネルに入った。5分ほど緩やかな下り坂を走って、装甲車は止まった。

厳重に守られた部屋に案内入ると、そこに速水がいた。

「やっと来たか。無事でよかった。」

「ありがとう。君の部下のおかげだよ。」

速水は沙耶のほうをチラッと見て会釈した。なぜか、沙耶に対する態度が不自然だ。

「これを見てくれ。」

大きなモニターが現れて、画面に写真が表示された。さっきの女医達の顔。

「彼らは我々と敵対する組織のメンバーだ。知っていると思うが、さきほど始末した。」

速水の平然とした言葉に、怖さを感じた。何か言おうと思ったが、出てこなかった。

「連中の正体は完全に把握していた。つまり、情報戦の勝利だ。」

モニターの写真が切り替わった。

「だが、敵対する組織は一つではない。これからも当分戦いは続く。」

そして双方にそれ相応の犠牲者は出るだろう。」

面倒くさい話が続いた。色々な名前が出てきた。とても覚えられないし、興味もない。妻は不思議と熱心に話を聞いている。

話が核心に触れないまま、一段落した。

「何か質問はあるか。」

「俺もこの組織の人間なのか？」

「君も奥さんも、我々の仲間だ。」

「なぜ俺が、狙われるんだ？」

「やつらは君を重要人物と考えている。」

「俺はこの組織のとして重要なのか？」

「知らないほうがいい事もあるが、これだけははっきりさせておく。う。」

君はいろいろな意味でとても重要な人物になってしまった。」

それ以上は教えてもらえなかった。

「しばらくは外の世界と離れて、ここでゆっくりしてもらおう。普通に生活できるようにしてあるから、楽しんでくれ。」

一ヶ月もたてば事態は収拾の方向に向かうだろう。

ちなみに君達の部屋はプライバシーが守られている。

カメラもマイクも何もないから、くつろいでくれ。」

速水は立ち上がり、俺たちについて来るように促した。部屋から出ると、長い下りのエスカレーターが動き始めた。どこまで降りていくのだろう。

「地下の世界は組織の人間だけの暮らしだが、

かなりの規模だ。たぶん想像を絶するものだと思うよ。
このカードを使って、支払いをしてくれ。」
桜井は俺たちの名前の入ったカードを差し出した。

やっとエスカレーターが到着した。
そこは巨大な繁華街。ありとあらゆるレジャー施設が用意されている。

そしてあらゆる世代の人間でにぎわっている。
こんなに多くの人間が地下で暮らしているのが信じられない。

「驚いただろう。
ここでは何も心配せずに楽しんでくれ。」

街のマップ、仮の住まいの番号とキーを渡された。
速水と別れて、街を歩いた。
まるで他の国を散歩しているみたいな気分。

洒落たカフェに入って、少し休むことにした。
「さっきの女医たちが言っていたことを覚えているかい？」
「ええ。貴方の記憶をどうか、戸籍がどうか。」
「俺は一体何者なんだろう。」
「私も同じ事を考えているの。」
「さっきのプロ並みの格闘技は偶然ではないよ。」
「自分でもびっくりしているの。」

「とにかく今の俺には君だけが真実だよ。
たとえ何が起こっても、君だけは失いたくない。」
妻が不思議そうに俺の顔を見ていた。

1時間ほど散歩して、俺たちに与えられた部屋に行ってみた。

十分な広さと、しゃれたセンスの家具、贅沢な絨毯。

「素敵な部屋ね。これが普通の旅行だったらいいのに。」

俺たちはいつもより深く愛し合った。

追い詰められているから、余計に燃え上がった。

1週間が過ぎた。ここでの生活に慣れてきた自分が悲しい。

毎日、朝の10時に二人で速水の部屋を訪れる。

それが俺たちに唯一の仕事。

毎朝、何十人も人間が死んだことを知らされた。

ほとんどが相手側の被害だったが。

「こんなに多くの人間が死んで、世間では騒いでいないのか？」

「警察やマスコミは気づいていない。」

多くの場合は普通の交通事故や火事、病気で処理されている。

我々の方の犠牲者は行方不明者にさえならない。」

「というത്？」

「彼らは戸籍上、存在していない。」

だから死体さえ処理してしまえば、何も問題ない。」

「奥さんは何か問題ありませんか？」

やはり速水の態度が不自然だ。何故だろう。惚れているのか。

「美容院に行きたいんですけど。」

「わかりました。たくさんありますよ。」

どの店が評判がいいのか、調べさせます。」

速水は決して沙耶と視線を合わせなかった。

「ところで桜井は俺たちがここにしていることを・・・」
「もちろん知っているはずだ。今こんな時だから忙しいんだろう。
そろそろ現れると思うが・・・。」

速水らしくない自信なさげな言葉が、俺を不安にさせる。

「何かあったのか？」

「彼の家が燃やされた。焼け跡には誰もいなかった。
無事に脱出できたはずだが、まだ連絡がない。」

桜井も心配だが、レイカのことを考えると体中が熱くなった。
その時、女の美しい声が俺の脳に響いた。

（レイカは大丈夫よ。安心して。）

俺は驚きを表情に出さないように、冷静を装った。

（誰？）

（レイナよ。会いたいわ。お願い、私の所に来て。）

汗が噴出してくる。

それを見た速水は立ち上がって、俺の肩を抱いた。
「大丈夫さ。あいつは不死身だ。心配ない。」

部屋に戻ってから、昼食に出かけた。

俺は依然動揺したまま。食欲なんかあるはずもない。
店に入っても、考え込んでいる俺を沙耶はじっと見ていた。
「またあの声なの？」

鋭い勘。何も隠し事はできない。

「ああ。でも前の声とは違う。」

俺は沙耶に隠していた事をすべて話した。

桜井の妻レイカのこと、テレパシー、

レイカと俺の間で行われたあの秘密めいた行為。

沙耶はしばらく黙っていた。そして俺をみつめながら言った。

「とにかくまずレイナと会ってみたら。」

それから考えたらいいじゃない。」

突き放したような、きっぱりとした言い方が俺を追い込んだ。

沙耶がくるつと俺に背を向けた。

第三十章 復活愛

沙耶が無言で美容院に出かけた。
異常な緊張感が俺を襲う。

こんな気持ちで暮らすなんて、耐えられない。
絶望的な気分。なげやりな脱力感。

俺は何のために生きているのだろう。
そのときだった。

（今すぐ来て。）

この前と同じ声だ。体に生気が戻った。
わくわくしている自分に嫌悪感を覚えた。
この声の女にどうしても逢いたい。

（何処に？）

（まず本屋に行つて。）

俺は出かけた不思議な気分で。

（本屋に着いたけど。）

（右のほうにある赤い本を読むふりをして
それからエスカレータで下に下りて。）
その後も指示どおりに進んでいった。

目の前にわいせつな風俗店が現れた。
（その店に入つて。）

抵抗があつたが、入ることにした。

「いらつしゃいませー。」

下品だが間違いなく魅力的な女が迎えてくれる。

「少しお待ちくださいね。」

俺の顔を見て、女が慌てて奥に入ってしまった。

（貴方が来ることは話してあるから大丈夫よ。）

カーテンをあけて、別の小柄な女が出てきた。

「こちらへどうぞ。」

（その娘の言うとおりにして。）

半透明の服が艶かしい。

後ろを歩いていても、恥ずかしい。

一見豪華に見えるベッドの前で女が振り向いた。

「こちらで、横になつてください。」

俺がぎこちない動作で、ベッドに寝転がる。

女は服を脱ぎながらベッドの周りのカーテンを閉めた。

滑らかな動きで俺におおいかぶさった。

その時、めまいが・・・・。

違う。俺は落ちている。女はいない。

底が抜けたようだ。

恐怖で何がどうなったのかわからない。

ふわりと俺をやさしく包み込む何かがある。

「やっと会えたわね。」

なんて美しい声なんだろう。

俺は声のする方に顔を向けた。

「レイナ・・・レイナ。」

無意識でつぶやいた。頭の中の何かが動いた。

俺はレイナに抱かれていた。

幸福感が俺を支配している。
こんな気持ちって・・・。

美しい。芸術のように。

この世のものとは思えない、
という表現がこれほど似合う美人がいるとは。

水色の光り輝く髪、底知れず深い、吸い込まれそうな瞳。
艶かしく美しい曲線を描く胸から腰。豊満で可憐なヒップ。
何もかも忘れさせる唇。上品で肉感的な脚。

一目見てレイナだ、とわかったのは何故なんだろう。

「思い出したのね。私のことを。」

「不思議だけど、すぐに君が誰なのか、わかった。」

「会えてうれしい？もっと思いたい？」

俺はレイナの顔から目が離せなくなっていた。

もうだめだ、我慢できない。

激しい欲望が俺の体を支配した。

「この時を待っていたのよ、ずっと。」

レイナが俺の体を愛撫している。

いやキスしている、いや・・・何かが・・・。

激しい快感の嵐が体の奥底から竜巻のように襲ってくる。

そして俺は思い出した、この激しいめまいのような感覚。

レイラの時よりも、もっと・・・。

全ての神経が悦楽の極致に到達する。
もう俺は死んだのかもしれない。

でもかまわない、このために今まで生きてきたに違いないから。

俺の全ての組織がレイナに愛されている。

そして俺は崩壊していく。

レイナは俺と完全に一体化した。もう離れることはない。

俺はレイナ。レイナは俺。

レイナの記憶が全て俺のものとなる。

レイナと俺の愛の軌跡。

深く激しい気持ちで結ばれた二人。

すべてをはっきりと思い出した。

出会いから今までの長い道のり。

俺はヒロキ。一樹ではない。

レイナを夢中で愛している平凡な男。

人間ではないレイナを。

第三十一章 贅沢な優柔不断

どれくらい眠っていたんだろう。

目覚めは爽快だ。若返ったようだ。

豪華なベッドでレイナと並んで抱き合っている俺。

レイナは俺を見つめて微笑んでいる。

「もう離さないわ。前の時とは違うから。」

「確かに違う。君は驚くほど・・・

なんていうか、進化したんだね。」

「そうよ。あなたのために全身、女になった。

すみから・・・すみまで、女よ。

歩くこともできるし、走ることも、跳ねることも。」

完璧な美、こんな女と俺はつりあわない。

だけどレイナは俺を愛してくれている。

不思議だが現実だ。

「今日は真由美のところに帰って。」

沙耶ではない、真由美だ。

彼女にどう接していくべきだろうか。

彼女は偽の記憶を持ったままだ。

「あまり急がないで。私にまかせて。

この組織は巨大だし、強力だけど、弱さもある。

利用価値もある。」

「まかせるよ。俺の力では何もできないし、

この先も想像できないから。」

「また明日同じ様に会いましょう。」

「わかった。でもばれないかな。」

「大丈夫よ。」

ベッドごと機械で上に引き上げられ、あの風俗店に戻った。ちゃんとあの女が待っていた。

「じゃ、またね。」

カーテンを開けるとすばやく表に歩いていく。俺も続いてレジで、支払いを済ませた。

真由美に会うのが怖い。もう今までのようにはいかない。

真由美を裏切った事に変わりはない。

ドアを開けると誰もいなかった。

ホッとしたが、不安にかられた。

しばらくぼんやりとしていた。

何か考えなければ、とわかっているが無理だった。

真由美と過ごした偽夫婦の楽しかった日々。

そういえば、シャコーラ、いやメイサも記憶を奪われたままだ。

でも彼女はこのままでも幸せになれ、かもしれない。

新しい人生のほうが……。

でも真由美は、このままで幸せになれるだろうか。

レイナと真由美、選ぶことはできない。

その時ドアが開いて真由美が帰ってきた。

暗くうつろな表情。目は下を向いたまま。

「亜佐美が殺されたわ。」

「えっ。」

「亜佐美の別荘が火事で焼けたの。亜佐美の遺体を確認されたって。」

深くて暗い声だ。真由美のこんな声聞いたことない。

不思議と亜佐美の死は驚かなかった。

彼女とは何回も抱き合った間柄だが、それだけだった。なんの愛情もない。俺は冷酷な人間なのかもしれない。

「速水は思ったほど、ショックを受けていないわ。どんな時でも冷静ってわけ。あなたはどうか？」

真由美が意地の悪い視線で俺を見ている。

「私、速水とゆっくり話しをしたの。」

意外なことを一杯教えてくれたのよ。」

もともと夫婦だった真由美と速水が一緒にすごした時間。

俺は動揺している。嫉妬ではないが混乱している。

「何を教えてくれたんだい。」

「何だと思う。あててみて。」

いろいろと頭に浮かんだが、知らないふりをしたほうがいい。

真由美がなぜか、微笑みながら続けた。

「速水は人工的に作られた人間なのよ。」

桜井も。そして彼も本当の名前は速水。

そして彼らは……………」

もちろん、俺は知っている。
ショックを受けたふりを続けた。

真由美が、自分も普通の人間ではない事に気づくのがこわい。
記憶を消されたことも、知らないままできてほしい。

「ところで、亜佐美って、あなたのことが好きだったのね。
私全然、気がつかなかった。」

俺の体から一気に汗が噴出した。
「あなたは、知ってたんでしょ？」
「いや、まったく。」

俺はうろたえて、手が震えた。
「あなたと私って、」
その先を聞くのが怖い。

俺はこの女を失うのを本当に恐れている。

「最初に会ったのはいつだったかしら。
不思議だけど、あまり印象がないのよ。」

「存在感が薄いから、仕方ないよ。
俺は初めて君を見た時のことを今でもはっきり覚えているよ。
一目ぼれだったよ。」

「抱きたいと思った？」
明らかに真由美の声の調子が変わった。
最後のチャンスかもしれない。

「いや、純粋な恋愛感情だった。」

「もつと聞かせて。」

真由美が俺に体を密着させてきた。

俺の目を覗き込むようにみつめながら・・・。

第三十二章 意外な別れ

俺は真由美を深く愛している。

それを思い知った。

この女を失ったら、俺の人生の輝きが消えるだろう。

しかし、レイナに対する気持ちも変わらない。

体の奥底から押さえきれないモノが湧き上がる。

レイナのために俺は生きている。

すべての事が、彼女のためになるように。

「明日は？」

真由美が寝返りを打って、俺に抱きついた。

暖かくて、柔らかい彼女の肉体が俺の五感を揺さぶる。

「今日、たまたまトレーニング・ジムをみつけてね。

明日入会のために面接して、手続きをするんだ。」

「そうなの。」

「夕方には帰ってくるよ。たぶん少しトレーニングを・・・。」

「わかった。」

うそ丸出しだ。説明が多すぎる。

男は嘘をつくのが下手だ。

「君は？」

「別に。まだ決めてない。」

俺はすでに後悔している。

やはり真由美と一緒に過ごすべきなのかもしれない。
明らかに真由美を落胆させてしまった。

この場合は誤魔化せても、うそはいつか必ずばれる。
どうするんだ。どうしたいんだ。

自分に問いかけても答えは出て来るはずはなかった。
俺は真由美を理解していなかった。

朝、目を覚ますと横に真由美はいなかった。

どうやらもう出かけたようだ。

メモも残っていない。少し不安になった。

（早く来て、一秒でも早く来て。）

美しい声、レイナ。甘く切ない感情がわきあがる。

（すぐに行くよ。すぐに。）

あわてて身支度をして、飛び出した。

昨日の風俗店の前に来た。店は開いていない。

（横の階段を下りて。）

細い階段を下りると、シャッターの下りた地下街だった。

（右に曲がって、又階段を下りて。）

そこは、スポーツ・ジムの入口だった。

（入って、名前を言って。案内してくれるから。）

入っていくと、快活そうな女が立っていた。

「おはようございます。会員カードをお預かりします。」

「会員ではないんだ。俺の名前はヒロキだけど、何か聞いていますか。」

「ヒロキ様ですね。ちょっとお待ちください。」

女が奥の部屋に入っていった。

入れ替わりに、中年のお洒落な女が会釈をしながら、出てきた。
「どうぞこちらに、ヒロキ様。」

奥のロツカールームには、エレベーターが扉を開けて待っていた。
「B4を押してお待ちください。」

すぐにB4についた。そこには当然レイナが待っていた。

「思ったよりも事態が早く進んでいるわ。私にとってはいい事だけ
ど。」

「何の話？」

しばらくの沈黙があった。

そして、奥に向かつて歩き始めた。

おれはレイナの後姿を追いながら、薄暗い廊下を進んだ。
レイナの腰や足に目が行く。美しいだけでなく扇情的だ。

何度も曲がって奥に進んでいく。

前にもこんな迷路があったような気がする。

そうだ、亜佐美の部屋や、あの病院と同じだ。

やがて、昨日の部屋にたどり着いた。

ドアが閉まると、どちらからともなく抱き合った。

たまらない肉体の感触と甘い香り。

もう夢見心地に……。

その時耳元で、レイナが話し始めた。

「もう真由美は帰ってこないわよ。わかっていないみたいだけど。」

「えっ。今日の夜から、もう……どこに……。」

思考が停止した。

「真由美と速水は一緒に姿を消した。」
脳がパニック状態に陥った。
意味がわからない。

「二人が何か・・・いつから、そんな・・・でも・・・」
みつともないほど、あわてていた。
そんな俺をレイナはやさしく抱きしめる。

レイナがゆつくりと解説を始めた。
俺の混乱を解くために。

「彼らは、ともに大きなものを失った仲間なのよ。
速水は亜佐美を、そして真由美はあなたを。
速水は元妻の真由美に憐れみを感じ始めていた。
真由美は頼れる男として速水に魅かれていた。
そして結ばれた。自然の成り行きでしょ。
お互い人間ではない二人が。」

俺は、真由美に見捨てられた。
そして速水に裏切られた。
もう俺にはレイナだけが頼りだ。

「これからが大変よ。
もうあなたをかばってくれる人はいない。
今までは亜佐美や速水たちが守ってくれていたけど。」

「誰が次の実権を握るんだろう。」
「それは私たちと速水一族でしょうね。
お互いだいぶ前から協力関係にあるの。
それに、対抗するのは亜佐美の妹達くらいかしら。」

「亜佐美に妹？」

「腹違いが3人。どの娘もとんでもない性悪ね。もうすぐ会うことになるわ。」

「俺たちも、二人でどこかに行けたら良いのになあ。」

「それは難しいわね。組織はあなたを放さない。私も同じ。私は守らなければならない仲間もいるし。」

「そんなに俺が重要なのか。」

「あなたは多くの秘密を知っている証人。さらに私の恋人。」

レイナが俺の体をやさしく刺激し始めた。

俺は陶醉状態になって、つぶやいた。

「レイナ、このまま殺してくれ。」

「だめよ。まだまだ、何度もあなたがほしいの。」

気が遠くなっていく。至福の時が訪れる。

全身に快感の波が行き渡り、脳が揺れる。

無重力状態のあと、強烈なスイング感。

体がばらばらになるほどの痺れ。

「あなたは私の生きる目的。」

私の全て。体の隅々まで……。」

第三十三章 新たな敵

さわやかに目覚めた。若返ったようだ。
レイナのおかげで体中に力があふれている。

起き上がると、桜井がいすに座って俺を見ていた。

「どうだい、気分は。」

「すごくいいね。レイナに感謝の気持ちでいっぱいだ。」

「まさかお前の記憶がこんなに簡単に戻るとは。」

「彼女は俺の体を知り尽くして、自由にできるんだ。
若返らせたり、記憶を戻したり。」

「科学や医学を超えてしまった、ってことか。」

「そうだな。」

「知っていると思うが、組織が劇的に変化している。
敵対する団体は、ほぼ壊滅した。

しかし世間には多くの情報が流れてしまった。

われわれの犯罪にも等しい仕事の内容。

再先端の科学を利用した、危険な商売。

世界中の有名人を相手に得た巨万の富。」

「組織の権力構図や収入源も暴かれたのか？」

「いや、マスコミや警察ではそこまで調べることはできない。
やっかいなのは、外国の諜報機関だ。

彼らは結構近くまで食い込んできている。」

「俺の想像を超えている話だな。」

「まーそうだろうな。でももっと心配なのは内部の抗争だ。
お前にもそのことを説明する必要がある。」

俺は着替えて、桜井の横に座った。

「お前が生きていてよかった。」

大丈夫だろうとは思っていたが。」

「俺のあの家は、襲撃されることを想定して建てたんだ。逃げる事も反撃することもできる。」

今回は相手の人数が多かったから逃げることにしたが。」

「レイカも無事か？」

「もちろんだ。彼女を守るために全て考えてあるんだ。まったく問題ない。今隣の部屋でレイナと話をしている。いわば親子初対面だからな。」

あの二人が会って何を話し合うのか聞いてみたかった。そう思った時に、レイナが呼びかけてきた。

（亜佐美の妹、リサがやってきたわよ。気をつけて。）
次はレイカだ。

（リサは危険よ。手段は選ばない。
平気で殺す。妹も、恋人も、仲間も。）

再びレイナだ。

（もうすぐ、このエリアにやってくるわ。
表向きは姉、亜佐美の意志をついで組織の運営に、
携わるということだけど、本当の目的は違う。
私たちが、速水一族を皆殺しにして、
組織を完全に独り占めにしたいだけ。
とにかく、油断しないで。）

桜井が俺の顔を覗き込んだ。

「何て言ってる。」

俺は彼女たちの警告を伝えた。

「もうきたか。気を引き締めないと。」

今までかなりの数の人間が犠牲になっている。

リサは冷血な悪魔だからな。」

「その女は今まで、どこかに隠れていたのか。」

「亜佐美が妹3人を寄せ付けなかったんだ。」

父親は同じだが、全員母親は違うらしい。

とにかく肉親とは思えないんだろう。」

「情報によると、リサは妹二人を殺し、

組織に入り込むために、ここの幹部と関係を持った。

さらにそいつらを利用して美人花を手に入れた。

もつとも凶暴な美人花レイを。」

「リサとレイか。亜佐美は、そいつらに殺されたのか。」

「わからない。亜佐美には敵が多すぎるから。」

「だろうな。」

「さっきの内部抗争の話だが。」

「ああ。話の途中だったな。」

「今組織のトップはレイナ、俺とレイカ、そしておまえだ」

「俺？」

「そうだ。そして対抗する勢力が亜佐美の妹のリサと平沢、
お前を診察したあの医者だ。」

そしてリサには美人花のレイがついている。」

「めんどくさい話だな。かわりたくないな。」

「たしかにな。でも逃れるわけにもいかない。」

そして、負ければ殺される。」

「俺は何も要らない。ただ静かに好きなレイナと暮らしたい。」

おまえはどうだ。権力や富がほしいか？この組織がほしいのか？」

「いいや。俺もレイカさえいればあとは何もいらない。

ただ俺は速水一族を守らなければならない。

宿命であり、義務だ。」

「本当なら速水が果たすべき役割だった。

その速水は責任を投げ出して、真由美と……。」

「彼は投げ出したわけではない。

俺は彼から直接連絡を受けて、ここにやってきたんだ。

組織をまとめて、機能させるために。

あいつの苦しい胸のうちも十分理解した上で、代役を引き受けた。」

しばらく、お互いに沈黙するしかなかった。

「速水は亜佐美の死によって生きる目的を失った。

守る人がいなくなった。仕える主人がいなくなった。

だから、もうこの組織にいる意味もなくなった。」

「でもなぜ真由美と。」

「真由美も絶望していたんだよ。おまえを失った事に気づいた。

そして速水がそばにいた。」

「同情か？」

「たぶん愛し始めていたんだろう。また捨てられた女を。

記憶さえも失った哀れで美しい元妻を。」

真由美の悲しげな表情が目に見えた。

後悔と自己嫌悪が俺を包んだ。

「もし、あのまま真由美がお前にすがっていたら、
どうするつもりだった？」

「俺は決められない性格だから。」

でも、こうなるしかなかったと思う。」

その時、連絡が入った。

「今、リサ様が到着されました。」

そちらにお通ししてもよろしいでしょうか。」

「いや、会議室51で待つてもらおう。」

我々もすぐに行く。他に誰がいる？」

「お一人です。」

第三十四章 悪女リサ参上

例によつて、迷路のような廊下を通つていくと51という光が見えた。

俺と桜井が部屋に入ると、そこに座っていたのは、女優のような女。

「久しぶりね、速水・・じゃなくてえ、桜井さん。」

「たしかに随分ご無沙汰でしたね。」

それにしてもあなた雰囲気が変わりましたね。外でお会いしたら気づかなかったでしょう。」

「まー、それは私をけなしてらっしゃるの、それともほめてくださってるのかしら。」

「前より一段と磨きがかかったという意味で申し上げたのです。」

「相変わらずお上手ね。実際色々ありましたから、ここ一年でいやでも、変わりますわ。」

あまり聞いたことのない、いやな響きの会話。全然内容が頭に入つてこない。

昔のくだらないドラマや映画のせりふのようだ。

リサという女、確かに美しい女だが、うそくさい。

そういう所が女優のイメージとかぶるのかもしれない。

そういえばこの女どこかで見たことがある。

どこだろう、これだけ派手な女・・そうだ、

あの日レストランでキョウイチと一緒にいた女だ。

ということはテレパシーが使えるのか・・・、美人花なのか？でもたしか、亜佐美の腹違いの妹だとか・・。似ているだけか。

「こちらが、噂の色男かしら。」

はじめまして、亜佐美の妹でリサといいます。」

「ヒロキです。よろしく。」

「結構華奢なのね。」

想像していたのと随分違いますわ。

もつとマツチヨな方かと、勝手に想像していたので・・・」

「そうですか。」

としか答えられなかった。

リサは軽蔑の目を向けながら、軽くあざ笑った。

「亜佐美お姉様があんなに夢中になる男って、
どんな人なんだろうって。」

美人花とセックスしても死なない男って、
どんな体をしてるんだろうって。」

ぜひ一度お相手願いたいな、なんて。」

急に桜井が大きな声を出した。

「これ以上彼をからかうのなら、それなりに覚悟してもらいます。」

「あら、怖いこと。えらく彼をかばうのね。」

「彼はあなたが思っている以上に重要な存在なのです。」

あなたの単純な思考回路では、理解するのは無理でしょうが。」

「わたしがばかだっっていたいの。」

今度はリサが大きな声をはりあげた。

桜井が残酷な微笑みを浮かべていた。

こんな表情を見たのは初めてだった。

俺は早くこの場から離れたいと思った。

争いには向いていない性格、気が弱いだけではない。」

見苦しいし、不愉快なのだ。

リサが気を取り直したように、わざと低い声で話し始めた。
「あなたたちとは仲良くやっていきたいの。」

もう私には血を分けた人間もいないし、
周りには頼りない、ろくでなしばかり。
本当に力になってくれる人は誰もいない。」

「いやいや、何も知らないとも思っているのですか。
なかなかのメンバーをそろっているじゃないですか。」

「ちゃんと、リストアップされていますよ。」
「誰のことをいつているのか知りませんが、
私達を敵視するのはやめて頂戴。」

同じ組織で協力してやっていくんでしょう。」

リサが立ち上がって、帰る素振りを見せた。

「とにかく、今日はご挨拶だけで失礼します。」

今日からここに住みますので、荷物を整理しないと。」

「組織のことは我々にまかせて、どうぞ、ごゆっくり。」

「そうはいきませんわ。はっきり言っておきますけど、
オーナー一族の血を受け継いでいるのは私だけなんですから。
それを忘れないでくださいね。」

「よくわかってるつもりです。この数週間、不思議なほど、
一族の皆さんが連続でお亡くなりになられました。
そしてあなただけが生き残った。」

殺気が溢れた沈黙が訪れた。

「お互い、人の命を踏み台にして生きてきた・・・でしょ。つまり同じ種類の人間なのよ、私達。

ちがつかしら。あらっ、ごめんなさい、貴方は人間ではなかったわね。」

「一緒にしないでくれ。ただの犯罪者と一緒にされると不愉快だ。」
「誰が犯罪者だっていうの。えらそうな口をきかないで。」

私は正当な後継者、あなたは雇われの身分、
それどころか召使ロボットのリーダーにすぎないじゃない。」

桜井が立ち上がった。

何とか止めなければと、俺も立ち上がった。

その時、連絡のメッセージが流れた。

「ドクター高木とメイドのミュークがリサ様のお迎えにそちらに向かいました。」

まもなく、入室します。」

「早速、君の仲間が助けに来たようだな。」

「仲間だなんて、なんか悪意のある言い方ね。」

まだまだ二人の険悪な会話は終わらないようだ。

ミューク・・・聞いたことがある名前だ。

珍しい名前だから、覚えている。誰だったか、思い出せない。

ドアがノックされて、扉が開いた。

大男がそこにいた。以前俺を診察したあの医者だ。

「失礼します。」

ゆっくりと入ってきた。その後ろには清楚で美しい女が静かに・・・。

思い出した。メイサや真由美と一緒に働いていた、あのメイドのミューク。

俺のほうをじっと見て微笑んだ。

「お久しぶりです。覚えていらっしゃいますか。」

「もちろん。」

リサが余裕を取り戻して、話し始めた。

「ドクター高木には組織の仕事に関して、私のサポートをしていただくの。」

組織内の人間の殿方では、一番優秀じゃないかしら。」

高木がゆっくりと俺たちに頭を下げた。

まるでプロレスラーのような体だ。桜井と互角の巨体と筋肉だ。

「ミュークは私の身の回りの世話をしてもらうの。」

絶対に信頼しているお友達なの。」

何があったのか知らないが、色々裏があるに違いない。

「ほかに結構優秀なスタッフが揃っているのよ。」

残念ながら速水一族は一人もいらっしゃらないけど。」

「当たり前でしょう。我々は道德観念の強い集団ですから。」

恩義を大切にするし、必要であれば命を差し出してでも、奉仕するように育てられています。」

あなたたちとは、組織に対する心構えが違う。」

「そのようですわね。まるでマフィアみたい。」

「マフィアよりは危険かもしれませんが。」

緊張感が高まったが、桜井が背中を向けて扉に向かった。
「じゃ、お先に失礼する。」

俺もあわてて彼に続いた。リサが少しあわてて声をかけた。
「それでは又明日、お会いしましょう。」

桜井は答えなかった。俺は振り返って一応微笑んで軽く会釈した。
廊下に出てから桜井が俺に小さな声でつぶやいた。

「奴らは本気だ。そんなに遠くない時期に動き始めるぞ。
こちら本気でつぶしにかかる。今から作戦を練り直す。
お前も気をつけてくれ。」

「わかった。それで、どうしたらいい？」

「一緒に来てくれ。真由美のいない部屋に帰っても仕方ないだろう。」

「

第三十五章 リサの悪行

身の回りの物を取りに部屋によった。

真由美の匂いがのこっているような気がした。

桜井と二人で部屋に上がると、食卓に手紙が置いてあった。

簡単に短い文章。

「助けに来て。私を選んでくれるのなら。」

胸が熱くなった。こみ上げて来るものがある。
どこに行けばいいんだ。もう、早く行動を起こしたい。

横でそれを見ていた桜井が鼻で笑った。

「まさか、信じてるんじゃないだろうな。」

明らかに畏だ。お前が一人でこれを見ることを想定して。
仕掛けが早いな。すでに戦闘モードだ。」

「だれが、そんな？」

「明らかにリサ達だ。わからないか？」

「でも、もしかしたら本当に真由美が、」

しばらく考えていた桜井が口を開いた。

「とにかく、荷物をまとめろ。」

といいながら、桜井は警戒しろという合図を出した。
仕方なしに、荷物をバッグに詰めて部屋を出た。

「もう少しで連中の罠にかかるところだった。」

奴等が知りたいのは速水Fと真由美の動向なんだ。

お前の動揺ぶりについて俺も連絡を取りそうになったよ。」

「連絡を取れるのか？」

「もちろんだよ。でも今連絡すれば場所を特定されるだろう。それは危険だ。」

「そうか。」

心のどこかで真由美への未練が湧き上がっている。

桜井の司令室に入ると、すぐに軍服を着た男3人が近寄ってきた。桜井に報告をはじめた。

「お前は奥の部屋でゆっくり、くつろいでくれ。俺も5分ほどですぐに行く。」

言われたまま奥の部屋に入った。

レイナがメッセージを送ってきた。

（早く会いたいわ。）

（俺もだ。）

（あなたのそばにいないと、心配なの。

これから一緒に行動しましょう。

私ならあなたを守る。必ず。）

（ありがとう。）

（本当はそれだけじゃないの。）

（他にも何か？）

（あなたの気持ちが揺れているのが不安なの。）

（真由美か。）

（そう。）

桜井が入ってきた。

「レイナとお話か？」

「そうだ。少し休んだら会いに行きたいけど。」

「そうしよう。俺もレイカの所に戻る。」

今後のことを少し話し合った後、奥の抜け道から地下に抜けて、さらに通路を進んで鉄のドアの前に来た。

キーを使って不思議な角度にまわすと、エレベーターが現れた。

「さあ、レイナたちの所へ戻ろう。」

エレベーターのドアが開くと、そこに二人はいた。

まぶしいほどの美貌、にじみ出る優雅な色気と気品。

二人の女神が、神話から飛び出して、現実の世界へ……。

「何か気がつかない？」

レイカが桜井に抱きついた。

「信じられない。歩けるようになっただね。」

「レイナが私に触れた瞬間、もう自由に動けるようになっていたの。」

「よかった。本当によかった。これで一緒にあちこちいけるわね。」

レイナは微笑んで見守っている。

俺達はそれぞれの部屋に戻った。

「隠れ家で過ごすのも、今日で終わりね。」

今まで私やレイカが存在していることも秘密にしてきたけど、もうその必要もないわ。」

「でもその分、危険に身をさらすことになる。」

「私やレイカは大丈夫よ。あなた達のほうが心配。」

特にあなたは、戦いに慣れていないから。」

「できることなら、争いは避けたいからね。」

俺はそういう性格なんだ。」

「わかってるわ。でも今回は避けられない。」

だから私達の出番なのよ。私も人間を傷つけるのが好きではないけ

ど。」

「今まで封印してきた私の力を解放したのよ。今回は気兼ねするところもない。」

「前は気兼ねしたって事？」

「そうよ。私も自分の力をコントロールできなかったし、誰が敵で誰を守るのか、

はつきりしなかったわ。速水も傷つけたし、無駄に多くの命を奪ってしまった。

途中から自分の凶悪さに驚いて、ブレーキをかけたの。」

レイカが付け加えた。

「誰もレイナのようににはなれない。私もレイも足元にも及ばないの。」

桜井たちと別れて、部屋の裏に出た。

レイナに手を引かれて、無言で廊下を突き当りまで歩いた。立ち止まると壁が透明になって、ドアが現れた。

そこはレイナが俺達のために用意した部屋だった。

「真由美は元気よ。私には全部わかる。

結構楽しんでる。速水もうれしそう。

彼女、あなたへの思いは断ち切ったようね。

女は切り替えが早い。本当よ。」

「だろうな。その点男はだめだな。」

「私だけじゃ不満なの？」

「そうじゃないんだ。君がいつでも一番だ、絶対に。」

俺達の儀式が始まった。俺の脳が揺れる。体が細胞レベルでばらばらになる感じ。

切なく湧き上がってくるような快感。

正氣に戻る時、いつも思うことは同じ。

「さつき死んだら幸せだったのに。」

「だめよ、ずっとあなたを離さない。」

裸のレイナが眩しい。完璧な美がここにある。

「佳苗博士に会いたくない？」

「今どこにいるんだい。」

「外の世界で自由気ままに暮らしている。」

でもそろそろ戻ってもらわないとね。きっと彼女の力が必要になる。

「

「会うのが、なんか恥ずかしいな。」

「でしょうね。でも大事な人よ。」

「レイを相手に戦うということは、こちらも相当数の死者が出る。

花達も速水一族も。でも佳苗博士がいれば、防げることもある。

私やレイ力だつて危険な場合も出てくるかも。」

「レイは、そんなにすごい力を持っているのかい？」

「まず、レイが他の美人花とまったく違うところは冷酷で残酷なところ。」

彼女には情のかけらもないわ。何のためらいもなく片っ端から殺すのよ。

すでに世界の政界、財界の著名人を何人も葬っているし。

日本の芸能人やプロスポーツ選手も手にかけている。

こうしている今の瞬間にも殺し続けている。

レイにとっては殺すことが喜びなのね。

そんな花は彼女だけ。そしてさまざまな能力も高い。

私の種から生まれた花達の中では一番強いかもしれない。」

「君と戦うことは？」

「あるかもしれない。」

「君が心配だ。」

「大丈夫よ。でも自分の子供と戦いたくはないわ。
たぶんレイは、そんなことお構いなしでしょうけど。」

あなたや桜井、速水もレイのターゲットになる可能性があるから。

「

「俺達にはもう媚薬は効かないだろうし、毒にも免疫があるだろう。
大丈夫じゃないのかい。」

「安心はできないわ。彼女にコントロールされている男が何百人も
いる。」

プロの格闘家、諜報機関の工作員、危険地帯を渡り歩いていた傭兵。
そんな男達が彼女の命令であなただちを狙いにくるかもしれない。
そうなれば、桜井や速水のような戦いのプロでも勝てるとは言い切
れない。」

第三十六章 作戦会議

朝早く目覚めたのに、レイナは横にいなかった。起き上がって探したがもう部屋にはいなかった。きよろきよろしていると、メッセージが脳に届いた。

（もうすぐ、佳苗博士が来るから着替えておいてね。）

（こんなに早く？）

（早ければ早いほうがいいのよ。30分したら部屋に一緒に行くから。）

急いで身支度をして朝食をとった。

一瞬、真由美がいてくれたらいいのと思った自分にあきれた。

丁度30分後にレイナと佳苗博士が現れた。

「久しぶりね。元気そうで安心したわ。」

「博士も変わりませんね、いやむしろ若返ったみたいだ。」

「レイナのおかげで老化を逆行させる成分を発見できそうなの。」

ほかに色々レイナのおかげで私はお金と名声を手に入れたってわけ。」

「すごいですね。今は組織とは？」

「一応所属しているけど、主に外の世界で活動してるの。」

だから内部の権力争いとは無縁でいられたんだけど。」

「あなたと真由美、そしてメイサ記憶を消したのは私よ。」

ごめんなさいね。後でレイナが激怒して説明するのが大変だった。でも間違いではなかったと思ってるの。」

「なぜですか。おかげで僕達は随分遠回りして苦しんだのに。」

「でも生きているでしょ。メイサは気の毒なことをしたけど。」

「メイサに何かあったんですか？」

「知らなかったの。イタリアで事故にあって亡くなったらしいわよ。」

「記憶は失ったままで。」

「そうね。真由美も記憶は戻らない。」

今の医学では記憶を消すことはできるけど、戻すことはできない。作ることではできるんだけどね。」

「でも俺は。」

「レイナの力は全て科学の常識を超えているから。」

それから話は続いた。

亜佐美の父は脳だけになって10年以上生きていた。

脳からの信号で機械が動き、言葉を発し組織を動かしていた。

脳は亜佐美や佳苗博士、そして速水一族によって守られていた。

しかし一瞬の隙を突いて、ドクター高木が生命維持装置の電源が切られた。

それはもちろんリサの命令だった。

結果として権力争いはリサが勝ち、亜佐美は殺害され、

佳苗博士も外に出るしかなかった。

亜佐美とリサの争いによって、組織内の人間が600人以上死んだ。

でも、リサが全面的に勝利したわけではない。

速水一族が実権を握っていることに変わりはないし、何といっても、レイナの実在は絶対的なのだ。

リサの強みは高木博士を抱き込んだこと。

医者、科学者達の大部分は彼のいいなりだから。

そしてミューク。彼女は亜佐美にひどい目にあつたことで、組織の下層階級と一体感を深め、それをまとめることに成功した。労働組合的なグループをこの組織で作った。

さらにレイ。美人花の中で過激派はレイナではなく、レイを崇拜している。その数は全体の3割にもなるだろう。

そして、再び権力争いが始まり、速水Fが失踪した。

その時、桜井から連絡が入った。
呼び出した。俺と佳苗博士は司令室に向かった。

桜井の部下達が、俺達とい入れ替わりで出て行った。
「たいした話ではないんだが、ジャーナリストの宮田という男が嗅ぎまわっている。テレビなどで顔の売れている奴だ。下手に手が出せない。大騒ぎになるからな。」

「テレビで観たことがあるよ。興奮しやすいタイプの男だろ。」
「まー、それは演技半分だろうけど。」
とにかく、このエリアを調べて何かをつかんだったらいい。
そして君とリサにインタビューを申し込んできた。」

「ややこしい話だな。」

「断つたんだが、リサは勝手に承諾した。」

そして、さっきテレビ局から連絡があつた。来週よろしくって。」

「来週？ここを撮影するのか？」

「いやそれは企業秘密を理由に断つた。」

「じゃインタビューだけか。」

「俺の部下を代役に立てるから安心してくれ。」

「応了解を取っておかないとな。」

「リサの仕掛けた罠？」

「かもな。リサは組織を守りつつ、俺達の立場を悪くすることを考えているはずだ。何か秘密をしゃべる可能性もある。」

「例えば？」

「亜佐美の過去、速水一族の正体、戸籍偽造。」

これらの案件に関してはリサ達は無傷で済む。」

「なるほど。そして世間は驚く。」

「打てる手は打った。後は成り行きを見守るしかない。」

それより深刻な、もうひとつ問題がある。

昨夜、美人花の種が大量に盗まれた。

犯人は間違いなく内部のものだ。種はおよそ3000粒。」

「それが全部育てば大変な事になる。」

「すでに外部に持ち出されたかもしれない。」

最後に倉庫のキーのロックが確認されたのが12時。

それ以後、外部に出た人間は167人。」

「調査可能な数字だ。」

「もう調べた。全員白だった。」

しかし本人が気がつかない状態で運ぶケースも考えられる。」

「これもしサの・・・」

「たぶん。敵対する組織はこれほど実行力はない。」

どう考えても奴等の仕業だ。」

今まで黙って聞いていた佳苗博士が口を開いた。

「種が意識を持ち始めたら、レイナには居場所がわかるわ。もう種たちが冷凍状態から開放されて、目覚め始めるはず。」

桜井があわて気味に質問を投げかけた。

「種は全て強力な美人花になるのですか？それとも・・・」

「約2割は人の外見を真似できずに、不気味なものになるわ。さらに歩けない花が全体の半分以上。」

媚薬、麻薬、毒の能力を持っている花の割合も同じようなもの。テレパシー能力、高度な知性、感性、となると1%もないかも。」

「つまり脅威となるような美人花は、ざっと数えて？」

「6、700人つてところかしら。」

「いっても、レイナのように全て高い能力を持ち、

さらに若返りや治癒の力も保有している花はいないでしょう。

レイやレイカのような高いレベルの美人花が一人くらいは、生まれるかもしれないけど。高木のもとで上手く育つとは思えない。」

「しかし一般の男にとって、その700人の美人花は・・・」

「そうね。かなりの数の犠牲者が出るでしょうね。」

「やがて世間は気づき始め、騒ぎ出す。」

「そうなる前に何とかしないと。」

「すでに精鋭のチームは組んであります。」

速水一族から腕利き20人、美人花から8人、人間の男女20人。

いずれも有能で信用でき、あらゆるケースに対応できます。

仮に8グループに分かれて活動する予定ですが、

必要であれば合流して活動するようになっていきます。」

「さすがに用意は万全ね。」

「レイナとレイカに相談して、最初の作戦をスタートさせましょう。もう今日にでも。」

「今すぐにもね。」

第三十七章 切り札の誘拐

あれから一週間がたった。

桜井は忙しそうに外を走り回っている。

レイナとレイカは佳苗博士と一緒に研究室にこもりつきり。

たしか、今日はあのジャーナリストと約束をした日。

何が起こるんだろうか、物騒な事件になれば良いが・・・。

俺はこれといって、することも無い日が続いている。

でも一人で勝手に行動することは禁じられている。

ボデイガード付ならば、街に出ることもできるが。

食事、洗濯などを世話してくれているタニヤが入ってきた。

だいぶ慣れてはきたが、やはり気を遣う。

彼女は桜井の部下で、20年以上の付き合いらしい。

もくもくと仕事をこなして、昼過ぎには帰っていく。

「では、又明日。」

といいながら目配せをした。

テーブルの上にアップルパイが用意されている。

「ありがとう。後で食べるよ。」

「なるべく早く食べてください。」

といいながら、俺をにらみつけた。

言いよつの無い恐怖感で、身がすくんだ。

何か気を悪くしたらしい。

さっさと、部屋を出て行った。

いつもより、愛想が悪いのはなぜなんだろう。
パイを見てすぐに異常に気がついた。

パイの上にハート型の飾りがある。
そのハートにはマユミと書かれている。

持ち上げるとハートが二つに割れて何かが出てきた。
メモリーの小さなチップ。
何かが記録されている、ということだろう。

早速手持ちのプレイヤーで、再生してみた。
そこには真由美が映っていた。
残酷な仕打ちで、顔が変形していく。
ほとんど裸に近い状態で、リンチを受けている。
正視することができない。体が怒りで震えた。

カメラが真由美に近づいた。
鼻や口から血を流しながら、つぶやいた。
「あなた、お願い。もう一度・・・」

映像が切り替わって、見知らぬ男が登場した。
「桜井やレイナたちに気づかれないように、
外の世界に出ろ。真由美を返してやる。
タニヤに連絡して、指示を待て。」

もう我慢できない。畏かもしれない。
そうに決まっているが、俺は行く。
さっきの真由美の悲しげな声と血まみれの顔が、
脳裏から離れない。

すぐにタニヤに連絡した。

近くで待機していたのだろう。
すぐに現れた。

「どうかしましたか。」

といいながら、袋を取り出した。

そしておれにそこに入るように目で合図をした。

「パイの代わりのケーキをお持ちしますので、
しばらくお待ちください。」

では洗濯物をおあずかりします。」

よくコーヒー豆が入っているような大きな袋。
タニヤは俺にしゃべるなというポーズをした。

俺は黙って袋に入った。

手早く紐をかけられてられた、台に乗せたようだ。

まもなく体が落下していくのがわかった。

タニヤの呻くような、変な声が遠くで聞こえた。

フワツと着地した。その後、持ち上げられた。

と思った途端、男達の叫び声がして、

俺は地面にたたきつけられた。

「早くしろ。その二人はほっとけ。」

「タニヤは？」

「もう死んだ。急がないと俺達も……。」

「チーフ？」

どさっと倒れたような音がした。

「だめだ、早く。誰か一人でも生き残って、

こいつを連れ出すんだ。」

誰かが俺の脚をつかんだが、すぐに離れた。
そして又倒れる音。

その後まったく静かになった。

俺はもがいたが、袋から出ることはできない。

そして再び袋が持ち上げられた。

「急げ、完全防備していても危険だ。」

俺はどうやら車に乗せられたらしい。

男達の話し声が遠くで聞こえる。

「どこまで行けば、毒から逃れることができるんだ。」

「もう大丈夫だろう。マスクをはずそう。」

「それにしてもすさまじい毒だな。あつという間に9人もやられた。」

「

「とんでもない相手を敵に回したって事だ。」

「それに、もう桜井達にも連絡は入っただろう。」

あいつらも本気でくるぞ。」

「いよいよだ、な」

「俺はレイのためなら、何も惜しくはないさ。」

レイのために死ねるなら幸せだ。」

「それはみんな同じだろう。」

どうやら、美人花の媚薬にやられているらしい。

約20分後、車が止まった。

どうやら目的地に到着したようだ。

俺は袋から出ることを許された。

細身で、はげた男が出迎えてくれた。

「ようこそ、わが秘密アジトへいらつしゃいました。

私はここの責任者ドクター伊藤です。」

「真由美は無事か、速水はどうした？」

「いきなりで失礼ですが、あなた賢い人ではないようだ。
あれは合成した架空の映像だよ。ばか。」

やはり畏だった。くだらない嘘にはめられた。

なんて浅はかなんだろう。

おなじみの自己嫌悪に襲われた。

「何のために？」

「お前がどうしても必要だった。

レイナを殺すために。それだけだよ。

心配しなくてもお前は殺しはしない。

今頃レイナは慌てているだろう。」

そういえば、レイナとのテレパシー交信が途絶えている。

さつきから呼びかけても何も返事が無い。

もう一度レイナに呼びかけてみた。

「残念でした。無駄よ。

私がお前達のテレパシーを妨害しているの。
レイナがいないと心細い？」

リサがあらわれた。いつもにも増して派手な服。

露出度も半端ではない。

それに、今日はテレビ番組の収録だったと思っただが。

「お前か。うんざりだよ。」

「あら初対面なのに、失礼ね。」

「初対面？」

「そうよ。テレパシーでお話しは、したけど。

あなたが記憶喪失の時に。」

頭が混乱してわけがわからない。

「私はレイ。レイナの娘。その中でも一番優秀な花。

リサがそっくりなのは、彼女が私にあこがれているから。
手術までして。」

あのキョウイチと一緒にいた女。

あれはリサではない。レイだったんだ。

あの時、俺にテレパシーで話しかけた女も。

たしかに同じ顔だが、妖艶な魅力がレイにはある。

「人間の男って本当にかわいい。えらそうにしているても、
中身はみんな同じ。思考が単純で壊れやすい。

すぐに私の言いなりになって、思いのままに操れる。

殺されるってわかってても、まだ愛してるとか、幸せだった、とか。
何なのかしら、笑っちゃうわね。」

この美人花にはレイナとレイカのような神々しさがない。
むしろ魔女や悪魔を連想させる雰囲気強い。

「さー、さっそく本題に。ふふ。」

といいながら俺に身を摺り寄せてきた。
いい匂いがする。むらむらする様な。

俺はレイに包まれながら倒された。

ドクター伊藤がにやにやしなから部屋を出て行くのが見えた。

「俺をどうするつもりだ？」

「たっぷり、味わってから、ずたずたにしてあげる。」

殺しはしない。大事な切り札だから。」

「切り札？どういう意味だ。」

レイの細い繊維が体に入り始めている。

レイナやレイカの時と違って、悪寒と恐怖が・・・。
死を予想させる強烈な快感が訪れるに違いない。

その時レイの動きがぴたりと止まった。

まるで映像が停止したかのように。

目は見開いたまま、何かをあざ笑うかのように微笑んでいる。
死んだのか？俺はゆっくり起き上がって、レイを持ち上げた。

人間の女よりもはるかに軽い。そして柔らかい。

床に寝せた。まるでお人形だ。

こうして、おとなしくしていれば、たしかに美しい女だ。

どうも、皮膚に違和感があった。

よく見てみると、細い繊維が腕に付いている。

首や胸もちくちくする。

手で払ってみたが、簡単には取れないようだ。

その時だった。

（今がチャンスよ、静かにその部屋を出て。）

レイナだ。どうやら助かりそうだ。

（ドアを開けたら左に行つて。私達のスパイがいるから。

彼女も花だから、テレパシーで話して。声は出さないで。」

ドアを開けると誰もいなかった。左に行くとその女がいた。

（こちらへどうぞ。）

（ありがとう。）

早足で歩いていると、向こうから女が二人やってきた。

「あら、どこに行くの。レイ様は？」

「レイ様の命令でこの男をお風呂に連れて行くの。」

「なるほど、きれいにしてから、ってわけね。」

レイ様らしいわ。」

次の瞬間、二人の女は崩れ落ちるように倒れた。

さっきのレイと違って、明らかに気を失っている。

もしかしたら、死んでいるのかもしれない。

（凄腕なんだね。殺したの？）

（そうよ、本当は仲間を傷つけないけど。

もうそんなこと、言ってる場合ではないから。）

（急ぎましょう、奴等とこれ以上戦いたくない。）

後ろから男の声が聞こえた。

「止まれ、その二人。」

（走るわよ。）

追われる恐怖と緊張で息が苦しい。

女は自由自在に迷路を駆け抜ける。

俺は必死でついていくが、どうしても遅れ気味だ。

「止まらなと撃つぞ、すぐに止まれ。」
男は銃を持っているらしい。

（先にここをまっすぐ行って、あのドアを出て待っていて。
俺はドアめがけて全力で走った。）

第三十八章　ねじれた仲間割れ

ドアを開こうとした時、後ろを振り返った。

そこには見覚えのある男が苦しみの表情でもがいていた。たしか有名な格闘家かなにか、だったと思うが。

さっきの女が男から離れてこちらに走ってくる。

何をしたのか知らないが、もう男は目を閉じて動かない。

（ドアを出て、右に走って。）

ついに外に出た。

走り始めると、すぐに女が追いついた。

すごいスピードだ。

（もう少しよ。がんばって。）

人影が見えた。

（味方のお迎えよ。）

そこにはおもちゃみたいな車と二人の男がいた。

男達が車に乗り込んだ。

俺達もすばやく後ろの座席に乗り込んだ。

無言で発車する。

道路の脇には10人以上の男達が倒れている。

しばらくして、やっと車がスピードを落とした。

「もう大丈夫だ、作戦成功だ。」

「さすがだな、いつも感心するよ。」

「運動能力と美人花の能力を総合的に考えれば、

君が最強だろうね。」

男達が女を賞賛する。

当然だろう、まるで映画を観ているようだった。女が話し始めた。

「でも、これで私はレイの復讐のターゲットになった。レイはもう普通に動ける体にはならないし、種を作って、生まれ変わることもできない。でも、どんなことをしてでも私を殺そうとする。そういう女よ。」

「息の根を止めてしまえばよかったのに。」

「そうね、この次はそうするかもしれない。今日は余裕がなかったから。」

女が思い出したように、俺のほうを見た。そして、席を移動して近づいてきた。

改めて、よくみるとかなりの美人であることに気づいた。

「そろそろ、体がうずいて痺れてくるわよ。れいはあんたを殺したかったのかしら。よくわからないけど。」

とにかく今から治療をはじめろわ。

あなたの体からレイの撒いた毒を抜くのよ。」

確かにさっきから頭がじんじん痺れている。

（心配しないで。その美人花は私の分身みたいなものよ。まかせておけば、助かるから。）

レイナだ。気が楽になると同時に、体の奥から得体の知れない痛みがうずき始めた。

俺が体をよじらせたのをみて、女が俺に馬乗りになった。
「急がなくなっちゃ。そうそう、名前も言ってなかったね。
カーリーよ。自己紹介ぐらいしとかないとね。」

俺は何か言おうとしたが、舌がもつれて言葉にならない。
「いいのよ、あなたが気を失っている間に、ちゃんと。」
カーリーがキスしている。体に心地よい感触がひろがって、
夢のようにふわふわとしながら、意識が遠のいていった。

目覚めると、もうカーリー達はいなかった。
どこかわからないが、ホテルの部屋のようにだ。

（目覚めたようね。もう大丈夫よ。
本当は結構危なかったのよ。心配させないで。）

（反省しているよ。慎重に行動しないと。）

（あなたを救出した美人花は、私達の切り札だったの。
だから最後の最後まで隠しておきたかったんだけど。）

（カーリーのこと？）

（そう。名前を名乗るなんて、カーリーらしくないわね。
もしかしてあなたに興味を持ったのかも。）

（まさか。）

（それと、あなたを殺そうとした、レイが亡くなったわ。
息の根を止めたのは、カーリーではない。

いずれ誰の仕業かはつきりするでしょうけど。

本当に優秀な美人花だったけど、

すべてが負の方向に行ってしまう性格が災いしたのね。

残念だけで、仕方ないわ。）

（美人花も命を落とすんだね。不死身なのかと思っていた。）

（もともと人工的に作られたものは、壊れやすいものよ。
速水一族だって同じよ）

（そうか。……君が心配だ。）

（自分のことをもつと心配して。

もう間もなく例の番組が始まるから、
興味ないと思うけど、みていて頂戴ね。

あなたの影武者が出演するわよ。

もともと、リサが仕掛けた番組だったけど、
逆に自分の首を絞めることになるわ。

おもしろい番組になることは間違いないわよ。
じゃ、迎えの連中が到着するまで、少し待っていてね。）

妙に張り切っているレイナに少し違和感を感じた。

戦いを楽しんでいるかのようなうだ。
生き生きしている。

俺はむしろ、どんどんブルーになる。

俺の周りで次々と死人が出るなんて、夢にも思わなかった。
レイナと二人つきりで、平和に暮らせたらどんなに楽しいだろうか。
今となってはかなわぬ夢だが。

モニターのスイッチを入れた。

リサが映っている。レイと全く同じ顔。
問題のテレビ番組だ。

司会者はあの社会派ジャーナリスト、宮田。
リサの横には俺にそっくりの替え玉。
他は知らない顔だ。

宮田が勢い込んで話し始める。

この組織がいかに強大な力を持っているか、世界中から巨額の富を集めているか。

何を製造、販売しているのか実態がつかめない。

代表者や幹部の名前さえ、はつきりしない。などなど。

「私なりにいろいろ探った結果、ある確信を持ちました。

それは、この組織の持つ非常に高度なテクノロジーから、

我々の想像を超えたものが次々と生み出され、

それが莫大な富を築いている。

そして、そこに関係者が何人も死んだり、行方不明になっている」

カメラがリサと俺の偽者をアップで映している。

リサが余裕の微笑みを浮かべている。

宮田が続けた。

「ここにいるリサさんは創業者の次女で、現在の組織の実力者です。どうですか、今の私の話について。ご意見は。」

「そうですね。率直にいえって、われわれの組織を過大評価なさっていると思います。

確かに最新の研究と、世界一優秀なスタッフ、豊富な費用。しかし、内容自体はそれほど先進的なものではありません。」

「例えばどんな物でしょうか。」

「いくつか例を挙げますと、」

スタッフが数人、各々商品らしき物を持って登場した。

「香りに関する商品は、世界で高評価をいただいております。昔でいう媚薬的な効果のある香り、脳をリラックスさせる香り。深い眠りを得られる香り、若さを保つ香り。どれも大人気です。さらに、サプリのように錠剤でも摂取していただけます。」

「もう結構です。私達が知りたいのは、そんな事ではないのです。ずばり、何故隠すのですか、犯罪だからですか。」

「実際、私の知らないことも、たくさんあります。」

姉の亜佐美が長年リーダーシップを取っておりましたので・・・。」

「たしか、亜佐美さんは長年この組織の実権を握っておられた。そしてトラブルが原因で殺害されたんではないかと。」

「どうやら、この番組はある筋書きにそって、進んでいるらしい。すべて亜佐美のせいにするつもりなのか。」

それから10分間ほど、亜佐美の海外での仕事ぶりが紹介され、国賓レベルの要人との人脈、謎のお金の流れが語られた。

そして話は亜佐美の私生活に及び、俺の影武者にマイクが向けられた。

第三十九章 追求の後の惨劇

「普段の亜佐美さんをよく知っておられるのが、藤田一樹さんですよね。」

「学生時代からの付き合いです。」

「深い付き合いですよ。恋人時代もあったとか。」

「たしかに、そんな時期がありました。」

「でも結婚はそれぞれ別の相手とした。」

「そうです。みんな大学時代の友達です。」

「でもどの名簿にも、あなた達は載っていないんです。どうしてですか？」

「さー。卒業してからは何も関わっていませんから。」

「亜佐美さんの経歴ははっきりしています。」

「皆さんは、同じ大学ではないですよ。」

「違います。」

「ではどういうお知り合いですか。」

「サークル的な集団で遊んでいた仲間です。」

「亜佐美さんのご主人速水さんはご存知ですよ。」

「よく知っています。」

「現在どこにおられるんですか？」

「わかりません。」

「彼の経歴もなぞだらけです。戸籍にも不思議な点がたくさんあります。」

「この件に関しては非常に危険な事態が起こる可能性がある」と、ある筋から警告を受けていますので、今回は触れるのをやめます。」

「奥様の沙耶さんとは？」

「別居中です。」

「連絡は？」

「取れないです。」

「離婚に向けて、ということですか？」

「かもしれません。」

「沙耶さんの経歴も謎です。こんなに何も記録のない人がいるのだろうか、と思います。」

あなたは沙耶さんの親族や、幼馴染について聞いたことがありますか？」

「いいえ。そんなことに興味はありませんから。」

「奥様なのですか。」

「過去は振り返らない主義なので。」

「実はあなた自身も謎だらけです。」

亜佐美さんとの接点、学生時代、親兄弟、友人、どれも不自然です。

まるで帳尻あわせて作り上げたようだ。」

「そう思うのは勝手ですが、変に勘ぐられるのは迷惑です。」

「実は亜佐美さんのデータを調べ上げて、ある男性に行き当たりました。」

名前はヒロキ。二人は恋人で、何年もデートを重ねています。ホテルやレストランの記録や映像を手に入れました。

でも不思議なことに亜佐美さんはアキと名乗っている。

アキは亜佐美さんが意図的に使っていた偽名とわかりました。

そして映像を見るとわかりますが、ヒロキはあなたに瓜二つです。あなたの本名はヒロキ、違いますか？」

「私は藤田一樹。ヒロキという方とは別人です。」

同じ組織にいて、外見が似ているので間違えられることが多いのですが、

まったくの他人なのです。」

「では今、ヒロキさんは？」

「組織にいます。」

ここにいますよ。

独り言をつぶやいた。

まるで現場で、俺が問いつめられているように感じる。

「奥様の血縁でシャコーラというお嬢さんが、
ついこの前まで、同居されていましたね。」

「はい、沙耶の従兄弟です。どこの国かははっきりしませんが、
仕事のために日本を離れました。」

「私達もそれを調べました。そして見つけました。」

たしかに出国していますが、どこにも入国していません。
そして行方不明のままです。知っていましたか。」

「いいえ。初めて聞きました。」

「シャコーラさんの経歴も調べてみましたが、見つかりませんでした。」

さすがにシャコーラが本名メイサで、亜佐美のメイドだったこと、
そして死亡していることは、彼らにもわからなかったようだ。

「亜佐美さんやあなたの周りでは、多くの人が失踪していますよね。
なぜなのでしょう。」

「さー、偶然ですかね。」

「そうとは思えませんが。」

「あなたはシャコーラさんとも男女の間柄だったはずです。

さらに死んだ亜佐美さんとも何年にも渡って、不倫を続けていた。」

「何の話ですか。」

「随分華やかな女性遍歴ですね。美人ばかりで。」

それからもずっと、俺が怪しいという推測が続いた。

俺の代役は汗をかきながら必死で答弁を繰り返した。

誰が聞いても言い訳に聞こえた。

俺は無類の女好きで、不倫を重ねた挙句、都合の悪い人間を次々と殺し、

組織の幹部にのし上がった冷血人間、に仕立て上げられた。

「まー、我々もたった一回の番組で収まるとは考えていません。」

御覧の皆様には、何かが伝わったとは思いますが、

まだまだ公にはなっていない衝撃の事実があるのです。」

いかにも、といったフレーズが並んでいる。

「ではまた次回、その衝撃の事実を徐々に明るみにさせていきましよう。」

予告が始まった。

「それは、彼らの世紀の発明ともいえる、新たな生き物の創造。クローン人間やサイボーグなどよりも、はるかに進化した生物。そして、我々はいかにその映像を入手した。」

それから、次回の予告編が続いた。

この宮田というジャーナリストが一人で調べた内容ではない。

かなりの力を持った組織が本気で乗り出している。

いずれ美人花や速水一族、真由美などの正体も明らかになる。
世間は大騒ぎだろう。

今まで美人花や組織が関わった国際的な殺人や陰謀、
さまざまな違法行為が明るみになれば、
もう組織の存続は無理だろう。

俺は立ち上がって、洗面室に顔を洗いに行った。
しばらくして、部屋の方から不審な物音が聞こえた。

行ってみると大男が倒れていた。
目を見開いて、口から泡を吹いている。
ドクター高木だ。死んでいる、らしい。
手には銃を握っている。俺を殺そうとしたのだろうか。

そこにレイナがいた。俺を見つめている。
「私を嫌いにならないで。」
「どうしてそう思うんだい。」
「あなたは無意識に、私に対する嫌悪感を抱き始めている。」

凶星だ。自分自身でさえ気がつかなかった。
殺したり、傷つけたり、にうんざりしている。

「この男は、昨日、佳苗博士の実験室に侵入して、
彼女を殺した。そして美人花の資料も盗もうとしたの。」

「で、佳苗博士は？」
「即死よ。鈍器で撲殺された。容赦のない殺し方。」

私は初めて、体の隅から隅まで怒りに満ち溢れるのを感じた。そして、連中を全滅させることを決心したの。私自身の力で。」

レイナが、言葉をかみ締める様に目を閉じた。何故か、より険しい表情になった。俺も黙るしかなかった。

佳苗博士との色々な事が頭に浮かんだ。意外なほど、深い悲しみを感じた。アブノーマルではあったが肉体関係もあった。いろいろな意味で、恩人であることも間違いない。

レイナが顔を上げて、ため息をついた。レイナのそんな姿を見たのは初めてののような気がする。

「とんでもないことが起こったわよ。こんなに派手にやられるなんて。リサも全く予想できなかったでしょうね。」

「どういう意味？」

「たった今、あの放送局が爆破されて、かなりの数の死者が出たわ。」

「えっ、生中継でさっきまで・・・」

「大型車を使った自爆って、まるで昔のテロ組織みたいね。」

「リサたちも、巻き込まれたのか？」

第四十章 破壊

もし本当にそれが起こったのなら、前代未聞の爆破事件。マスメディアがこんな形で攻撃されたのはこの国では初めてだろう。

もちろんリサの事を心配しているわけではない。どちらかといえば、死んでほしいくらいだ。

「リサの側近と美人花、あわせて5名、全て死亡。リサは、・・・失神しているだけ。

我々側もあなたの影武者や速水一族、あわせて3人が死亡。放送局の人間と出演者、他の番組関係者やタレント、一般人、あわせて126人が死亡。けが人53人。」

レイナはまるで本を棒読みするように、無感情だった。全てがわかってしまうのだろうか。俺は正直ぞつとした。何に寒気を感じたのか、自分ではわからなかった。

その時、モニターにニュース速報が字幕で流れた。放送局に爆発物が仕掛けられ多数の死傷者。有名な社会派のジャーナリスト宮田氏も死亡。

「いったい誰が？」

「外国の組織かしら。まあ、すぐにわかるでしょ。とにかくここを離れましょう。」

レイナがすばやい身のこなしで、俺を誘導する。そのしなやかな動きは真由美やカーリーに匹敵する。

「後始末は部下に任せるから、本部に帰りましょう。今後の対応をすぐにも検討しないと。」

たしかに、頼れる人間が殆どいなくなり、心細い状態ではある。

ホテルの裏に大きな車が待っていた。

「ご無事で。」

運転手は雰囲気で桜井一族の男だとわかった。

レイナは運転手と話し始めた。

「リサの取り巻きで生き残ったのはミュークだけね。」

「そういうことになります。」

「あなたの兄弟も随分たくさん亡くなられたわ。」

「わかっています。」

「外部の組織がこれほどの攻撃を仕掛けてくるとは、予想外ね。かなり急いでいるみたいだし、雑なやり方だね。」

「かつてなかったことです。」

組織本部に戻ると桜井が出迎えてくれた。

「無事でよかったな。もうだめかと思ったよ。」

「助けがなければ、間違いなくやられていたよ。」

桜井はいつもと違うルートを通って、初めての部屋に着いた。

「実はこの地下も荒れてきた。時間の問題で、無法地帯になってしまっ。」

すでに脱出した者も結構いるんだ。立て直すのは難しいだろう。」

「原因はミュークが率いる労働者達の暴動だ。」

思っていたよりも、ミュークの影響力は強い。

ここで働いている人間以外にも、かなりの人数を引き入れている。」

「彼らはリサやレイの復讐を。」

「いや、違っだろう。彼女は俺達を倒したいだけ。

共通の敵と戦うために、一時的にリサやレイと手を組んだ。」

レイナが口を開いた。

「今の状態は想定内よ。対策も考えてある。すぐに実行しましょう。種を盗難された時に組んだ特別チームをそのまま使しましょう。もちろん私も・始めるわ。」

何を？と訊けなかった。凄みさえ感じた。

もう、俺と共有できる感性を持つあのレイナではない。

残酷なほど凜とした美がそこにはある。

われを忘れて見とれていた俺に、レイナが気づいた。

「後でちゃんと説明するから、信用してね。」

その美しい目の輝きは、間違いなく愛の儀式を予感させた。

今夜、こんな状況の最中に俺達は愛を交わす。

考えただけで悦びがこみ上げてくる。レイナも同じことを感じたらしい。

妖艶な微笑を投げかけてくれた。

俺はもう、完全に異常な世界の住人になったのかもしれない。

驚いたことに、わずか3週間ほどで、あの巨大な地下帝国が消滅した。

レイナとレイラの猛毒によって、おびただしい数の命が奪われた。

速水一族が後片付けを受け持ち、すべての痕跡を消し去った。
処理は驚くほど完璧に行われ、死体も建物も跡形もなく消えた。
まるで幻が消えたかのように。

暴動グループで生き残った人間は、逃げたミュークだけ。

関係のない人々も容赦なく、全員殺された。

あのにぎやかな繁華街を行き来していた人々、
あの風俗店で働いていた女達、すべて殺された。

多くの人間は気づかないうちに死んだらしい。

それが、救いかもしれない。

いったい何人の死者が出たのか、想像もできない。
何百人ではすまないだろう。

秘密は完全に封じ込められた。

俺たちは組織が用意した都心の新たな住居に引越し、
何の不自由もなく、暮らしていた。
桜井たちも一緒なので、心強い。

俺とレイナは毎晩快楽をむさぼり、
罪を償うかのように、お互いの傷をなめあつた。

レイナは益々美しさに磨きがかかり、凄みが感じられるほどだ。
さまざまな能力もパワーアップしているようだ。

俺も気持ち悪い程若返り、高校生並みの性欲と体力を手に入れた。

研究室の連中は、トップ二人の死に、動揺を隠せなかった。

優秀な頭脳の持ち主かもしれないが、臆病で卑怯な、人間としては魅力のない、スカスカの男ばかりだった。

彼らがいずれ裏切るのは目に見えている。

秘密を金で売り、かつての仲間を危険にさらす。

レイナは彼らを抹殺することに決めた。

選ばれた数人を除いて、速水一族が始末した。

やはり美人花達のが理解できる化学者が数人は必要だ。

俺は徐々に、この組織の中心人物になっていた。

重要な決定に関与して、意見を求められることも増えている。

とにかく、内部の争いは終結に向かうと思っていたかった。

第四十一章 神と女王達

爆破事件から一ヶ月が経った。

真相は何もわからないまま、マスコミがおもしろおかしく推測している状態が続いた。

桜井も色々情報を集めてはいるが、犯人は特定できていない。レイナ達は何かを画策しているようだが、それが何なのかは、俺にも明かさなかった。

俺は最近、レイカの変化が気になっていた。何か以前とは顔つきも変わってしまった。戦いが続いたせいだろうか。桜井との仲もぎくしゃくしているようだ。

今朝、目が覚めると、レイナはいなかった。

桜井からメッセージが届いていた。

それは夜中の3時に送られていた。

「起きてからでいいので、朝一番に来てくれ。」

食事もとらずに、桜井の部屋を訪れた。

「朝から急がせてすまない。実は夜中にとんでもない知らせが届いた。

たぶん、政府関係にも、同時に送っているだろう。とりあえず見てくれ。」

桜井が機械を操作すると、映像がスタートした。

そこに映っていたのは、明らかに外人のテロリスト風の男達と、あの爆破事件以来、行方不明になっていたリサだった。

リサはやつれて、別人のように弱気な表情を浮かべていた。服もあの時のままのもので、すっかり薄汚れている。

髪も乱れて化粧もしていない。

縛られたりしているわけではないが、監禁状態であることは、間違いない。暗く沈んだ表情がすべてを表している。

一人の男が結構流暢な日本語で話し始めた。

「われわれの要求はシンプルに現金だ。

80億円と引き換えにこの女を生きたまま帰国させよう。

期限は今から1週間だ。この女の組織でも、国でも、誰でもいい。我々に渡すものを渡せば、この女は生き延びる。そうでなければ死ぬ。それだけだ。」

男が話している間、リサが涙を流して肩を震わせ始めた。

周りの男がリサを軽くつついて、じっとさせようとしている。

「我々が誰なのかは、いわなくてもわかるだろう。さつさと、用意しろ。それだけだ。」

たった数分の雑な映像。それが帰って恐怖感を強めた。黙っているのがいやなので、口を開いた。

「どこの組織か、わかったのか？」

「いや、あれだけでは何もわからない。

今、あらゆる角度から分析させているが。」

「率直に言つて、リサを助けるべきだろうか、それとも見捨てるべきだろうか？」

「我々の組織は壊滅状態ということになっている。

もし、組織がリサを助けなかったとくても、世間がそれをとがめることはないだろう。」

しばらくの沈黙を俺が破った。

「俺もあの女には、何も同情しない。

だがあのテロリスト達は次の標的も考えるだろう。

その時どうするかを・・・。」

「相手がわかれば、狙いもわかるが。」

その時レイナとレイカが入ってきた。

女神のような二人が、微笑みを浮かべて、

美しい髪を揺らせながら俺を見つめている。

なんて美しいのだろう。

ふと妙なことに、気がついた。

二人は俺だけを見ている。視線をはずさない。

レイカが桜井のほうをまったく見ていない。

不自然だ。桜井を見ると、書類に目を通していた。

レイカは、まだ俺を見つめている。

意味ありげな瞳の輝きが、眩しい。

まるで俺に欲情しているかのような、妖しいオーラ。

俺はどう対応すればいいのかわからずに、あわてた。

二人ともテレパシーは送ってこない。

レイナは気づいているに違いないが、無視していた。

「さつき、政府、警察、諜報機関、それぞれから連絡が来たわ。

相手の組織を4グループに絞り込んだから、

色々こちらの事情や意見を聞きたいって。」

いつもの透き通るような美しい声だ。

桜井が書類に目を向けたまま答えた。

「君達はどうするべきだと思う？」

何かよそよそしい、冷たい話し方のような気がした。

今度はレイカが口を開いた。俺から視線ははずさない。

「これは罠よ。みすみす乗る必要はないわ。

助ける努力をしているように、見せれば充分。」

桜井が勢い込んで反論した。

「相手がどの誰だかわからない状態で、そんなに気楽に構えていいのかな。次に誰が狙われるのかは・・・」

レイカが言葉を遮った。まるで痴話げんかのようなうた。

「冷静になって。もう大体の筋書きは読めているから。」

「レイナと出した結論は、今はこちらから動かないってこと。

動けば相手の思いつぼ。もし無視すれば誰が困る？

それは相手の組織よ。わかる？」

レイカが俺に近づいてきた。

「それよりも大事なことは、こちらの体制を立て直すこと。最終的な相手は外国の諜報機関やテロリストではない。

ライバル企業やマスコミでもない。それは内部の敵よ。」

思わず俺が答えた。

「つまり、リサやミューク達。」

レイカが美しい顔をぎりぎりまで俺に近づけて、囁いた。

「違うわ。全然ちがうの。」

レイナが優雅に歩きながら、初めて桜井に視線を向けた。

「実はね、最近になってわかったことなんだけど、

かつての亜佐美の部下たちが動いているの。」

「へー、そんな話、どこから集めたんだ。」

うちの情報網にはそんな話、全くなかったけど。」

「でしようね。だから困るのよ。」

「まあ、いいわ。とにかく彼らは要注意よ。

それと黙っていたけど、美人花の組織化がまもなく完成するのよ。もちろんあなた達、速水一族との協力関係は変わらないけど、今までとはわけが違う。これからは、それぞれ別の目的で動くこともあるから。」

かつての神秘的で控えめなレイカではなかった。

レイナよりも攻撃的なくらいに、激しさを感じる。

レイナはなぜか無言だ。テレパシーも送ってこない。

言いようのない不安を感じて、沈黙を破った。

「どうしたんだい、急に。」

俺達だけはしっかり団結しておかないと、だめじゃないか。

あんた達二人は俺のお手本で、理想のカップルなんだ。」

ついにレイナがテレパシーを送り始めたためた。

（説明が必要ね。色々状況は変わったのよ。

私はもうすぐ枯れる時期が来る。もちろん又再生するけども。

その間、美人花の組織を誰がたばねるのか、決めておかないと。でも結局、レイカにしか私の代わりはできない。

図抜けた能力を持っていて、絶対に信頼できる存在だし。）

そういえば、とつくに枯れる時期が過ぎている。

随分周期が長くなっているらしい。

（レイカの枯れる時期には私が、二人が元気な時期は二人で。ただし、レイカには足りない部分がある。

その部分を養うために、貴方の力が不可欠なのよ。）

（桜井には秘密にするのか。）

（そういうことになるわ。）

レイカもテレパシーで話し始めた。

（協力してね。）

妖艶な微笑を二人そろって俺に投げかけている。

拒否はできない、頭がフラフラしてきた。

はつきりとは言わなかったが、俺とレイナが毎晩行っていることを、

レイカとしてもほしい、ということらしい。

桜井が悲しそうな表情でずっと下を向いている。

俺がレイカと関係を持ったとき、何が起きているというのか。

桜井とレイカの関係はどうなるのか。

（桜井には貴方のような特別な価値はないのよ。

あなたは違う、美人花の守り神みたいなもの。

はつきりいえば、桜井はただの召使の一人に過ぎない。

レイカも彼に対して、親しみや憐れみは持っていたとしても、

それ以上のものはないのよ。）

レイナが説明を続ける。

（貴方と関係を持つことで、美人花の能力は驚くほどパワーアップする。

私も最初は、それが貴方のおかげだとは気がつかなかった。

でも、それはとんでもない劇的な変化よ。

貴方と離れている時期に、はつきりそれが自覚できた。）

つまり、俺は美人花をパワーアップさせる重要なツールであり、レイナが俺を必要としているのはそのせいなのだ。純粋な愛情だと思っていたのは俺の幻想、ということになる。

（違うわ。貴方を絶対的に愛していることには変わりない。ただ結果として、私達の交わりがお互いに大きな利益を与えている。違うかしら。）

俺の考えていることは、レイナたちに隠すことはできない。テレパシーのつもりではなくても、同じことなのだ。レイカが付け加えた。

（貴方は私達の神。そして女王がレイナと私。そして下の階層に美人花達、さらにその下に速水一族、そして最後に必要最小限の人間達。）

第四十二話 謎解き

レイナたちの目指す組織の話が唐突だったので、頭が混乱している。

彼女達が部屋を出ても、しばらくは桜井と話をする気が起こらなかった。

テレパシーで語られたことを、言葉にしてもいいのだろうか。誰の立場で考えればいいのか、誰の力になるのがいいのか。誰を信じればいいのか。

少し間をおいて、桜井が驚くほど張りのない声でしゃべり始める。「そういえば、速水と真由美が連絡を絶って、動向がつかめない。しかし、彼らが死んだとは思えない。今、彼らの力がほしいのに。」

真由美に会いたい。単純に思った。

未練たらしい自分に嫌悪感が湧き上がる。

「本当に何か、調べる方法はないのか。」

「いろいろ探ってみたけど、何も出てこない。

速水一族の未来がかかった大切な時期なのに。

実際、俺にはもう氣力がない。今本当に速水Fの助けがほしい。」

2時間後に政府の諜報関係の人間がやって来るということで、それまで部屋の戻って食事をとることにした。

こちらの姿勢は決まっている。

誘拐されたりサは心配だが、組織には助けるお金も力も無い、という無難な言い訳。

廊下を歩いていくと一人の女が立っている。カーリーだった。
「お久しぶり。貴方を待ってたの。」

もしかして俺を男として興味を持ったのかも、
と無意識に期待している俺がいた。

「違うわよ、うぬばねないで。」

思ったことが全てばれてしまうのが、厄介だ。

「それで、何か？」

「大切な情報を持ってきたのよ。ついてきて。」

歩くスピードがはやいので、小走りでないと離れてしまう。
改めて眺めてみると背中からかかとまで、見事なスタイルだ。
色気と躍動感に溢れている。

惚れ惚れして眺めていると、カーリーが振り向いた。

「余計なこと考えないで。わかった？」

「わかった。」

見たことのない階段を通って、壁に行き当った。

カーリーが何か手を動かすと、ドアが現れた。

「特別室。レイナと佳苗博士しか知らない部屋。」

中は殺風景な薄汚い倉庫のようだった。

「何をする所？」

「テレパシーも盗聴も感知器も心配ない場所。」

レイナでさえここで起こったことは感知できない。」

そこで俺をどうするつもりなんだろう。

不安と期待が入り混じった感情が沸きあがる。

「今日は色々謎を明らかするために、来たのよ。
ショックを受ける事もあると思うけど。」

あと、これはレイナの命令ではないから。

私が勝手に行動しているの……あなたのために。」

最後の言葉は声のトーンが違っていた。

やっぱり俺に好意を……

さっき否定されたばかりだが、今回は沈黙。

この部屋では内部でもテレパシーが使えないらしい

「レイラや桜井にも秘密の話もあるから。」

「レイナは？」

「今ここにいることはわかってるでしょ。もちろん。」

「そりゃそうだろうな。」

「とりあえずこれを観て。」

カーリーが空中に用意していた映像を流し始めた。

そこには、カーリーとレイが映っていた。

俺が誘拐されて、レイに殺されそうになったあの場所。

カーリーがレイを殺したあの時だ。

「防犯カメラの映像を盗んできたの。」

「証拠隠滅？」

「もう、とつくに私の仕業ってばれてるわよ。」

二人の美女が映っている映像は、まるで映画を観ているようだ。

カーリーがレイを打ちのめして立ち去った後、しばらくすると誰かがやってきた。女だ。そしてレイの息の根を止めた。

非常に手際よく、何のためらいもない残酷さ。俺は顔をそむけた。

「アップにするわね。」

ズームされて、顔が大写しになった。

ミュークだ。

「どこかでを監視していて、時が来るのを待っていた。そして計画通りにレイを殺した。」

「なぜ、仲間割れ？」

「たぶん、リサは全ての罪をレイに押し付けて、それから殺すつもりだったんでしょね。」

その為に、整形してまで顔を似せたりしたんだわ。でも、大きく予定が狂った。

自分が誘拐されたのも、私がレイを倒したことも。」

「だけど変だな。もし君が俺を助けに来なかったら、ミュークはどうするつもりだったんだろ。」

「考えられるのは二つのケース。」

一つは私達の行動がリサたちの全部筒抜けで、私がレイと戦うのを待っていた。

もう一つは、もともとあなたを助けるつもりで隠れていた。」

「俺を助ける？」

「あなたは人質としても美人花の栄養剤として、最高の価値があるからね。」

俺は価値のある男・・・なのか。

「でもミュークが自分の意思でやったとは思えない。誰の命令なのか、それはわからないけど。」

リサではないような気がする。」

「ミューク自身、かなりの人数の労働組織のリーダーだろ。リサと対等な関係かもしれない。それにあの手際のよさは。」

「そうね。戦い慣れている。プロの作業員の動き方だわ。同業者だからね・・・よくわかるの。」

「君もプロの・・・」

「そう、破壊作業員よ。」

諜報、誘拐、盗聴、殺人、爆破、何でもやるのよ。怖いでしょ。私は組織ナンバーワンのモンスター。」

カーリーは何かを俺に言ってほしいみたいだった。だけと言えなかった。

期待されているのと逆のことを言うのが怖かった。

カーリーは昂ぶる気持ちを抑えたようだ。

軽くため息をついた。

「次の映像も驚くわよ。」

再び映像が空中に流れ始めた。

ホテルの部屋だろうか

シャコーラ、いやメイサがホテルの部屋で身支度をしている。下着姿が艶かしい。

メイサとのエロチックな思い出が脳裏を駆け巡る。

メイサが忙しそうにバスルームに向かった。

すぐにミュークが現れた。部屋に潜んでいたようだ

何か怪しげな動きをした後、すばやく出て行った。

メイサが戻ってきて何かをしようとした時、
激しい爆発が起こった。

煙で何も見えない中、炎が・・・。

俺は胸が苦しくて、呼吸が乱れた。
カーリーは俺を冷静に観察している。

「この爆発事故で死亡したのは亜佐美ということになっている。
メイサは別の日、別の場所で事故により死亡。」

「亜佐美？何のために、そんな・・・。
今のは間違いなくメイサ。」

「亜佐美は身を隠したかったのよ。
そのために死んだことにした。」

メイサ、つまりシャコーラは亜佐美の身代わり。
一番工作しやすかったんでしょう。

だってもともと、シャコーラという存在自体、組織の作った架空の
ものでしょ。

パスポートや出入国記録、ホテルやレストランなどのサインや、
カードの記録、全部組織が簡単に操作できる。」

「じゃ、亜佐美は今でも？」

「生きてるはず。どこかで。」

「その後の事故で、メイサの代わりに死んだのは？」

「何人でも身代わりは作れるわ。何人でもね。」

第四十三話 最後の選択

「時間がなくなってきたわ。

そろそろ行かないと、怪しまれる。急いで、あとひとつだけ。

確認はまだ取れていないんだけど、信頼できる筋からの情報。今回の爆破、誘拐事件の犯人、というか黒幕だけど、

外国のテロリストを装った国内の組織の仕業。

中心になっているのは、亜佐美の元部下達数人。

協力しているのは、様々な分野の国内外の実力者達。」

「ということは、さっきの話とあわせて考えれば。」

「そういうことでしょうね。」

「でも、桜井やレイナとも敵対してまで・・・」

「あなたも考えて、身の振り方を。もうすぐよ。」

「何が。」

「決断を迫られる時がくるわ。

どちら側の誰に味方するのか。」

「レイナか、真由美か、人間か、美人花か。」

「速水一族とミュークの動きも予測しにくいし、

私やレイカだって、場合によっては誰かを裏切るかも。」

優柔不断な人間にとって最も苦手な作業。

「亜佐美の本当の目的は？」

「たぶんリサ達や美人花から組織を奪い返し、再生させること、かしら。半分は女の意地でしょうね。

組織は無力化していて、命を賭けて戦うほどの価値はない。

まあ、美人花と速水一族はそれ自体商品価値が高いけど。」

「速水Fは亜佐美が生きている事を、」

「もちろん知ってるでしょうね。だから姿を消しているのよ。たぶん一緒に行動しているわ。私はそう思う。」

「桜井は知らされていない？」

「彼は微妙な立場になってしまった。結果としてね。」

でもたぶん、そろそろコンタクトがあるんじゃないかしら。亜佐美達にとっても、大事な人脈に違いがないから。」

「真由美は？」

「わからない。生きてるかどうか、一緒に行動しているか。彼女の事、今でもやっぱり気になるのね。」

「そうだね。」

「ちよつと、うらやましい。」

部屋を出てからも、カーリーの色々な情報や言葉が、頭の中を駆け巡っている。全体が理解できない。

こつという争いごとに対する、作戦的な思考回路が苦手だ。

ただカーリーの熱い眼差しや意味深な言葉が、

何を意味するのは男として感じる事が出来た。

結局食事を取らずに、部屋でぼんやりと時間を過ごした。なんとなく着替えて、桜井の部屋に戻った。

その日は一日中、諜報や警察、公安、マスコミの対応に追われた。ほとんど俺と桜井だけで対応したので結構な疲れを感じた。

意外だったのは、諜報をはじめとする国側の態度が、極度に冷めていたことだった。

何の興味も無いのかなと疑いたくなるくらい、事務的な雰囲気漂わせていた。

4団体に絞り込んだという犯人グループの名前もなかった。

唯一マスコミは熱心だったが、こちらの静かさに拍子抜けしたようだ。

前代未聞の爆破誘拐事件なのに何故、と思っただろう。

彼らは犠牲になったテレビ局の仲間に対する哀れみと、自分達の聖域を犯された憤りに満ち溢れていた。

それほど正義感のあるタイプの人間達には見えなかったが。

予定が全部終了した後、桜井と二人きりになった。

何か言うべき事があるはずだったが、お互いに言葉が見つからない。仕方ないので、長い沈黙を俺が破った。

「疲れたな。」

「そうだな。休む間もなかったからな。」

「これから、どうなる？」

答えはなかった。

どうでもいい話を少しして、部屋を出た。

部屋に戻るとレイナの甘い声が頭に響いた。

（疲れたでしょ。今からレイカと三人で楽しみましょう。神聖な儀式だけど、快樂の宴でもある、あの行為を。）

早速レイカと俺を……。なぜかカーリの顔が浮かんた。

俺は誰を愛しているんだろう。、カーリーの愛も欲しいのか。本当は誰でもいいのかもしれない。

結局その時、一番都合のいい相手と関係を持っているだけ。不思議と相手に不自由しないのをいいことに、

調子に乗って次から次へと、欲望を・・・。

（そんなに、自分を責めないで。あなたは純粹なだけ。私への愛は真実の愛。私が一番よく知っている。）

（俺は桜井を傷つけない。彼がいかにレイカを深く愛しているかを知っているし、それに・・・。）

自分の考えがまとまらない。

結論を出そうとしても混乱するだけ。

（少し待ちましよう。とにかくこっちにきて頂戴、お願い。）
（わかった。すぐ行くよ。）

俺はレイナたちが待っている部屋に向かった。

女神のような二人が俺を笑顔で迎えてくれる。

夢に出てくるような風景。

もし少しでも触れられたら、もう抵抗できない。

それより先に断らなければ、間に合わない。

「いいのよ、心配しないで。レイカも無理に貴方とそういう関係を持つのは、プライドが許さないから。」

レイカの美しい声が部屋に響いた。

「私に残された時間はあと2日。」

それから1週間は、レイカと一緒にみんなを守って。」

「みんなって？」

「美人花と、この組織にかかわる人々全員よ。」

「敵がはつきりしていないのに、どうやって守る？」

「カーリーから色々聞いたでしょう。」

私達の情報は正確で迅速。諜報機関よりもレベルは高いかも。だからもうすぐ、敵の正体は見えるはず。」

カーリーとレイナの関係は絶対服従なのだろうか？

レイカはどうなんだろう？

俺の思いを読み取ったレイナがすぐに反応した。

「美人花の間で思いを隠すことはできない。

お互い何を考え、感じていか、瞬時に理解しあう。敵意や裏切りはすぐに明らかになる。

レイカがもし私を葬ってナンバーワンになりたければ、そうしてみればいい。」

レイカが少し動揺したように見えた。

「もしカーリーが、あなたを好きになって、私から奪いたければ、試してみればいい。

私は彼女達の欲望を受け入れる。

心の一瞬の欲望でさえ、お互いわかってしまう。」

レイナが崇高な遠い存在に思えた。

俺の感情を察知してレイナが微笑んだ。

そうじゃないのよ、っていう感じで

「レイや部下の美人花の裏切りの時もそうだった。

私にはすぐにわかったし、レイもそれを承知で敵になった。」

「レイが死んで、部下の美人花たちは・・・」

「たぶん全員戻ってくる。私は裏切りを許す。」

私のメッセージは届いているわ。美人花はすべて私の娘。」

自分の一族を守るためにすべてをかける。
今のレイナの原動力は間違いなくそれだ。

「もちろん人間に対しては許せない事も残っているわ。
でも、今はもうそんなこと、どうでもいい。」

「リサたちのグループはこれから？」

「もう壊滅状態ね。リサ、高木、レイ、誰もいない。
そしてミュークは、たぶん彼らを裏切った。」

「ミューク、気をつけないと・・・」

レイカが低い声でつぶやいた。

「大丈夫よ。明日にでももうあの世に行ってもらおう。
人間の女は厄介な奴が多いわ。亜佐美、リサ、ミューク、
真由美。男よりはるかに手ごわい。」

「えっ、真由美。」

レイカが仕方なしに続けた。

「カーリーから聞いて、だいたい想像はついていると思うけど、
亜佐美が生きているかもしれない。そして我々と敵対する。

その時美人花の脅威となるのは、人間の女。
特に戦闘能力の高い女。つまりミュークや真由美のような女。」

誰と誰が戦うのか、誰がどちら側なのか、初めて理解できた気が
した。

でももう遅い。今更この戦いは止まらない。

レイナがまっすぐ俺をみつめながら言った。

「最後には私を選んでね。信じているわ。」

ドアが開いた。出て行けということらしい。

レイナとは当分会えない。大切な快樂の時間を俺は放棄したのだ。後悔の念でいっぱいになったが、潔く部屋を出た。

レイナに（愛しているよ）と力いっぱいの思いを送った。

（さようなら、私の大切なあなた。）

甘い天使の声が、俺の脳みそと内臓を引っ掻き回した。

（さようなら）という響きが俺を打ちのめした。

たぶん俺は真由美を選ぶ、レイナはそう思っている。

第四十四章 カリーの決断

レイナは自分が枯れる時期に姿を消す。前の時もそうだった。誰にも見られたくないし、一番危険な時でもある。

あれから1週間が経った。

レイナからの声はもう届かない。レイカからも何の連絡もない。

レイカがレイナの種を守っているのだろう。

まもなく、無事に生まれ変わったレイナが現れるだろう。

でもレイカが裏切れば、事情は全く変わってしまう。

レイナはそれでもかまわないと言ったが。

さらにもう一週間が過ぎた。

不安だったが、忙しすぎて忘れがちだった。

現状、俺は組織の運営をほぼ一人でこなしている。こんな事、したくてやっているわけではないのに、

世間は俺に抜け目のない男、というレッテルを貼った。

巨大な組織と富を手に入れたやり手の男。

実際の仕事は尻拭い的な雑用と、マスコミへの対応だった。もはやこの組織に実体はなかった。

桜井もレイカとは連絡が取れず、あせっている。

居場所もつかめていない。

組織内の美人花達も口をつぐんでいる。

さらに日々が過ぎていく中、俺は確信した。
レイカは裏切った。自分が女王になるために。
レイナの命まで犠牲にしたのだろうか。
胸が張り裂けそうで苦しい。

俺もレイナを見殺しにした事になる。

あんなに愛していたレイナを助けようとしなかった。

一人で考えているとネガティブな思考に支配される。
何をすればいいのかわからなかったが、
とりあえず、行動を起こすことにした。

まずレイカに呼びかけてみた。

（レイカ、何処にいるんだ。レイナはどうした。
頼むから答えてくれ。今すぐに。）

何も反応はなかった。

俺は無力感に襲われて、途方にくれた。

廊下をとぼとぼと歩いていると、美人花たちがやってきた。
知らない顔ばかりだが、人間の女とはオーラが違う。

すれ違いざまに、チラッと俺の顔を見ただけで、
何も言わずに去っていった。

もはや美人花達は俺を必要とはしていないようだ。
今何人くらいの美人花がこの組織にいるのか、
外部で活躍している美人花がいるのか、
敵対している美人花はどうしているのか。
何も知らない。知りたくもない。

レイナがいらないのなら、もう関係ない。

レイナがどうなったのか、それだけは知りたかった。

さらに一ヶ月が過ぎた。俺の体に変化が起きている。
すさまじい勢いで老化が進んだ。

毎朝鏡を見るのが怖かった。顔全体の肉が垂れ下がり、
視力が著しく衰えた。

関節が痛みで腫れている。

髪の毛もあつという間に白くなった。

声が出にくくなり、食欲もない。

実際の年齢をはるかに超えた老人になってしまった。

レイナとの営みが途絶えて、若返りの効果が切れたのだろう。
そして強烈に今までの反動がやって来たのだ。

俺はあきらめた。もう気力も残っていない。

レイナも真由美も失った今、何も目的がない。

ここ数日やたらと眠たい。気がつけば昼寝をしている。
視力が悪くなっているせいもあるのだろうか。

寝ぼけた頭に突然レイカからのメッセージが響いた。

（レイナのことと話があるの。今夜私の部屋に来て。

いやなら来なくても良いわ。チャンスは一度だけよ。）

（レイナは生きているのか？）

（自分の目で確かめれば。）

（わかった。必ず行く。）

殺されるかもしれない。関係を持たされるかもしれない。

色々考えてみたが、結論はすぐに出た。

何もしないで待っているよりは、はるかに気楽だ。
恐れる理由がない。命は惜しくない。

俺が消えても誰も困らないし、悲しまない。

むしろ殺して欲しい。早くこの状態に別れを告げたい。
もう十分、色々経験したし。

（かわいそうなあなた、私が癒してあげる。
絶対に幸せにしてみせる。全ては解決できる。
私があなを、つつみこんであげる。）

甘い、美しい響き。レイカだけが俺を救えるのかもしれない。
俺が一番求めていたのはレイカとの愛。
おれはよたよたと廊下を歩いて、にたにたしていた。
殆ど廃人のように。

その時何かがどこかに絡み付いて、俺の自由を奪った。
そんな気がしたただけかもしれない。そして失神した。

俺は夢を見ている。
透き通った水の中でゆつくりと移動している。
泳いでいるというより、流されている。
くらのように。

時々美しい花びらの塊が体や顔に触れる。
天上の音色が何かを奏でている。
どこかで聞いたことのあるメロディ。
何の曲だったか思い出せない。

大好きなロツクの……。

目を覚ますと、知らない部屋。

殺風景だが、きれいに片付いている。

ゆっくりと起き上がってみて驚いた。

俺は再び若返っていた。

手足に力が戻って、視界もクリアだ。

頭もはつきりしている。気力も充実している。

なぜかはわからないが、レイカと一緒にすごしていた時の状態に戻っている。

気を失った時、俺は何をしようとしていたんだろう。

そうだ、レイカに会いに行こうと思って廊下を歩いて……。

「その時、急に何かが起こった。そして失神した。」
「カーリーが立っていた。」

前よりも美しさが増したような気がする。

とにかく、彼女が助けてくれたのは間違いない。

「そして君が俺を看病してくれた。」

「まあーね。でも貴方を気絶させたのも私よ。」

「なぜ？」

「あなたをあそこから連れて行くには、意識を失ってもらうしかなかったのよ。」

「俺を？」

「テレパシーにしろ会話にしろ、美人花には筒抜け。秘密の作戦はありえない。」

だから私が独断でやるしかなかった。

打ち合わせなしで。わかる？」

「なるほど。」

「あなたを、レイカに渡すわけにはいかなかった。

私はレイナとの約束を守りたかったし・・・」

「約束？」

「もしレイカが裏切って、貴方に危険が及んだら、

レイカと戦うことになっても、助けに行くようにって。

あの時、あのままレイカと会っていれば、

貴方は生きてはいなかったでしょうね。」

「レイナは？」

「たぶん種は保存していると思うけど、再生させる気は、全く無いでしょうね。」

「あと、体が再び若返っているのは？」

「私と体を交えたから。私達はもう他人ではないのよ。」

第四十五章 奇妙な関係

「何が起こったか、教えてくれないか？」

「どうしても聞きたい？」

「まー、言いくいのなら。」

「いずれわかることだから、今が良いかもしれないわね」

「なんか、聞くのが怖いな。」

「少し覚悟して聞いてね。」

まずあなたを襲ったのは美人花たち。

レイカに反感を持っていた連中。

彼女達は20人以上でよってたかつて、あなたの体からありとあらゆる体液を吸い尽くした。」

「あらゆる体液。」

「そうよ。血、髄液、ありとあらゆる体液。」

「そんなことしたら、死んでしまうんじゃない？」

「死んだわ、あなたは一度死んだ。そして私は決意した。レイナとの約束を果たそうって。」

俺は精神的にかなり動揺している。

思考が完全に麻痺している。

数分の間

レイナの約束って？

カーリーはどうやって俺を助けたのだろう。

今、俺は本当に生きているのだろうか？

体はあるし動く。見えるし、聞こえるし、話せる。

「大丈夫よ。ちゃんと治ったから、完全に。」

俺は壁に表示されている時間を見て驚いた。
あれから3ヶ月がたっている。

俺は随分長い間、意識を失っていたことになる
「そうね、でも思ったよりも再生は早かったのよ。
もつと時間がかかると思った。」

「再生つて。」

「今のあなたの体は、前のものとは違うのよ。
新しく用意されたもの。」

そして脳のほんの一部だけ、移植したの。」

「この体は作り物？脳の一部だけつて？
誰が？どうやって？」

「その体はあなたの細胞から作ったクローン。
もうだいぶ前に、レイナがあなたから内緒で採取したのよ。
レイナはあなたを失うのが怖かった。」

だからクローンを用意して、その時の為に備えていた。
もしレイナに何かがあつたときのために、
私には細かいことまで教えてくれていたの。」

「元の俺の体は？」

「見たい？かなり傷んでいるけど。」

そっついながら、歩き出した。

地下に降りていくと、そこに鉄の扉の部屋があつた。
中に入ると、そこに俺の抜け殻が大切に置かれていた。

何もかも吸い取られて皮だけの状態だ。

表面には無数の刺し傷、切り傷、噛み付いたあのような傷。顔は衰弱しきった老人のようだ。

でも間違いなく俺だ。

自分はナルシストではないが、どうにも涙が止まらなかった。

「何もこんなにしなくても・・・」

カーリーが静かに話し始めた。

「あなたと交われれば美人花の能力が増幅する。

これはもうみんなが知っていることよ。

そしてレイカはそうなるうとしていた。

でも、それを許せない連中がいた。

そしてレイカと関係を持つ寸前に、あなたを襲った。

彼女達はあなたと交わるよりも、体に取り込む事を選んだ。

同時に複数の美人花が利益を分け合うことができるから。」

「俺の死体を君が取り戻して、クローンを使って蘇らせた。」

「少し違うわ。私が凄惨な現場に着くのと同時に、もう一人、

あなたを助けに来た女がいた。」

一瞬真由美の顔が浮かんた。

「残念でした。そんなにすばやく情報が伝わるはずないでしょ。

レイカよ。彼女は何とかあなたと交わる事を願っていたから。

美人花たちの裏切りを許さなかった。

彼女の怒りに任せた攻撃は壮絶だった。

あつという間に10人以上の美人花がばらばらにされた。

私もどさくさにまぎれて、その場に入り込んで5人を切り刻んだ。」

その場面を想像したくなかったし、できなかった。

レイカに対する複雑な思いが俺の胸を締め付けた。

カーリーは少し間をおいて、言いくそうに続けた。
「そして・・・他の美人花達と戦っているレイカを、
不意打ちで倒した。念入りに息の根を止めた。」

シヨックで体が硬直した。

桜井の大切な人、レイカが死んでしまった。

彼がどんなに悲しむかを考えると、やりきれなかった。

俺の心を読んだカーリーがいらついた様子で続けた。

「桜井だけの問題ではすまないわ。」

死んだ美人花達にはそれぞれ10人から100人の中毒男性がいて、
彼らは皆、絶望のどん底に叩き落されている。

そしてあとを追って自殺する者が続出する。

異常な社会現象としてニュースになるかも。」

「もしその死体から種を手に入れることができれば、
その美人花は再び生きることができる、
そうだよな。」

「ちょうど種ができている時期であればね。
でも、レイカはその時期ではなかった。

止めを刺したあと確認したから。」

「レイカはレイナの種をどうしたんだろう。」

「わからない。レイカはレイナのことをどう思っていたのか、
結局理解できなかったわ。だから想像できない。」

「結局レイナもレイカも皆いなくなってしまった。
これから美人花の一族を誰がまとめていくんだ？」

君？それとも誰か他に？」

「いないわ。私も無理。そんなタイプじゃない。私は目立たないように動き回る虫みたいなもの。卑怯な毒虫。人の命令で何人でも殺す。」

「でも、もう君に命令できる存在はいないだろう？」

君は完全に独立した自由な美人花になったんだ。

違うかい？」

「そうね。でも一人では何もできないし、決めれない。ずっと命令で働いていたから。」

「君の意思で俺を助けてくれたし、レイカを殺した。」

「レイナの命令であなたを守っただけ。」

レイカはその目的を達成するために殺しだけ。」

「あまり自分を攻めないでくれ。」

君はやさしくて有能で美人で聡明で、魅力にあふれている、猛獣のように。

それに比べて俺には何も無い。

平凡で軟弱、優柔不断で卑怯、ひ弱だ。」

しばらくして、カーリーが何かを覚悟したかのように俺の目を見つめながら至近距離に近づいた。

「これからはあなたが私に命令をして。」

私のボスになってほしいの。お願い。」

俺はてつきり誘惑されるのかと思った。

少し拍子抜けした。

「違うわよ。全然。」

でもあなたが命令するなら、いつでも従うわよ。

私は服従することに決めたんだから。
喜んで何でも。」

第四十六賞 最後の友情

世間ではカーリーの言ったことが現実起こっていた。

男性達の謎の大量自殺が毎日のように報道されている。

すでに200人以上が死んだ。

さらに毎日増え続けている。

もちろん、原因はカーリーたちが殺した美人花だ。

夢中だった美人花が死んで男達は絶望したに違いない。

世間は美人花の存在も知らないのだから大変だ。

連日の自殺騒動に国全体がパニック状態だ。

桜井は大丈夫なのか？

この3か月の間、何をしていたのだろう。

生きがいを失った桜井は誰に助けを求めるのだろう。

行方不明の俺を捜すことは、なかったようだ。

少し失望した。

考えてみれば桜井と俺の間は、それほど深い付き合いではない。

偽の記憶で親友だったので、錯覚を起こしているだけだ。

でも、やはり数少ない友達なのだ。

とにかく、話をしたい。色々と……。

連絡を取るのがわずらわしい。

カーリを呼ぶことにした。俺の秘書だから。

涼しい青の大きな花柄のワンピース。

俺の好みに合わせてもらった。

美しい腰のラインが官能的だ。抱きつきたい衝動が・・・。

「ええ、どうぞ、好きなようにして。あなたの思い通りにそれが私の役目ですから。」

「いや、すまない。あんまり魅力的なものだから。」

「なぜ我慢するの？」

「だから、それより先に・・・」

「わかつてるわ。二人で一緒に行く？」

行きたい、一緒に。

まるでデートに誘われた中学生みたいに、はにかんだ。

「いいかげんに、欲望をさらけ出して。

私をはっきりあなたの所有物にして。

それが私の望みなよ、知ってるくせに。」

「わかった。素直になるよ。」

どうせ俺の気持ちは全て読まれているわけだから。

でも、せめて桜井と会ってからにするよ。

一緒に行こう。俺も着替えるよ。」

桜井の緊急用の回線に連絡を入れた。

すぐに返事があった。

奴は誰もが知っている有名な高級マンションに潜んでいた。

30分ほどでついた。

入り口を見つけるのに、随分苦勞する、変わった形の建物だ。

一連の厳重なセキュリティの手続きを経て、

ようやく中に入った。

カーリーはまるでこの住人であるかのように、迷うことなく、桜井の部屋にたどり着いた。

どこかで見ていたのだろう。

タイミングを計ったかのように、ドアが開いた。

「また会えるとは思っていなかった。うれしいよ。さあ入ってくれ。」

見ただけで寂しさが伝わってくる部屋、自然に気持ちが沈んでいく。

何の温かみもない、何の希望もない部屋。

そして、まるで別人のような桜井がそこにいた。本当に彼かどうか疑いたくなるくらい、あまりにも弱々しい感じがした。

向かい合って座って、一息ついた。

カーリーは俺の横に立っていた。

「知っているかもしれないが、美人花のカーリー。俺の秘書って感じかな。」

一瞬、カーリーを見る桜井の目に鋭い光が戻った。

「カーリー……か。闇の処刑人。」

「そう、あなたの大切な人も、私が殺した。」

「知ってるよ。何回もその録画を見た。夢に出てくるくらい。」

桜井の耳が赤くなっていくのが見えた。

「何故殺さなければいけなかったのか？答えてくれ。」

「レイナとこの人のため、それだけ。」

「命令だったのか？」

「私の解釈でレイナの意思を実行に移した。」

「もしレイカが生きていたら、俺は捨てられて、絶望していただろう。」

でもレイカがもうこの世に存在していないという、現実を受け入れられないんだ。絶望を超えている。」

「せめておまえに復讐してやろうかとも考えた。とても勝ち目がないのはわかっている。」

でもお前の大事な人を奪うことはできる。」

どうやら俺のことらしい。

「でも、復讐のために友達を裏切ることにはできない。結局、俺はじつと我慢することにした。」

桜井は俺を友達と位置づけていたのだ。うれしいし、悲しかった。

「でも、これからカーリーと幸せそうにしている、お前を見て平然としていられるだろうか。」

無理だ。殺意や嫉妬、そんな気持ちが俺を支配するだろう。だから、今日を最後に二度と会わないつもりだ。」

俺は何も言えなかった。

非常に緊迫した空間がそこに存在した。カーリーは臨戦態勢に入っていた。

いつ戦闘が始まってもし不思議ではない。

しかし、何も起こらなかった。

「今から最後の友情の証として極秘情報を話すが、どう対応するかは、君たちの自由だ。」

最後という言葉が何を意味するのか、聞いたかったが、そんな間を与えずに、話し続けた。

「二日前の朝、速水Fから連絡があった。

亜佐美が生きているという噂は本当だった。

真由美も一緒に行動している。

他にも亜佐美のかつての部下達、50人以上が手伝っている。人間と速水一族が半々くらいだ。」

「やっぱりか。何故今まで連絡を取らずに、隠れていたんだ。」

「姿を見せないことによつて、敵が他の敵と戦う。

そしてダメージを受ける。これを繰り返し返すように仕向ける。

この作戦は亜佐美が死んだことによつて、成立している。

実に巧妙なやり方だ。」

「彼女らは数え切れない敵対する組織を壊滅させる事にほぼ成功した。

内部も外部も含めて、もはや敵はいないに等しい。」

「確かに結果としてはそうなっているが、

仕組んで、やれることではないだろう。」

「いや、80%以上は仕組んだままに、物事が進んだ。」

厄介な妹、うるさいジャーナリスト、海外のテロ組織、ライバル会社の破壊工作員、そして美人花のレイナ、

レイカ、レイ。上手くお互いを敵対させた。
さらに警察、外国の諜報組織、マスコミを巻き込んで利用した。
全て 彼らの計算通りに物事が進んだ。」

カーリーと桜井がそれぞれの事件や事故を振り返って、
分析しはじめた。

すべてが亜佐美の作戦だという前提で見直してみると、
驚くほど話しの辻褄があつていく。

俺にはよく理解できないところもあつたが、
とにかく、亜佐美は完全勝利したようだ。

「彼らはお前達に情報が漏れるのをいやがつている。

カーリーなのか、おまえなのか、とても警戒している。
仲間にすべきかどうか、迷っているんだ。」

「なぜだ。もともと一緒にやってきたのに。」

「美人花全体を恐れているんだろう。

だから美人花にとって特別な価値のあるお前、
最強のカーリー、どちらがリーダーになつても、

亜佐美にとっては心地いい状況にはならない。
戦つても勝ち目はない。

ならば、誰か他に統率出来る奴がいるのか。

亜佐美でも速水Fでも無理だ。

場合によつては、美人花と縁を切ることも考えているようだ。」

カーリーが独り言のようにつぶやいた。

「亜佐美の思いとおриにはさせない。」

桜井がカーリーをたしなめるように静かに話した。

「まあ、莫大な利益をもたらす最強の兵器、美人花を簡単に手放すとは思えないが。」

第四十七章 街中の戦い

桜井のマンションを出て、すぐに戦いは始まった。カーリーは俺をかばいながら、すばやく男たちを倒していく。まるで流れ作業のように、無駄がない。

何をどうしているのか、俺の目では、わからない。刃物や銃を持っている相手がばたばたと倒れていく様子は圧巻だ。

相手は速水一族ほどの動きではないが、すぐにプロの集団だとわかるレベルだった。それでもカーリーの相手としては不十分だった。1分ほどでけりがついた。

「さあ、急ぎましょう。次は外国の諜報系の殿方達よ。」
「もう、わかつているのか。」

「そいつらつて、亜佐美の命令で・・・。」
「でなければ、速水F。」
「俺たちを、殺す気だろうか。」
「そうよ。」

「駅ビルに向いましょう。人ごみにまぎれて戦えば、確実にあなたを守れる。」

走る俺たちを街行く人々が不思議そうに見ている。俺は息が切れて、フラフラしている。遠くでサイレンの音が聞こえる。警察だ。さっきの男達のところへ向っているのだろう。

「どうにか間に合ったわ。後はやつらが来るのを待つだけよ。さあ、隠れましょ。」

「どこに？」

「目立たなくて、人がいっぱいの場所。」

俺たちは若いカップルでいっぱいのアクセサリ売り場に入り込んだ。

カーリーは指輪を見始めた。

あまりの熱心さに俺は不安になった。

「大丈夫よ。選んでいるふりをしているの。あなたもお芝居に付き合って。」

カーリーにプレゼントするということで、色々な指輪を彼女の指にはめてみた。

手と手が触れると、カーリーは少し照れる仕草をみせた。かわいいと思った。早く深い関係を持ちたい。

欲望が異常なほど高まってきた。

もうカーリーを抱きしめて、キスしたくて、どうしようもない。

ふと気がつくと、隣でいちゃついていたカップルの男が

カーリーを見ている、それも夢見るような表情で、

口を半開きにして、夢中で見つめている。

横にいた女が気がついて、男に話しかけても、何もなかったかのよう

に、

じっとカーリーを見つめている。

「あの男、頭がいかれてるのか？」

「いいえ、私の媚薬効果よ。」

気がつくと店内の男全員がうつろな目でカーリーを見ていた。
「彼らは私を守ろうとするわ。そしてそれは、．．」

言葉の途中で連中がやって来た。

プロレスラーのような、白人たち。

カーリーが何もいわなくても、媚薬に犯された男たちは白人を敵と認識した。そして捨て身で迎えうった。

まるでカーリーの意味が伝わっているかのように、
男たちは戦った。

恐怖を忘れた男たちは白人の大男達を苦しめた。

殺すわけにもいかない。

かといって、やられっぱなしも危険だと感じたのだろう。

舌打ちしながら去っていった。

店の男たちも何もなかったかのように、解散した。

連れの女たちは、不思議そうに首をかしげながら、
各々の男に近づいて、顔を覗き込んだ。

男たちは、カーリーのことしか考えていないのだ。
他の事はどうでもいい、と感じている。

気がつくとカーリーがいない。

辺りを見回したが見つからない。

（大丈夫か？）

カーリーに問いかけてみた。

（すぐ戻るから、そこにいて。）

一連の騒動がなかったかのように次々と客が入ってくる。店はさっきまでの活気を取り戻した。店員達も何も見なかったことにしようと思ひついたかのように、普通に客の応対している。

「さあ、行きましょう。」

カーリーがすぐ横にいた。全く気づかれない動き。

「何処に？」

「もう用事は終わったから。帰ってゆっくりしましょ。」

街に出て、二人で並んで歩いた。

時々カーリーの美しい横顔を見た。

すると毎回、カーリーは微笑を投げかける。

「まるでデートしている気分だ。」

「私もわくわくしてる。うそみたい。」

「こんな平凡な幸福感こそが貴重なんだ。」

「そうね。きつとそうなのね。」

俺たちは手をつないだ。

カーリーの手は柔らかくて、暖かい。

人間と変わらない感触。不思議だ。

（さっきの外人さん達、全員毒針で殺したわ。

あと桜井の部屋の隣に潜んでいた男達も毒で。）

たしかに、テレパシーで話したほうがいい内容だ。

（その男達って、桜井の？）

（桜井の意識にはなかったから、たぶん亜佐美の命令でしょ。速水一族も何人かいたけど。）

（毒をどうやって？）

（花粉をカプセルにいれて飛ばすような感じがしら。）

（狙った場所だけが？）

（そうよ。ピンポイントで攻撃できるの。）

（毒針も同じように？）

（そうね。近い距離の場合だけね。）

（桜井は殺さなかったんだね。）

（敵対しないし、どうせ自殺するつもりだから。今頃もう死んでいるかもしれない。）

（助けたい。）

（無駄よ。生きる希望を失ったから。）

（レイカのこと？）

（それが大きいけど、それだけではないわ。）

（見殺しにしたくない。）

（今警察やマスコミで大混乱よ。そこにわざわざ行くの？）
ビルの巨大スクリーンにニュースが映し出された。

桜井のマンションで多数の死人が出たことを伝えていた。
また大柄な外国人10数人が路上で倒れて死んでいる、
さらに、近くの別の場所でも男達が多数の切り傷を負って
倒れている、と大々的に伝えられた。

マスコミは大騒ぎだ。

街には様々なサイレンが騒々しく鳴り響いている。

俺とカーリーは手をつないだまま急いだ。

早く結ばれたい、
こんな時にそれだけを激しく願う自分が、
悲しくて滑稽だった。

第四十八章 意外な追っ手

「やっぱりあそこに帰るのは無理ね。

罨がいつぱい。相手の情報網は思ったよりも早くて正確。」

カーリーはすでに危険を察知した。

「帰るのはもう、あきらめましょう。

別に何も大事なものはなし。

あなたの遺体が見つかるのけど、むしろ好都合よ。」

なぜ？と訊くのはやめた。知りたくなかった。

「他の美人花たちのところに身を隠すしかないわ。もう了解を取ったから行きましょう。」

地下街に降りて、人ごみにまぎれた。

すれ違う男達は皆カーリーの美しさに目を奪われていた。

「男は私のいいなりにできるし、殺すことも簡単。

でも女はそうはいかない。手ごわい。」

行きかう女達は明らかに敵意を持ってカーリーを

にらんでいる。憎悪さえ感じるほどの鋭い目つき。

少し様子が変だ。

いくらカーリーが綺麗だとしても、

この雰囲気は違う。普通の女達ではないのかもしれない。

（そう、正解よ。

ずっと隙をうかがっている。

間違いなく訓練された戦闘要員。

なぜか私達の動きを読みきっている。）

（ほとんど全員が敵？）

（約2割が敵。ざっと300人、ほとんど女。）

（手強い女がいっぱい。どうする？）

（予定変更。私について来て。）

カーリーが歩くペースを早めた。

俺は小走りでついて行くのがやっと。

急にカーリーが曲がった。

そして鉄の扉を開いて、階段を上る。

駐車場からの出入り口。

カーリーに先導されて地下街から表に出た。

そしてすばやく裏通りに入ると、

ネオンが眩しい、昔風ののいかわしいホテルが現れた。

「入りましょう。」

「ここに？」

「そうよ。」

性欲のスイッチが音を立ててオンになった。

でもそんな場合ではないことはおれにもわかる。

（もちろん違うわよ。ここはしばらく隠れるだけ。

もちろんあなたが、そういうことを今したいなら

それも可能よ。私はいつでも。）

（今は我慢するよ。命取りになったら後悔するから。）

カーリーが俺を見つめて微笑んだ。

（ほんの1時間ほど隠れて、相手の動きを見るわ。

下手に動くと自滅してしまうかもしれない。

私の勘だけど、今までとは別の相手、そんな気がする。）

手続きを済ませて部屋に入ると、

すぐにカーリーは小さな機械を取り出して作業を始めた。

（調べてみる価値はあるわ、たぶん私の勘は当たっている。

今私達を追っているのは、亜佐美達、その命令を受けている

国内外の諜報機関、そしてそれ以外の誰か。）

（他の美人花？）

（それならすぐにわかるわ。）

（ミューク？）

（かもね、でも目的がわからない。）

10分ほどが過ぎて、俺はうつらうつらと眠気を感じ始めていた。
カーリーが立ち上がった。

（やはりミュークの組織が復活している。

立て直したのか、それとも壊滅していなかったのか。

驚きね。読みが甘かった。

間違いなくさっきの連中は彼女達だわ。素晴らしいチームワーク。

私一人では勝てないかもしれない。）

（助けを呼べないのか。）

（大丈夫。何とかあなただけは守るから。）

（そうじゃなくて、君が心配だ。失いたくない。

もうこれ以上大切な人を失うと、生きていく自信がない。）

（うれしいせりふね。でも心配は無用。

実は私は不死身なのよ。美人花の進化形だから。）

（どこがどう違うのか知らないけど、殺しあわずに、
上手くやっていく方法はないのか。）

（話し合いは、だましあいになるわよ。結局殺しあうことになる。
時間稼ぎのためだけ。それでも話し合う？）

（人間同士の話し合いなら俺に任せてくれ。）

ミュークだって知らない仲じゃないし。」

（じゃあ、コンタクトを取りましょうか？）

（そうしよう。）

カーリーにとって秘密の暗号やパスワードを解くことは簡単なパズルを楽しむレベルらしい。

いとも簡単にミュークの組織のネットワークに入り込んだ。

（あとはあなたがやってちょうだい。まかせるわ。）

（わかったよ。）

（こちらの居場所は知らせないで。探れないようにしてあるから。）

早速メッセージを作った。

「こちらヒロキとカーリー。わかりますか。」

あなたが追っている二人です。

私達は敵対するのではなく話し合いたいのです。

亜佐美達とは連絡を絶っています。

つまり組織には属していません。

中立の立場を宣言します。連絡お待ちしています。」「

「これでどうだい？」

「どうかしら。協力的でも信じることは出来ないし。」

「とにかく向こうの出方を見よう。」

驚くほどすぐに返事が返ってきた。

「コンタクトしてくれて有難うございます。」

私達はあなた達を敵だとは思っていません。

ただ情報を集めていただけです。

もし必要ならば事情によっては、力を貸します。」「

今からすぐに、人目につく場所で会うことになった。
話はそれからだ。その時又メッセージが届いた。

「ミュージク達はカーリーを欲しがっている。

生け捕りにして利用するつもり。」

そのマニュアルは完全。ヒロキは一人で交渉に行くべき。
ちなみに彼女達が考えているカーリーの弱点は、冷凍。」

カーリーが深刻な表情を見せた。

（どう思う？）

（やりとりが筒抜けね。わたしの弱点は正しいけど、
だからって、怖がる必要はないでしょ。）

カーリーが探りを入れた。

「誰の心配をしているのか？あなたは誰の見方？」

「ヒロキの見方。カーリーはどうでもいいけど、

ヒロキのボディガードとしてがんばってもらわないと。」

「一人で行けば身柄を捕らえられるだけでは？」

「その時は私が助ける。どうせミュージクと部下一人。
たいしたことはない。」

「このやり取りは見られていると思うけど？」

「へでしようね。でも平気よ。連中の動きは監視しているから。

兵隊や武器を持ち込むなら、こちらにも用意があるわ。

たぶん手は出せない。ミュージクはもうわかっていないはず。」

カーリーが身支度を始めた。

（急いで、ここを知られたわ。）

（どこに逃げるんだい？）

（わからない。）

料金を払って、ホテルを出た。
そこに真由美が立っていた。

第四十九章 女の意地

俺は動揺した。カーリーも身構えた。

真由美はやはり艶やかで美しい女、一段と成熟していた。

「久しぶりね。思ったとおり元気そうだね。」

懐かしい声、ずっと聞いていたい。

「さっきの・・・」

「そう、わたしよ。でも勘違いしないでね。

あなたに未練はないから。

ただ単純にあなた達二人がほしいの。

最高の商品、いや最強の武器、絶対的な芸術品

としての生きているあなた達二人。

なぜかカーリーが沈黙している。

「カーリーには、わかってるはずよ。

もう逃げられない。私達と一緒に来るしかないの。

これからも、いろいろ活躍してもらっけど、

勝手はさせない。」

「亜佐美と速水はどこだ、話をさせてくれ。」

「彼らと私はもう関係ないわ。」

その時、カーリーが崩れるように倒れた。

表情が絶望的で、苦悶と驚きに満ちている。

まるで瞬間に時間が止まったように、

目を見開いたまま、気を失っている。

「カーリーに何をした。」

「死にはしない。当分動けないけど。」

さつきもいったけど、彼女がほしいの。

あなたとペアで。」

「カーリーにひどいことをしないと約束してくれ。」

協力はあるから、助けてくれ。」

「ずいぶん深く愛情を感じているのね。」

私の時とは違うつてわけね。」

「そんなことはない、君のことを忘れたことはない。死ぬほど後悔した。」

「そうは見えなかったけど。」

何人かの男女が小走りに近づいてくる。

「私の部下よ。」

ひそひそと話した後、カーリーを担架で運びはじめた。俺もそれについていこうとしたが、真由美に止められた。

「あなたは私と一緒に来て。状況を説明してあげる。」

「まずミュークは今私達を追いかけてきているわ。」

でも、無駄ね。所詮馬鹿な人間だけの集団。」

人間だけの、という言葉にどんな意味があるのか、もう少し黙って聞き役に回ることにした。

普通のトラックに見える大きな車に乗せられた。

「あなたも知っているとおりの、私は人工的に作られた人間。」

つまり次世代の生物。何もかも人間の能力を大きく上回っている。でも美人花や、速水一族のような驚くほどの力ではない。

だからっていうわけではないんだけど、」

その時、緊急ブザーが響いた。

「だめです。全滅です。完全にやられました。」

女の叫びに近い声がその恐怖感をあらわしていた。

「誰が何をしたの、正確に・・・」

トラックが急に止まった。

真由美が俊敏に飛び出していく。

すさまじいスピード感、体の切れは一流の格闘家以上だ。

俺も車から出てみたが、誰もいない。

真由美もどこかに消えてしまった。

車の前に回つてみると、運転席で女が倒れていた。

口から血が出ている。まだ生きているみたいだが。

助手席の女二人は目を見開いて、息絶えたようだ。

後ろに回ると、後続の車3台が煙を上げていた。

トラックの後ろの扉は開いていた。

中をのぞくと、やはり女達が10人ほど倒れていた。

後ろの車も大体同じ状況だろうと思った。

俺は辺りを見回しながら、車の爆発から逃げることにした。

あたりは真っ暗、人気のないゆるい坂道。

不気味なほどの静寂。

その時シュルシュルと聞いたことのないような音がした。

俺は恐怖で身がすくんだ。

（大丈夫、私よ、カーリー。）

（助かったんだね、よかった、怪我は？）

（結構ぼろぼろにされたわ。とにかく早く逃げて。

私は一緒に行けない。真由美は殺していないから安心して。）

（何故一緒に行けない？どこにいるんだ、そこにいるんだろ？）

（いるけど、今の姿はあなたに見せたくない。

それに歩けないし、しゃべれない。）

（それなら君を残しては行けない。どうすればいいか言ってくれ。）

（この道を隠れながら真っ直ぐ進んで。

なるべくここから遠くへ逃げて。）

（頼む、君を失いたくない、どうすれば二人で助かるか。）

（私は不死身。しばらくすれば歩けるようになるし、目も見えるようになる。）

（目が見えないのか？いくら君でも、今敵に襲われたら・・・）

（ゆっくり移動して、朝まで隠れて体を整えるわ。それから・・・）

（それから？）

（あなたに連絡を取るわ。）

（俺が抱いていくから一緒に行こう。）

（足手まといになるわ。目立つからだめ。

私は今化け物のような姿なの。顔は割れて目が飛び出て、体が溶けてどろどろ、鼻や口、それに歯も溶けてしまっただけ。そんな私を見てほしくない。それだけ。

仲間の美人花が15分くらいで迎えに来てくれるから、ミュークや亜佐美に見つからないように。

気をつけてね。）

辺りを必死で見回したが、カーリーらしき姿はなかった。さっきと同じようなシュルシュルという音だけが離れていく。

（早く行つて。真由美の部下がじきに到着するわよ。）

（絶対又会えるよな。君も本当に助かるんだな。）

（心配しないで、少し時間はかかるけど、またあなたを助けに行くから。）

再び静寂が訪れた。俺は暗闇を慎重に進んだ。

車が来てもすぐに隠れることが出来るように、道の端を歩いた。結局、車も人も何も遭遇することはなかった

歩きながら頭を整理することにした。

いったい何が起ったのか。

真由美が自分の組織を持っている。俺達を捕獲しようとした。

しかし途中で失敗した。

真由美の部下が多数カーリーに殺された。が真由美は生きている。カーリーもひどく痛手を負った。

ミュークとの約束は流れた。亜佐美と真由美は無関係らしい。頭が混乱した。誰を頼っても危険が存在する。カーリーが心配だ。どんな姿でも一緒にいるべきだった。いつも助けてもらっているのに、こんな時しか力になれないのに。

何か物音がした。自転車がこちらに向ってくる。

俺は道端の草むらに身を潜めた。

自転車がゆっくり止まった。女だ。俺のほうを見ている。

（遅くなって、ごめんなさい。カーリーから連絡をもらった、美人花のデビィーよ。無事で何よりだわ。）

間違いない美人花だ。当然美しい。

（後ろに乗って下さる。車やバイクは監視されていて、

使えなかったの。安全な場所まで二人乗りね。）

（聞きたいことは、全部テレパシーで伝えて。声に出すと居場所が判別されるかもしれないから。）

（誰に監視されているの？）

（ミュークたちの組織。）

自転車とは思えないくらいのスピードで走り続けた。

（カーリーを助けたいけど、どうすればいい？）

（あなたがカーリーを助ける、冗談でしょ。

大丈夫よ。信じなさい。彼女は最強、

私達のような美人花とはいろいろ違うのよ。

もはや美人花ではないのかもしれないわ。）

第五十章 再生

俺は動揺した。カーリーも身構えた。

真由美はやはり艶やかで美しい女、一段と成熟していた。

「久しぶりね。思ったとおり元気そうだね。」

懐かしい声、ずっと聞いていたい。

「さっきの・・・」

「そう、わたしよ。でも勘違いしないでね。

あなたに未練はないから。

ただ単純にあなた達二人がほしいの。

最高の商品、いや最強の武器、絶対的な芸術品

としての生きているあなた達二人。

なぜかカーリーが沈黙している。

「カーリーには、わかってるはずよ。

もう逃げられない。私達と一緒に来るしかないの。

これからも、いろいろ活躍してもらっけど、

勝手はさせない。」

「亜佐美と速水はどこだ、話をさせてくれ。」

「彼らと私はもう関係ないわ。」

その時、カーリーが崩れるように倒れた。

表情が絶望的で、苦悶と驚きに満ちている。

まるで瞬間に時間が止まったように、

目を見開いたまま、気を失っている。

「カーリーに何をした。」

「死にはしない。当分動けないけど。」

さつきもいったけど、彼女がほしいの。

あなたとペアで。」

「カーリーにひどいことをしないと約束してくれ。」

協力はあるから、助けてくれ。」

「ずいぶん深く愛情を感じているのね。」

私の時とは違うつてわけね。」

「そんなことはない、君のことを忘れたことはない。死ぬほど後悔した。」

「そうは見えなかったけど。」

何人かの男女が小走りに近づいてくる。

「私の部下よ。」

ひそひそと話した後、カーリーを担架で運びはじめた。俺もそれについていこうとしたが、真由美に止められた。

「あなたは私と一緒に来て。状況を説明してあげる。」

「まずミュークは今私達を追いかけてきているわ。でも、無駄ね。所詮馬鹿な人間だけの集団。」

人間だけの、という言葉にどんな意味があるのか、もう少し黙って聞き役に回ることにした。

普通のトラックに見える大きな車に乗せられた。

「あなたも知っているとおりの、私は人工的に作られた人間。」

つまり次世代の生物。何もかも人間の能力を大きく上回っている。でも美人花や、速水一族のような驚くほどの力ではない。

だからっていうわけではないんだけど、」

その時、緊急ブザーが響いた。

「だめです。全滅です。完全にやられました。」

女の叫びに近い声がその恐怖感をあらわしていた。

「誰が何をしたの、正確に・・・」

トラックが急に止まった。

真由美が俊敏に飛び出していく。

すさまじいスピード感、体の切れは一流の格闘家以上だ。

俺も車から出てみたが、誰もいない。

真由美もどこかに消えてしまった。

車の前に回つてみると、運転席で女が倒れていた。

口から血が出ている。まだ生きているみたいだが。

助手席の女二人は目を見開いて、息絶えたようだ。

後ろに回ると、後続の車3台が煙を上げていた。

トラックの後ろの扉は開いていた。

中をのぞくと、やはり女達が10人ほど倒れていた。

後ろの車も大体同じ状況だろうと思った。

俺は辺りを見回しながら、車の爆発から逃げることにした。

あたりは真っ暗、人気のないゆるい坂道。

不気味なほどの静寂。

その時シュルシュルと聞いたことのないような音がした。

俺は恐怖で身がすくんだ。

（大丈夫、私よ、カーリー。）

（助かったんだね、よかった、怪我は？）

（結構ぼろぼろにされたわ。とにかく早く逃げて。

私は一緒に行けない。真由美は殺していないから安心して。）

（何故一緒に行けない？どこにいるんだ、そこにいるんだろ？）

（いるけど、今の姿はあなたに見せたくない。

それに歩けないし、しゃべれない。）

（それなら君を残しては行けない。どうすればいいか言ってくれ。）

（この道を隠れながら真っ直ぐ進んで。

なるべくここから遠くへ逃げて。）

（頼む、君を失いたくない、どうすれば二人で助かるか。）

（私は不死身。しばらくすれば歩けるようになるし、目も見えるようになる。）

（目が見えないのか？いくら君でも、今敵に襲われたら・・・）

（ゆっくり移動して、朝まで隠れて体を整えるわ。それから・・・）

（それから？）

（あなたに連絡を取るわ。）

（俺が抱いていくから一緒に行こう。）

（足手まといになるわ。目立つからだめ。

私は今化け物のような姿なの。顔は割れて目が飛び出て、体が溶けてどろどろ、鼻や口、それに歯も溶けてしまっただけ。そんな私を見てほしくない。それだけ。

仲間の美人花が15分くらいで迎えに来てくれるから、ミュークや亜佐美に見つからないように。

気をつけてね。）

辺りを必死で見回したが、カーリーらしき姿はなかった。さっきと同じようなシュルシュルという音だけが離れていく。

（早く行つて。真由美の部下がじきに到着するわよ。）

（絶対又会えるよな。君も本当に助かるんだな。）

（心配しないで、少し時間はかかるけど、またあなたを助けに行くから。）

再び静寂が訪れた。俺は暗闇を慎重に進んだ。

車が来てもすぐに隠れることが出来るように、道の端を歩いた。結局、車も人も何も遭遇することはなかった

歩きながら頭を整理することにした。

いったい何が起ったのか。

真由美が自分の組織を持っている。俺達を捕獲しようとした。

しかし途中で失敗した。

真由美の部下が多数カーリーに殺された。が真由美は生きている。カーリーもひどく痛手を負った。

ミュークとの約束は流れた。亜佐美と真由美は無関係らしい。頭が混乱した。誰を頼つても危険が存在する。カーリーが心配だ。どんな姿でも一緒にいるべきだった。いつも助けてもらっているのに、こんな時しか力になれないのに。

何か物音がした。自転車がこちらに向ってくる。

俺は道端の草むらに身を潜めた。

自転車がゆっくり止まった。女だ。俺のほうを見ている。

（遅くなって、ごめんなさい。カーリーから連絡をもらった、美人花のデビィーよ。無事で何よりだわ。）

間違いない美人花だ。当然美しい。

（後ろに乗って下さる。車やバイクは監視されていて、

使えなかったの。安全な場所まで二人乗りね。）

（聞きたいことは、全部テレパシーで伝えて。

声に出すと居場所が判別されるかもしれないから。）

（誰に監視されているの？）

（ミュークたちの組織。）

自転車とは思えないくらいのスピードで走り続けた。

（カーリーを助けたいけど、どうすればいい？）

（あなたがカーリーを助ける、冗談でしょ。

大丈夫よ。信じなさい。彼女は最強、

私達のような美人花とはいろいろ違うのよ。

もはや美人花ではないのかもしれない。）

第五十章 再生

暗闇で走り続ける自転車が、スピードを緩めた。

（もう大丈夫。やつらはあきらめたわ。

完全に見失ったてこと。ざーまーみるよ。）

（やつらって、誰のこと？）

（全部よ、全部。ミュークも真由美の組織も。

亜佐美たちも。）

（作戦成功だね。）

（そういうこと。あと少しで私の部屋につくからね。）

崩れそうな古びた建物の前に自転車が止まった。

（ここだよ。）

一階の端の部屋の鍵を開け始めた。
なぜか昔懐かしい。こんな場所も知らないし、
こんな経験もないが、すべてがしっくりとくる。
不思議な感覚。

（はいって。すぐみんなに会えるから。）

（みんなって？）

（ここにいる美人花と、それに夢中な男達よ。

（ここにそんなに多くの人数が入っているとは。）

（でしょ。でも見かけと中身は違うのよ。
ついて来て。）

勢いよく、奥の部屋に入っていくと大男がいた。

「いらつしゃい。お待ちしてました。」

「下に行くわ。あなた達はそのままでもいいから。」
「わかりました。」

デビイーを崇拝している目、間違いない。
美人花の虜。

（彼以外にも20人ほどここに住んでいるの。
ちよつと多いけど、まー仲良くやってるわ。」

部屋の隅にある体重計を移動させて、
何かスイッチを入れたらしい。

冷蔵庫の下の引き出しがすべるように飛び出た。

（いきましょ、地下に。）

デビイーがそこに乗った。俺にも乗るように促した。
（無理だろ、二人は。）

言いながら、のってみると驚く程安定している。

スムーズに滑りながら、冷蔵庫とは逆の方向に進んだ。そしてなぜか、もぐり始めた。

あっという間に加速して、暗いトンネルを急降下した。

ふわっと到着したのはちょっとした広場だった。

そこに100人以上の男達がいる。

女はたぶんみな美人花なのだろう。

ざっと15、6人が横一列に並んでいる。

美の競演、圧倒的な豪華さ。

一人の女が一步前に出てあいさつをはじめた。

「ようこそ、ヒロキさん。お会いしたかったわ。

私はレイナの娘、ララ。

あなたに関する記憶を引き継いでいるわけではないけど、強烈な愛が細胞レベルに残留している。

だから、あなたを見るとレイナの悦びが細胞を通じて伝わってくる。すごいわ。」

「レイナの感情が細胞に。」

「あなたはレイナを今でも思い出す？」

「もちろん。深い愛で結ばれていたから。」

「真由美よりも？」

「何故そんなことを聞くんだい？」

「それは、あなたの答えによって、私達が決断するからよ。」

「何を？」

「何だと思う？」

横にいるデビィーが俺を見つめている。

まるで俺に答えを強要しているかのように。

「見当がつかないけど、レイナがなにか・・・」

「そう。レイナを探すのはあなたしかできない。」

「レイナは生きている？」

「あなたもよく知ってることだと思うけど、レイナの命の種はレイカが預かった。そして隠した。」

でもたぶん、きっちりとした形で保存をしたんだと思う。

必要な時の為に。でもそれが何処にどんな形で保存されたか、どんなに探してもわからない。」

「レイカが死んでしまった今、手がかりはない。」

「そう。でも我々はあなたなら見つけることが出来ると思う。

あなたが近づけば、レイナの種が、活性化して細胞自体が喜びのオーラを発するにちがいない。

それを私達が感じればいい。」

「でも何処を探すんだ。あてはあるのか？」

「ないわ。だからあなたの愛情が必要なのよ。

愛の執念があれば可能になる、どうかしら。

レイナと逢いたくない？」

「逢いたいに決まってる。一分でも早く。」

「よかった。じゃー具体的な話を始める前に、お食事をどうぞ。」

デビイーが俺を部屋の奥へ誘導した。

おいしそうな料理と酒が用意されている。

「私が身の回りの世話係よ。」

しばらくずっと一緒だけど、よろしくね。」

何故かほっとした。

食事をしながら色々質問をしあった。
組織のこと、レイナのこと、ララやデビィーのこと。

彼女達が知リたがったのは、もっぱら真由美、ミユーク、
カーリー、亜佐美の四人の女性についてだった。

美人花にとって、人間の女は扱いにくい存在らしい。

カーリーは同じ美人花でも何かが違うらしい。

はつきりとは言わないが、俺に色々探りを入れて、

カーリーの情報を得ようとしていることから、

カーリーが何か特別な存在であることは間違いなさそうだ。

「どうしても、カーリーだけは助けてほしい。

何とかならないか。いくら彼女がタフでも、

放置したくないんだ。」

「じゃ教えてあげる。彼女は美人花と速水一族を掛け合わせて出来
た、

生命体をさらに遺伝子操作して改良を加えた超進化形美人花。

生まれ変わるたびに、種になる私達と違って、

そのままの姿で体を何度でも細胞等を交換して生きていける。

運動能力は速水一族直系のすばらしいレベル。

美人花の持つ能力もすべて持っている。」

「誰がカーリーを創り出したんだ。」

「レイナのアイデアを速水一族と人間の学者達のチームが実現させ
た。」

「レイナの娘？」

「ではないの。クローンでもないし。」

「速水一族の誰の遺伝子？」

「速水F。だけど精子のレベルではないの。」

「レイナと速水Fからさらに遺伝子操作した美人花がカーリー。」

「そういう事。だから心配しなくても自分で体を完全治癒して、元氣に戻ってくるわ。」

「冷凍が弱点つていつてたけど？」

「美人花共通の急所。一度凍ると破壊された組織が戻らない。解凍すると腐敗する。我々はその時死ぬしかない。」

でも、カーリーは腐敗しながら生きていける。

おぞましい姿で、人目を避けて回復を待つ。」

「どれくらいの期間が？」

「わからない。前例がないから。どんな方法で冷凍されたのかによって、

違ってくるし。」

おれはあせった。何とか早くカーリーの力になりたい。

今度は俺が役に立ちたい、と心の底からこみ上げてくる熱い感情を、抑えることが出来なかった。

俺の気持ちを、読んだデビィーはあわてて話題を変えようとした。

「真由美の後ろには、化学の知識を持っている優秀なブレインが、いるわ。間違いない。それが誰かはわかっていないけど、

かなり危険な感じね。美人花のことを研究してきた人間なんて、組織の内部にしかないない。」

「そいつにカーリーはやられた。」

「だけど、逃げられた。予想をはるかに超えた能力を持っていたから。」

「でもダメージはかなりのレベル。」

「大丈夫よ。どうにかして自分でリカバーするわ。」

ある種冷淡な雰囲気を感じる。きっと純粋な美人花ではないからだろう。

カーリーは仲間など一人もない孤独な存在なのだ。

「さつきから、カーリーのことばかり心配しているけど、真由美は気にならないの？」

「いや、気にはなるけど、彼女はもうあの組織のリーダーでもあるし、

今頃部下達に保護されているだろうから。」

「そうかしら。あのカーリーがそんな中途半端なことをするかしら。断言するけど、真由美は無事救出されてはいない。」

「じゃ、どうしていると思う？」

「わからないけど、カーリーがコントロールしているんじゃないかしら。」

少し間が空いたとき、ララが部屋にやってきた。

「お話、はずんでるようね。お酒、追加でお持ちしたわ。

私もいいかしら？」

といいながら、席に着いた。

「あなたは人間の男なのに、美人花一人を思い続けることはないのね。

レイナよりも真由美、真由美よりもカーリーを愛している。違うかしら？」

自分でもわからなかった。でもカーリーが一番、気になる。

「私達は絶対にレイナが必要。そのためにあなたの助けがいる。

それだけのことなの。レイナさえ見つけることが出来れば、あなたやカーリーとはお互い干渉せずに暮らしていける。」

「つまり、協力しろ、ということだね。」

「無理矢理あなたを従わせることはレイナが望まないでしょう。まずあなたに協力して、カーリーを救出する。それから、レイナを探す。これでどうかしら。」

「ありがとう。」

デビィーは少し不満気だったが、話はまとまった。

第五十一章 デビィー

俺とデビィーは箱に隠れてトラックで外に出た。

ララ達は別の方向から近づいて、俺達の後方支援をする、ということらしい。

やはり亜佐美達に気づかれるのはまずい。

当然、ミュークのチームだって、必死で俺達を探しているだろう。

「さあ、行きましよう、今度はバイクよ。2台用意してあるから、飛ばしていきましょ。」

「俺は乗ったことがないから、だめだ。」

「うそでしょ、だめなタイプね。」

「そういうことだ。」

「じゃ、一台で仲良く行きますか。」

バイクの音がうるさいので、テレパシーで会話した。

（カーリーは気持ち悪い姿のままなら、どうする？）

（どうもしないよ。おれは彼女を支える。）

（もし真由美を殺していたら？）

（仕方ないだろう、あんな目に合わされたんだから。）

（レイナと真由美だったら、どちらを選ぶ？）

（わからない。本当に。）

（男って、都合のいいほうを常を選ぶのね。

そして、ある日その法則が崩れる。それが本当の恋人。あなたにとってはカーリーがその人でしょ。）

（すごく哲学的だな。深く考えすぎだよ。）

遠回りして、あの場所にたどり着いた。

草むらに潜みながら、あたりの様子を伺う。

周りには誰もいない。虫さえない状況。
シーンという静寂の音が聞こえてくる。

俺は早速テレパシーを送ってみた。

（俺だ。やっと来れた。力になりたい。何処だ。）
返事を待ったが、反応はなかった。

「ここにはいないわ。みすみす敵に見つかるのを、
待つようなものでしょ。」

「それはそうだけど。」

「私達はもう、見つかったようだわ。」

その時何かが、動いた。

そして足元が揺れた。デビイが小さく悲鳴を上げた。

「やつぱり罠だわ。美人花を殺すための仕掛け。」

草むらが割れて、数人の女達が現れた。

「かかったわね。馬鹿女。いや馬鹿花。」

デビイは固まったように動かない。

いや、本当に固まっていた。

俺はあわてた、なんとかララ達に連絡しないと。

「さあ、ヒロキさんもあきらめて私達と一緒に来て。」

女達はデビイを運ぶ為に袋をかぶせようとした。

その時ララ達が襲撃した。あっというまだった。

女達が顔を引きつらせた。毒を全身に直接打ち込まれた。

ムチのような細いツル状のもので、眼球を貫いた。

八人の女達が絶叫して目を抑えながらのた打ち回っている。
そして静かになった。全員が死んだ。

凄惨な光景に呆然としていた俺に、デビイーが話しかけた。

「大丈夫？」

「君こそ、どうもなかったのかい。」

「少し足を痛めただけですんだわ。」

やつらのやり方は予想できたから、あらかじめ防具をつけていたの。

「

「カーリーもそれを知っていたら。」

「カーリーが攻撃されたからわかったのよ。」

何か液状の物を足元に仕掛ける罠。」

ララ達と合流してその場を離れた。

真由美のグループは依然真由美を救出していない。

バックアップしている研究者達の力も、恐れるほどではない。

液状の武器は人間には無害。

これがララたちの出した結論だった。

「だけど、美人花はあの液状の物に直接触れると、大変なことになるんだろう。」

「そうね。だから今のうちに彼らの拠点を攻撃して、全滅させるわ。」

「

「とにかく、全員防具をつけないと危険だし、まずデビイーのけがを。」

「やさしいのね。心配しなくても私達は今から帰る。」

攻撃の役目は、うちのかわいい僕ちゃん達が今頃実行してるわ。」

あの美人花たちに夢中な男達が、真由美の部下達を襲撃している情景が目に見えた。命令を全力で遂行するだろう。

女や弱々しい学者たちは、抵抗するまもなく殺されるのだろう。

ここ数日でいくつの命が失われたのだろう。

俺がその中心にいることが、いたたまれない。

絶望的な気分が俺を襲う。

「あなたのせいじゃない。みんなそれは知っているわよ。」

ララが声に出して慰めてくれるが、心には響かない。

結局カーリーの居所はつかめず、争いが広がっただけ。

デビイーの手当てをする為に着いた所は、以前の場所とは別の大きなビルだった。

「すごいビルだね。」

「他の団体も借りているの。かえって目立たないから。」

「私達は真ん中辺りの階を5階借り切っているの。

色々な設備があるから結構便利なのよ。

でもとにかくデビイーの手当てをしなくちゃ。

あなたにしか出来ないことがあるの、手伝ってくれるわよね。」

「何でもするよ。俺のせいでこんなことになったんだ。」

「じゃ、今からデビイーをお風呂に入れて体中よく洗って。

隅から隅まで、丁寧に。足はもちろんだけど、他の所も全部。

わかった。すごく大事な作業よ。人間のあなただから出来る作業。

少しでも残っていると、ほんの一滴でも、そこから腐ってくるから。」

「

「でも、それなら彼女を夢中で思っている男達に頼めば。」

「今いないわ。あなたいやなの。」

「いや、恥ずかしいんだ、それだけ。」

「意識過剰ね。そんな恥ずかしがる歳じゃないでしょ。馬鹿みたい。」

ララが風俗店のオーナーみたいな会話をかわした。

スケベ心を押し殺して、接することが出来るかどうか。

不安だがうれしいような、微妙な高揚感が湧き上がった。

「いいのよ。そういう感情が自然だし、私達はそれがなければ絶滅するんだから。あなたならデビィーも無条件に大歓迎よ。」

「俺が美人花にとって特殊なスタミナドリンク的な役割を果たすから、ってことだよな。」

「そうね。特にひどい傷を負った場合は効果絶大だと思うわ。できれば、デビィーと交わってあげて。」

効果が確かめることが出来れば、カーリーだって。」

俺は何様なんだろう。こんな美人達にありがたがられて、関係を持てる。こんな特権はこの世で誰も持っていない。

独裁者でも超セレブでも、世界的な人気スターでも。

そんな自分が嫌いだ。卑怯な生き方に思えた。

「そんなに深く考えないで。私達を助けてほしい。」

それだけ。もしビジネスとして考えたほうが割り切れるなら、そうしてもいいわ。それなりのギャラを支払う方が、あなたも気が楽かもしれない。」

「いや、それは勘弁してくれ。とにかくデビィーを助ける。それからカーリーを探しに行く。」

気持ちが整理できた。

浴室に案内されると、デビィーはもうお湯に浸かっていた。

もちろん全裸だ。少しはにかみながら、微笑んだ。

第五十二章 真由美二世

美しい体がそこにあった。

俺が見とれていると、デビイーが立ち上がった。

「ちょっと面倒だけど、私を洗ってね。」

「洗うって、何か石鹸的な物を・・・」

デビイーが浴槽を大胆にまたいで、洗い場に立った。そこにおいてあった小瓶をつかむと俺に差し出した。

「これを体中にあなたの素手で塗りこんで欲しいの。全身隅々まで。」

「わかった。」

「それから、その薬を塗り終わったら、30分待って、きれいに流して。それで終わり。」

あとできれば・・・」

少し言いくさそうな様子で続けた。

「その30分間わたしを抱きしめてくれたら。」

「ただ、抱きしめれば・・・」

「そう。何もしなくていいから、ただ裸で抱き合って、ほんの数分でもいいから。」

「わかった。」

「言っておくけど、セクシャルな意味はないのよ。治療、あなたの絶対的な治癒力を使って・・・」

気がつく、デビイーの両膝から下に3センチほどの、どす黒いあざのようなしまが出来ている。

「そう、これが傷、みるみる大きくなっていくの。防具をつけている上からでもこの有様。」

直接だったら、もう命を落としていたかもね。」

まるで、果物が腐っているような印象だった。

俺はそこから目をそらせた。

「はやく、始めよう。」

早速、俺も着ている物をすべて脱いだ。

言われたとおりに、全身にさらさらの液体を丹念に塗りこんだ。裸で寝ている美女を撫で回して、興奮しないはずがない。

しかもこっちの考えていることは、すべてわかってしまう。

「すまない。どうしても男性の本能は理性よりも強い。」

「全然気にしないで、むしろ光栄よ。」

隅々まで塗り終えた俺は、すっかり興奮状態で、

心臓が肥大したかのような感覚にとらわれた。

そして30分抱きしめる段階で俺はもう頭がくらくらしてきた。

5分間が経過しただろうか。限界が来た。

俺の野性が解き放たれた。

抱きたい、この美人を今すぐに。

夢中で唇を重ねた時、忘れていたあの感覚、

体中から何かが抜き取られ、何かが体中を駆け巡り、そして……

その時、俺はデビィに突き放された。

「もう、充分。すごいわ、すごすぎる。」

私には重過ぎる。私は普通の美人花でいい。
あなたに関わって争いに巻き込またくない。」

「すまない。調子に乗りすぎた。
謝るよ。ごめん。」

「謝らなくてもいいの。おかげで私は完全に回復したし、
かなりパワーアップしたわ。30分も抱き合っていたら、
大変なことになったでしょうね。」

私は女王にはなりたくない。
権力争いは嫌い。

普通に人間の男を虜にして、楽しみたい。それだけ。」

デビイーのひざ下の傷は全く消えてしまっていた。
肌の色もよりいっそう光り輝き、
髪の毛からオーラがにじみ出ている。

しばらく待った。そして薬を洗い流した。
惨めな気持ちで、デビイーの体を見つめていた。
「パワーが体中から湧き出てくる。うそみたい。」

確かに俺の力でデビイーは傷を修復し、パワーアップした。
カーリーにも同じことが起こるはずだ。
「じゃ、カーリーを探しに行こうか。」
「いいわ。明日、朝から早速出発ね。」

今すぐに、といったかったが無理を言える立場でもない。
服を着て浴室を出ると、騒がしいわめき声が聞こえた。

広間に男たちが集まっていた。
返り血で赤く染まったシャツを着ている男も何人かいる。

凄惨な現場が十分に想像できる。

彼らは誇らしげに自分たちの蛮行を叫んでいた。

女や白衣を着た軟弱な男たちを殴り殺した。

何十人、いや百人近くの人間を血祭りにあげた。

小さな女の子だけ連れて帰ってきた。

引き上げる時に火を付けてきた。

これを全員が繰り返し叫んでいた。

どう見ても頭がよさそうには見えないが、
体力的には動物的な強さを感じる連中だ。

確かに小さな女の子が一人、ぽつんと突っ立っていた。

彼女は興味津々で辺りを見回している。

どうも親等が殺されたとは思えない態度だ。

そして非常に理知的な表情。

ララが男たちを静めて、解散させた。

女の子に近づくと、何か話しかけた。

そして抱き上げた。

ララがおれの方を向いて、言った。

「部屋に来て、この子の話を一緒に聞きましょう。
きつと、とても興味深いわよ。」

奥の奥、さらに奥に秘密の小部屋といった趣向の、

応接室のような部屋が現れた。

「中に入ると、完全に外と遮断されてるから、なんでも安心して話せるの。音やテレパシーだけでなく、あらゆる種類の感知器をシャットアウトしてくれる。安心して話が出来る場所なの。」

「以前、同じような部屋を使ったことがあるよ。カーリーやレイラが利用していた。」

「あの部屋をモデルにしたのよ。」

「それにしても、デビイーのパワーアップ、ただ事じゃないわね。傷が完治しただけでなく、あんなに輝くほど強いエネルギーを手に入れるとは思わなかった。あんたって、やっぱりすごいね。」

「俺もおどろいたし、自身が持てたよ。」

あれなら、カーリーの負傷にも効果がありそうだ。早く探し出して助けたい。」

女の子が俺を不思議そうに見つめている。そして初めてしゃべった。

「あなた達って、すごくロマンチストね。」

でもカーリーの状態は簡単にはいかないわよ。

普通だったら仮死状態になるはずだったんだから、それを強引に打ち破った生命力はたいしたものだけど。あなたの意味不明な力で、どの程度、具体的な結果が出るのか、楽しみね。」

なんという話し方をする子供なんだろう。それに、まるで自分が直接プロジェクトを指揮したかのような、自信たっぷりの態度。

ララが薄笑いを浮かべながら、話し始めた。

「この子は予想外の掘り出し物。」

どうも新しいタイプの人工的な人類らしいの。たぶん真由美がベースになっているとは思うけど、何をどう加えたかは、種明かしを待つことにするわ。」

「真由美の子？速水Fとの間に出来たのか？

不可能だったはずだが。」

「違うわ。そんな普通の人間同士のようなことではなく、高度な科学の結晶としての真由美の子供なのよ。」

「なぜ真由美の子供だという確証はあるの？」

「推測よ。真由美は人工的な唯一の女性、

それを基本に次の世代を作る。自然な流れだわ。真由美の長所を残して、欠点をカバーしていく。」

「普通の人間かもしれないだろう。

知能は高いし、会話も理知的で大人びているが。」

「ちがう。私達美人花にはわかるのよ。」

普通の人間や天然の生物とそうじゃない生命体。知覚で判別できてしまうのよ。」

「そうか。」

「ちょっと、話の途中ででごめんなさい。

面倒な話は時間の無駄だと思うの。」

今度、私が全部説明してあげるから、

どっちみち、しばらく私達は行動を共に
せざるおえないんだから、時間はいくらでもあるわ。」

「どうして一緒に行動しなければ、と思うんだい？」

「あなた達のグループにとって私が貴重な存在だからよ。
自分で言うのもなんだけど、私の知識、推理、予測、
観察、分析、対策、どれをとっても超一級よ。
あなた達にとっては何よりの味方になれる。」

「本当かい？じゃ真由美は今何処にいる、君の・・・」

「素材元ね。ある意味母とも言える存在だわ。」

「助けたいだろう？」

「まーね。優秀なファイターだし、みんなに好かれている。

私も好きよ、彼女のこと。」

「それで、何処にいますと思う？」

「ほら、もう私の意見に頼っているじゃない。

簡単な事よ。カーリーが管理できる、目立たない所。

あの場所からそんなに遠くない。もう察しはついているのよ。」

「じゃなぜ、助けに行かなかったんだ。」

「理由は二つ。カーリーにうちの部隊が勝つ可能性がなかった。
それから、あなたたちをおびき出して、捕獲したかった。」

「でも失敗した。」

「私には予想通りの展開よ。ここへ連れてこられるのも。」

「望んだストーリー？」

「そう。結局、真由美以外に役に立つ奴が誰もいない

ガラクタの組織より、この美人花達と連携をとったほうが、
はるかに得策。だから懷に飛び込んで、口説いているのよ。」

第五十三章 天才ヒロ

「まだ名前を聞いてなかったわね。」

「ヒロ。馬鹿にしてるわよね。もっとなんかさー。あるんじゃないの。それっぽい名前が。」

たぶん、真由美は今でもヒロキを忘れられないのね。人間みたいな暮らしがそんなにうれしかったのかしら。あんたの名前から名づけたの丸出しでしょ。

耐えられないけど、ちゃんとした名前に改名するまで、辛抱するしかないわね。

なんか、ずっとこの名前で呼ばれてるから、馴染んじゃってるし。」

話し方が少し感情的で幼い面も見えたのでほっとした。しかし、真由美の俺に対する気持ちがいかな形で伝えられるとは、うれしいのか、重たいのか、よくわからない気分だ。

「とにかく明日、真由美とカーリーに会いに行きましょう。あと、知ってるかもしれないけど、

美人花を捕獲する仕掛けを考えたのは、私なのよ。私、すごく美人花が好きなの。もうマニアね。

だからとことん調べたの。手の入る資料はすべて読んだ。攻撃力、運動能力、テレパシー、媚薬、毒性、繁殖、等等。有名な美人花もしってるわよ。

レイナ、レイカ、レイ、他にもいっぱい。

みんな綺麗で強くて大好きなの。そして欲しくなったの。それで捕獲する方法を考えているうちに弱点を見つけたの。」

「あなたの化学の知識は半端じゃないようね。」

「得意分野は化学だからさあー、

それにしても美人花の生みの親の佳苗博士。

あの先生にはあこがれるわ。天才よ。独創的よね。」

よくしゃべる子だ。だけど嘘はなさそうだ。

ヒロの考えどおりに、明日カーリーたちが潜んでいると思われる場所に行くことになった。

ヒロはとりあえず、他の美人花たちが面倒を見ることになった。俺も部屋をあてがた部屋でゆっくり眠ることにした。ベッドに横たわると泥のような眠りに落ちた。

朝、目が覚めるとそこにデビイーがいた。

「いつから、そこに？」

「さつき、1時間くらい前から。」

「1時間も、ただ座っていたのかい？」

「わるい？」

「どうしたんだ？きのうのことなら、・・・」

「途中で跳ね除けて、ごめんね。」

せつかくその気になってくれてたのに。」

「いや、君が正しいよ。」

「でも、あなたは私の恩人。」

「そんな、大げさに考えるなよ。」

「とにかくあなたに御礼をしなくちゃ。」

着替えて、広間に行くと結構な人数が集まっていた。ララが前で指揮を取っている。横には小さなヒロがいる。ララが俺のほうに歩いてきた。

「昨日と同じように、あなたとデビィが先に行って。ただ今日は頻繁にテレパシーを送るから。ヒロのいうことを信じて、搜索してみましよう。」

後方部隊はミューク達や亜佐美達との戦闘に備えている。何もなければそのまま静観するということだった。

昨日と同じバイクに乗って俺とデビィーは目的地に向う。ヒロがナビを見ながら指示を出す。それをララがテレパシーで伝えてくれる。

この方法なら情報は漏れないから、追跡はされない。しかし、待ち伏せされている危険はある、というのがヒロの考えだ。

ララはヒロから得た情報を要約してテレパシーで知らせた。

ララによるとヒロの能力は一流スパイ並みらしい。的確で観察力も素晴らしい。推理も理論的で結論の出す肩も柔軟性に富む。

ヒロも真由美も亜佐美の組織の中心に位置していたが、ある時、協力者数十人と組織を脱出した。この裏切りに対して、何故か組織の反応は静かだった。

泳がせて、時機を見て漁夫の利を得る、これが亜佐美の戦い方の基本。無反応の理由はこれしか考えられない

裏切ったメンバーのうち数人がミュークの組織に取り込まれた。

もともとヒロに美人花の研究の資金を出していたのは亜佐美で、その膨大な資料は亜佐美の所の研究室にある。

そして、ミュークの組織に取り込まれた連中の中にも、当時の研究者がいる。

つまり、美人花に対する兵器が完成するのは時間の問題で、いずれ、どの組織もそれを使うことになるだろう。

ヒロの情報はさらに続く。

亜佐美の妹、リサの所在もわからなかったが、ミュークの組織に捕虜として捕らえられていた。そして、精神に異常をきたして自殺した。

誰も同情するものはなかった。俺もそうだ。

ヒロは隠し持っていた情報と図抜けた知識で、美人花捕獲の仕掛けを考案した。真由美が少し改良を施しただけで、完成した。実際カーリー以前にも5人の美人花が生け捕りにされている。

彼女達は冷凍状態で保存されている。

そしてカーリーの場合は失敗に終わった。

完全な冷凍状態に持ち込めずに、逆襲されたのだ。

たしかに、カーリーも相当なダメージが考えられる。

だが、ヒロの計算を上回る能力を持ったカーリーに対して、驚きを隠せない。

他にも有益な細かい情報がいっぱい、あるらしいが。俺には関係ない、か知らせたくない、どちらにせよ、それ以上の内容は俺には話さなかった。

しばらく無言で進み続けた。

（まずいわ。ミュークの精鋭部隊がすごいスピードで追跡している。車2台、バイク3台。）

ララの緊張感が伝わってくる。

（ヒロによると、連中はまだ、対美人花の有効な兵器は持っていない、もしくは完成していない。だから、優秀ではあるけれど通常戦闘要員を派遣した。結論は、ララが合流すれば勝利の確率が高い、ということ。）

（間に合わない、あと10分ほどでカーリーのいる場所に行けるのに。）

あと3、4分で追いつかれるわ。）

デビイーが厳しい調子でたずねる。

（後方部隊は何分で合流できる？）

（6、7分はかかるわ。隠れるか、戦うか。まかせるわ。）

（わかったわ。やるしかないってことね。）

所詮子供の立てた計画、頼りすぎたのが失敗だ。

あまりにも無防備。危険すぎる。

デビイーがどれだけの力を持っているかは知らないが、少し無理があるような気がする。

（心配しないで、私も一通りの美人花の攻撃パターンは使えるし、

運動能力もAクラスなんだから。

あなたは大人しくじっとしていてね。もしもの時も無茶はしないで約束して。相手も絶対あなたは殺さないから。」

あなたは殺さない、というフレーズが引っかった。

俺達はバイクを止めて、少し離れたところに身を隠した。たぶん生命反応のセンサーを持っているので、隠れても無駄かもしれない。

やがて、バイクの音がだんだん大きくなってきた。やはり俺達の隠れ場所をはつきり把握していた。そこにピンポイントで集合してきた。

デビィーが飛び出して、バイクに乗っている一人に攻撃を仕掛けた。その男は分厚い白い防護服を着ていた。デビィーの一撃で少し生地が切れたが効果はなかった。

バイクは転倒したが、すぐに体勢を立て直した。その背後に回ったデビィーが抱きついた、というよりも、巻きついた。生地破れた箇所を何かでえぐっているようだ。

その周りを2台のバイクが回っている。

手に短い槍のような武器を持っている。

カシャ、という音の空気を引き裂くような音を発して、2本の槍がデビィーに向けて放たれた。

デビィーは身を翻して草むらに転がり込んだ。

第五十四章 カーリー復活

二本の槍はデビーが巻きついていていた男を貫いた。

2台のバイクが向きを変えて銃を手にした。

デビーに向けて走り出すと銃を打ち込んだ。

2セットの大きな網が、回転して広がりがりながら草むらに落ちた。もがきながら苦しむデビーの声が聞こえる。

「動けば余計に絞り上げるように作られているんだ。

お前らのやわらかい体なんて、すぐにばらばらになるぞ。

あきらめて、じっとしてろ。殺しはしない。」

俺は、タイミングを見計らって、さっきの槍を手にした。

そして片方の男めがけて走った、槍を振りかざしながら。

男の一人が振り返って俺を確認すると、にやりと笑った。

「ばかめ。」

男が何かをしようとした瞬間、何かが男の頭上を飛び越えた。

「カーリーだ。」

もう一人の男が叫んだが、次の瞬間静かになった。

二人が静かに倒れた。

（何もいわないで、まだ車が・・・）

2台の車が並んでこちらに、ゆっくりと近づいてくる。カーリーらしき黒い影が低い姿勢ですばやく車に近づく。

そしてフロントガラスに何かを投げつけた。

車が迷走した後、男達があわてて出てきた。
手にはマシンガンのようなものを持っている。

男達の顔面にカーリーの攻撃が立て続けに行われた。
男達は視覚を奪われて、あわててヘルメットを
脱ごうとしていたが、防護服が強固にできていて、
それを許さなかった。

カーリーは確実に一人ずつ息の根を止めていった。
静けさが辺りを包む。

（すぐに援軍がやってくる。早く移動しないと。）

（カーリー、元気になったんだね。）

（いいえ。まだまだ。体は50%回復したけど、・・・）

俺がカーリーに近づこうとすると、後ずさりした。

（見ないでほしい。醜いわたしを。全然元に戻れない。）

（俺の力を使ってくれないか。たぶん上手くいくと思うんだ。
お願いだ、俺に君を抱かせてくれ、俺をつかって治してくれ。）

俺はひざまづいて祈った。涙が止まらない。

自分に酔っているわけではない。

カーリーの自己犠牲的な愛が俺の心の痛みとなって、
涙が止まらないのだ。

暗闇からゆっくりとカーリーが現れた。

カーリーだとわからないほど、髪の毛は抜け落ち、
顔の皮膚はどす黒く、目の周りの皮膚が焼け爛れたようになってい
る。

体も骨や皮膚が異常な形に見えた。猫背で足も曲がっている。

俺は平静を装った、そして歩み寄って手を広げて近づいた。
カーリーが俺の薄い胸に飛び込んできた。
骨でこつこつしている。

俺のせいで、こんなことになっているカーリーを何としても、
助けたい。深い愛情が体の奥底から湧き出てくる。

彼女と抱き合いながら、つぶやいた。

「俺とつながるんだ。君のすべてを使ってつながるんだ。」

「本当に、いいの。」

「はやく、急ぐんだ。」

「わかった、ありがとう。」

カーリーの細い繊維が俺の体をまさぐり始めた。

ちくちくと肌を貫いていく。

前とは違って、やわらかさがない。

俺は焼け爛れたようなカーリーの唇にキスをした。

深く深く、暗闇の向って落ちていくような感覚。

すべてが吸い込まれていくのが、心地いい

気が遠くなってきた。死んでもかまわない。

カーリーが元に戻るなら。

俺は激しい情熱で愛を注いだ。死を恐れずに全力で精神を集中した。

カーリーの顔が見る見る生氣を帯びた、どす黒い肌がみるみる変色していく。

絵の具が落ちるように美しいピンクの肌が現れてくる。

目の光が輝きを増し、吸い込まれそうな深い瞳が蘇る。
髪の毛の先まで泥を落としながら喜びを語りかけるように、
空中を舞う。滑らかで艶やかな髪の毛が出来上がる。

這うような低い姿勢が次第に、ほぐれて、起き上がる。
背筋が伸びて、足に芯が入ったようにスラリとのびた。

俺は全精力を使い果たした。崩れ落ちる俺をカーリーが支えた。
満足感とともに意識が薄れていく。
失神した。

これは夢の中なのか。
俺の体を羽のような柔らかな感触が包んでいる。
甘い、優しい香りが俺を包む。幸せな感覚が満ち溢れ、
悦びの満足感に全身が浸っている。

突然、俺の脳が揺らされた。
誰かが俺に呼びかけている。
きつと、愛するあの女に違いない。
でも、あの女つていったい誰なんだろう。
半分眠ったまま、ゆっくりと目を開けた。

そこに、あの美しい精悍なカーリーがいた。
その姿を見て喜びがあふれ出た。
俺を見つめていたカーリー二それが伝わった。

カーリーがそっと抱きついてきた。

おれも応えて力強く抱きしめた。

自然に涙があふれてくる。

カーリーも泣いた。

美人花の中には、涙が出ないものもいるらしい。

ここは、病室らしい。

医者はいない。

いるのはカーリーだけ。

何日か昏睡していたのだろうか。

「6日間よ、とてつもなく長かったわ。

元気になるのはわかっていたけど。」

「よかった。君の役に立てて本当によかった。」

「あなたに助けられて、幸せ。

これからずっと、あなたのために生きていくわ。」

「それは少しオーバーだけど。ずっと一緒にいたい。

本当にそう思う。」

ふと見回して、ガラス張りの部屋にいることに気づいた
無菌室的な扱いで隔離されていたらしい。

ガラスの向こうで、俺達を観察しているのは、

ヒロ、デビィー、ララ、そして・・・真由美？

「真由美？何故ここに？」

第五十五章 女の混線

「これから真由美と、私達一緒に暮らすってどう思う。」

「どういう意味？」

「彼女を拘束して、縛り上げている間に、色々尋問していて気づいたの。」

私と真由美はそっくり、似たもの同士。共通点がいっぱい。だから分かり合って友達に、いやそれ以上になるべきだって。そして、説得し続けた。」

この二人が似ている？そうだろうか。

あまりぴんときない。

確かに二人とも動きが俊敏で・・・美しい。

「私達は、あなたを愛している。

更に私達は利用する為に、人工的に作られた生命であり、たった一人の新種、孤独な存在。

私達はお互い分身のようだわ。」

「真由美はどうしたいって？」

「あなたの気持ちしだいだって。どうする？」

「俺にはわからない。うれしいけど、

やっぱり、不自然かなって。」

「周りを見て。ほとんど不自然な奴ばかり。

普通の生活なんてこの私達とは無縁よ。違つかしら。」

「でも男が俺だけで・・・。」

「大丈夫よ。ジェラシーはないし、二人であなたを愛して、

お互い仲良く助け合っていていけるはずよ。」

カーリーがじっと俺の目を見て話している。

こんなに綺麗な目をした女は他にはいない。

吸い込まれてしまいたい。深い輝きの奥の奥に。

カーリーは俺の思考を読み取って少し照れた。

でも嬉しそうに、はにかむ態度を見せた。

「実際、こんなにすぐに全快できるとは思っていなかったし、綺麗な姿に戻れるとは考えていなかった。夢みたい。」

飛び切りの二人の美人と、愛し愛され楽しく暮らす。
なんて都合のいい話だろう。

きっと自分は幸運で卑怯な男なのだろう。たぶんそうだ。
いつか報いを受ける日が来るに違いない。

その日まで楽しむのか、それとも今舞台を降りるのか。

「あんまり待たすと可哀そう。真由美に入ってもらうわね。」

カーリーが合図を送ると、真由美が部屋に入ってきた。

俺の顔を覗き込んで、微笑んだ。

しばらく黙っていた。

懐かしい美しさ。偽の記憶を背負っていたが、あの平和で幸福な時間。

偽りの暮らしとはいえ、あれが一番幸せに近かったのかもしれない。
黙って真由美を眺めていたかった。

「もう二度と、あなたから離れるようなことはしないわ。カーリーのおかげで、はつきりとわかった。無理するの、やめたの。自分をだますのは、もうたくさん。あなたを忘れようとしたけど、無理だった。」

俺との思い出が、そんなに深く刻み込まれているとは、意外だ。なんの魅力もない、くだらないこの俺の。

「あなたを一番よく知っているのは私よ。かりそめでも、夫婦として結構長い期間暮らしたんだから。」
「その期間の記憶と、それ以外の記憶はちゃんとつながっているのかい？」

「ええ。亜佐美達と一緒にいた時に、記憶を戻してもらったわ。真由美と沙耶、どちらも私よ。」

「でも、記憶を戻すのは、確か不可能だつて。」
「普通の人間ならば発狂しているでしょうね。私は普通じゃないから。」

体も脳も、人間の女とは違う。」

悲しそうな表情が美しい。

「私が邪魔？嫌い？」

「とんでもない、君のことを忘れたことはない。」

「それは本当よ。私が保証するわ。」

カーリーが口を挟んだ。

俺とカーリーと真由美は奇妙な生活を始めることになった。もちろんヒ口も。

ヒロはカーリーに夢中だ。

理想の美人花、それがカーリーだ。

身体能力、状況判断、分析能力、すべてが素晴らしい。

ヒロはまるでアイドルを見るかのようにカーリーを見つめた。

俺と真由美が仲良くしている時、ヒロはカーリーにべったりと、くっついて離れない。

俺とカーリーがいちゃついている時、ヒロは真由美と遊んでいた。それなりのバランスが取れていた。

しかし、デビィーは心穏やかではなかった。彼女は相変わらず俺の世話をしてくれていた。

つまりデビィーも一緒に住んでいる。

しかし、俺には強烈な二人の恋人が同居しているのだから、何かと愛の交わりが始まってしまう。

カーリーとの交わりは、俺に底無しの精力を与えてくれる。

そして俺は真由美にも頻繁に挑む。

デビィーはその度に溢れるような喜びをテレパシーで知らされ、その奥深い快感の世界を体感することになる。

特にカーリーとの営みは激しい。まるで竜巻に吸い込まれているようだ。

無限の悦楽は命のジェットコースターのように感じる。

逆に真由美との営みは静かでやさしくて、愛情に満ちている。本当に俺を癒してくれる。

デビィーは毎日のように繰り返される愛の交歓に徐々に

心が乱されて、驚きと憧れが入り混じった、複雑な感情が芽生えたようだ。

デビィーは一大決心をして組織から飛び出そうとしたが、ララに見つかって、阻止された。

デビィーは悩んだ末に決心した。

（カーリーと対決しよう。そうすれば勝っても負けても、すっきりする。

そうでないと、このままでは私はゆっくりと発狂する。

そう、私にもはつきりレイナの愛の残像が刻み付けられている。

あの男が愛おしくてたまらない。愛したい、愛されたい。

あの時、拒否せずに受け入れていればよかった。

もし勝つことができれば、次は真由美と戦う。

私が二人に勝つことはないだろう。でもかまわない。

むしろ私は死にたいのかもしれない。）

デビィーの思考はすぐにカーリーが読み取った。そしてララも。

俺達とララで話し合うことになった。ヒロも同席した。

ララは困り果てた様子だった。

「どうすればいいのかしら。あんなに思いつめるなんて。

私の責任だわ。彼女はまだ幼いし非力。

それに本当の修羅場を経験していない。

妹のつもりで大切に育ててきたのに。」

「それなのに、何故彼の世話役にしたの？」

真由美がじれったそうに口を挟んだ。

「私の考えが単純で甘かったわ。

上手く二人が交わってくれればと思ったの。

デビィーの能力をあげるのには一番の方法だし、

彼がそれをきっかけに、組織にとどまってくれれば何かと都合がいい。」

「でも彼女が深い関係を拒否したとき、離すべきだったのでは。」

「そうね。デビィーも嫌いで拒否したわけではないので、

またチャンスがあると思ったの。ばかね、私。」

ずっと黙って聞いていたヒロが口を開いた。

「美人花がどんどん人数は増えていくのに、

恋愛の対象になる男が、いつまでたってもヒロキ一人だけ。

こんな現状を変えないと、上手くいくはずがない。所詮無理よ。

ってことで、私にいい考えがあるの。

以前から研究したかったことなんだけど。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5891e/>

美人花

2011年12月29日22時47分発行